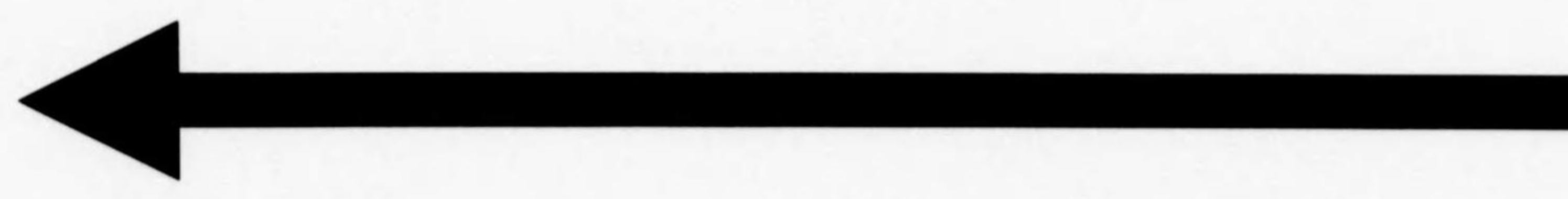


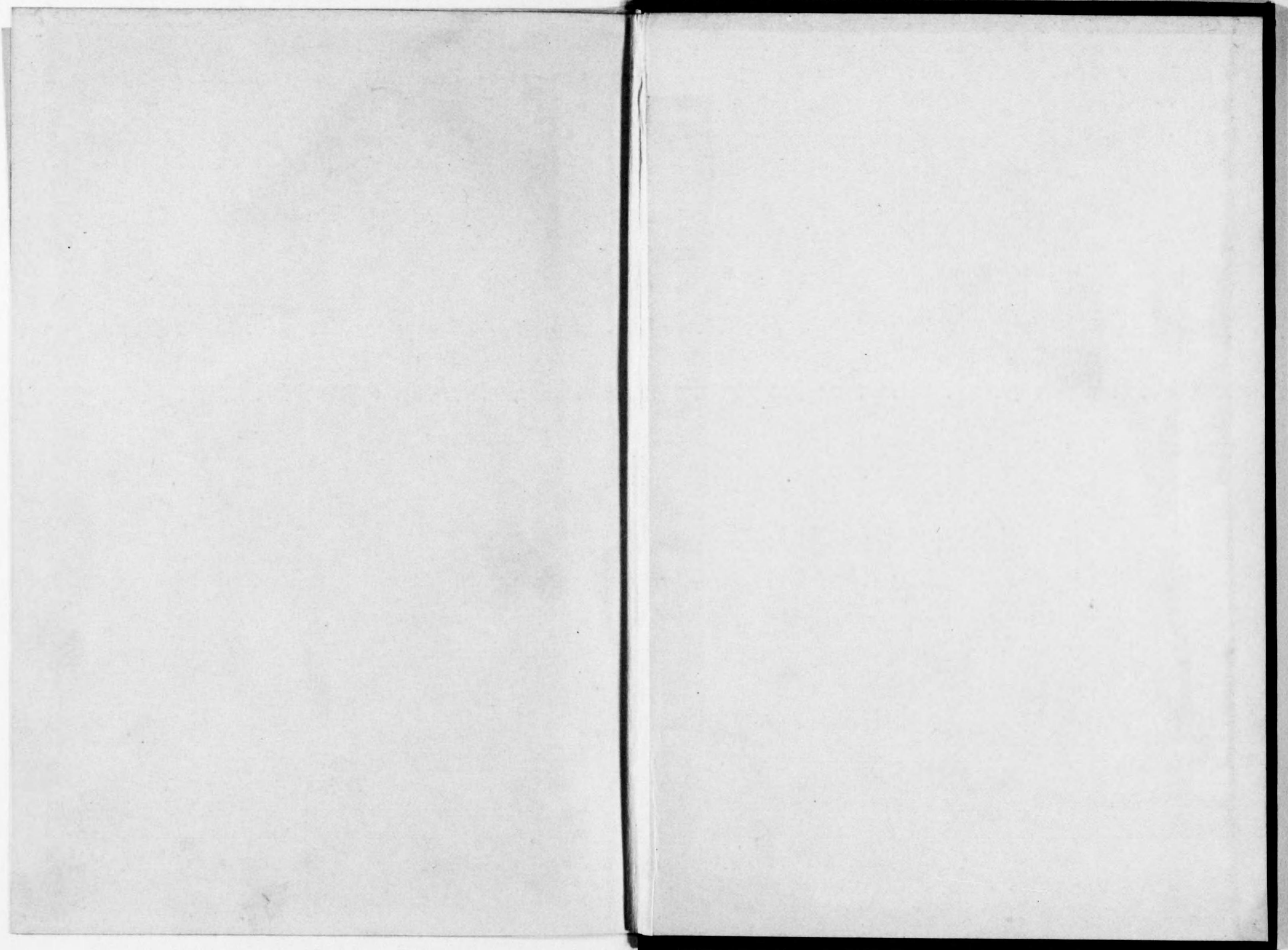
64-265
1200501278142

64
55



始





64-265

川路聖謨文書 第二

目次

一 玉川日記 全

自弘化二年二月十八日
至同年四月廿四日

一頁

○普請奉行として武藏玉川地方巡視の日記なり

一 寧府紀事 第一

自弘化三年三月四日
至同年十二月廿九日

一三

○奈良奉行として赴任の途に上るや養父母と妻子を伴ふも實母は江戸にあり故を以て其孤懷を慰めんが爲めに日々の行動を細叙して江戸に送り殆んど十年一日の觀あり寧府紀事即ち是れにして今弘化四年以後は次巻に譲る

目次

一

川口藩文書 卷二

目次

玉川日記

弘化二年二月十八日 晴 武州羽村に立出いたす供立等平日之通にて具

足爲持候而已ることかはれる也用人は高橋茂兵衛給人供頭を兼候而今井

貞助侍高橋順之助内藏之介其外徒士押等也未明に髪なと結ひしたく調而

白衣にて参る四谷大木戸の會所にて見送りの家來共暇遣しこゝより内

供計にて内藤大和守屋敷に参り分水口等見分いたし夫が戸田越州之屋敷

にも参るこれも前に同しいつ方にもうら打たる上下着し家來共罷出居

候夫が上水の溝にそひて村々の分水口等うち見つゝ代田村會所に参り小

休いたすこゝの水見守るものは八十五歳なりといふ至而健也老人のこと

故暇遣し其子新左衛門を案内として罷連候下高井戸村にて晝食いたす夫

が下野中新田に参り止宿いたすけふの途中は更にみるべきところなし吉

玉川日記 (弘化二年二月)

祥寺村の松林よし小金井村は名高きさくらのあるところなれと少し色附はかり也さかりの程おもひやらる一里半餘の間也なりと云○野中新田の旅宿は六郎左衛門といふ名主にて宅もよろしくくらに米多くつみあり庭には玉川上水をせきいれてかけひのおとたえすきこゆ○けふの途中ことに暖氣也みちにてわた入を一ツぬきけるか歩行にてはあせ出てなつの如くなれば又小胴着をも脱きてわた入一にて歩行せし也○六里餘といへとも東海道などゝは大に違ひいかにも遠し上野中へ参りたるは七時頃なるへし

○十九日 晴 股引半てんにて羽村御役所まで歩行いたす○境村の小休へ下奉行橋本惠次郎以下之もの出迎いたす夫々相應及挨拶候所々の分水口見分等昨日の如し○昨今のみちに新田の號殊に多しよつて案内のものにきくに元文之度彼武藏野てふ曠野をひらかれて新開に成り二十ヶ村二萬石之新田出來たる也勿論畑多にて田は至而少く永□りの場所也といふ

され共本田の半分ならては御取箇もなき故に民繁昌し今にいたつて高壹石に人壹人と申候よりはいつれの村かたも人別多しといふ享保元文之頃の人の才力中々以後世より可及あらず又玉川より水をせきいれたらば田にひらくも安かるへきを畑にせしなと小智の不及ことあるへし今よりみれば何故上水をまし田にはいたさぬかと疑おもふ也され共既に元文之末に至りたちまち二萬石の新開せし程の人共打よりてのことなれば中々凡智を以手を附たらは存外の弊可出もしられぬ也かゝる實事の有餘もありてこそさくらはも植けるなるへしけふはきのふにかはりさくらの中絶せしよりもこれ程の新開を容易につくり出したる役人の智惠の今にひきくらへては立まさりたるを深耻おもひてかのさくらの□□ひは兎も角も本末の理をおもひて歎息せり○羽村の御役所は江戸に上水分水四十三わくと申候有之候上の水神社の脇にありこの水神社瓦屋にて相應之宮也ひらき門にて御玄關^て所等あり詰所體の場所は十二疊の^とこちかひ棚にて立派なること也湯殿其

外ともありて都合よろしく不自由なることなし是も上之御威光の御餘光にて難有こと也

○廿日 くもり 四頃よりも引半てんにて御普請所見分いたす玉川のは、三百間もあるへし上流より川向ひなる丸山といふ所は突當りて其勢にて又羽村のかたに附添來りてせき口は流入る也丸山といふは麓を半玉川にあらはれて半はかけおちたり阿蘇の宮といふは御朱印地なれ共社人壹人にてあるかなきかの體也是は

御朱印地は川欠に成て收納もなき故之由也あその宮の古き尙のこれり檜わたにてよろしき社の敗壞せし也此邊居村の體にてみれば附より涉て普請せしか如くなれ共いつれも古田なりといふ左もあるへし字山王森などいふ所ははつかに木一二本はかりのこりたる計也され共三田雅樂助か古墳あり是は御朱印地一本院持にて其院號は則雅樂助か法號也といふ雅樂助の墳は應永三十一年のものなりと云

○けふひるせいこの煮物をつくるところ有合のものもて賄候へところいひけれ已後は海魚用ゆへからすといひ示し遣しぬ序にとふに江戸にも十三里川崎にも神奈川にも十三里あるといふ○昔この堀割をつくりしにかほとこの勢なりけむいかせしといふに棟梁はしめ知るものなし只かたりつたふる所は玉川の水門と御城のやくらの屋根と見つもるに尙水門のかた少したかしといふまことにや凡十間壹尺の勾はいにては十三里餘にて八丈四尺程なるへし御やくらの高さと同じかるへきかわれこゝまでみ來るに玉川の上水の流しつかにてよとむとみるははつかにていつかたもけしからぬとき流なり十間壹尺の高低にてはかゝるへきかためしみぬこと故しらぬ也○玉川の高札は元文中なれば是も享保の頃の人々の手をいれられたるものなるへし○御役所の門前に水神の社あり何を祭りけるやしらすといふよき社にて彫なとあり石燈籠等は天保のはしめにおさめ候もの也○玉川の水はあくつよきか如しけふかけこゝろみるにとかけ升

に於四百七拾三匁あり田所の井戸は四百八十三匁なり天保十亥年三月井上備前守か來し時も水をはかりみしに上水は壹升に付四百四拾目井戸は四百六拾七匁ありといふ尤其時の升はとかけ升なりしかしれぬ也○前にいふ山王の社石にて三尺四方程もあるへし龜末のかきりとも可申され共御朱印十三石の社也といふ○けふはいかにも暖氣にて單半てん一にて汗出候

○廿一日 朝晴午後雨 青梅邊まで川筋見分として參る江戸計にて田舎をしらぬ人ならばさそめつらしかるへき山水はいつくも似たるもの也青梅のまちはよろしき所也青梅の宿より一里計に萬年橋といふ所あり是は長二十間高六丈餘あり甲州のさるはし信州御たけの氷か瀬の類也松杉の山を下り谷に臨みたる所に双方より大岩出たるにくみけたにて橋をはね出したるもの也中へ行とはしゆれてふらくとし大に酒に酔たるものゝあしもと定らさるかことしその橋をわたり河原へ下り休所とてこしかけ

なとならへありそこにてしはし小休いたすこゝは山家なからさすか信州のことくにはあらず山上に料理茶屋體の二階屋ありそののき場の風鈴をみあけたるけしき或は川上岩石にて屈曲したる中をいかたおし下すさまなどはまた近きわたりの風景にはあるへくも覺へす江戸より七八里計ならば人のみに來る所なるへけれとも日本橋より萬年橋まで十四里といふみち故人のしらぬなるへし○この邊桃を多くつくる山々谷々にみゆるけしきよし二またをといふ所は萬年橋より半道なるかこゝにいたれば一二里か間目のわたる所みな桃園なりといふけふ兼而は行積なれと萬年橋に至りける頃より雨ふり出て百姓共を勞するかいかにもくきのとく故こゝより歸りし也山村の桃あるあたりに所々けふり夫にはる雨のくも打かゝりたるけしきなといふへくもあらずあはれ順作をつれなはふてをとらさすへきにいとくおしきことにそ○青梅村は民家に梨花夥ありおしむらくはいまたさかさりき○所々の小ふしのはなひ岸さくらさかり也○昨

夜ひとり書をよみて居しに廿日の月窓のひまもり玉川のおと殊更にさえ
てももの静なるに鳥かしらすひはりに似たるかことくにてひはりにもあら
ぬめつらしくいとおもしろき聲きこゆ家來にきかむとおもひしかとくに
ねたりよつて今日きくに川千鳥なりといふよるく月になくもの故かた
ちはしらす只川千鳥と計いふと羽村のものは答たり是をき得しはこた
ひの旅のうち第一のめつらしきことなり家つととして人にも聞せまほし
きは此聲さては萬年橋のけしきなるへし羽村より三里餘川上へ行みちは
川邊の體まつわかみしところを以言評せはきその小なる穩なるなかめな
るへしか宇治の川かみなとかゝるけしきかいかこの邊一斤貳朱以上之
茶も近頃出來申候茶は水のよき所よろしとまことにや

○廿二日 雪 狭山か池の様子見に參る隣村箱根ヶ崎村也雪中のけしき尤よろし水
面二三百坪もあるへしなか／＼上水の助水等になるへくともみえす可疑
こと也ふるき圖に 池敷十四町四反一セ廿七歩とあればいにしへのこと

おもひやらる所々にいまた芝地はのこりて畑となれるもありこゝにて箱
根ヶ崎村の名主の宅にて小休いたし夫々歸りかけ同じ村の畑のうちにあ
る加藤八幡の參詣天正十一年四月十一日此所にて討死せし北條の家來加
藤丹後守を八幡にまつりしと云上り藤に三ツ目ノ紋ある石碑に眞常院殿
前丹州大守傑宗道英大居士とあり是はとし月しれねとも甲陽郡内上野原
宿建塔之加藤最次郎景次とあればこのものゝ至近く追諡せしなるへし
脇なる大木の下に五輪の古墳みゆ是そ昔のものなるへけれとも 彫せし
ものもなし往來共に肩輿にのらす陣笠油衣に歩行也歸りても雪やます
玉川の向ひなる山とこゝの木々には雪つもりなから川つらは更に雪なく
けしきいはむかたなししはし官邸の庭の築山にとり居たりしかさむさ
にたえすこは酒のまむものゝ居るところかはとて下りし

○廿三日 くもり 五時羽村出立いたし拜嶋村柴崎村等を経て府中宿に
いたり止宿ひるかれいゝは柴崎村にてたうへ候此亭主名主次郎兵衛とい

ふもの也居宅よろしかけ物は雪舟にて茶のしけきぬ角のちく屏風はなみの青帯にてはりたる龜末なるもの也され共書は季鷹南畝或は堂上方伊川の畫其外いつれも名あるものとみゆ膳はくろぬりなれ共一汁一菜にてひらはなに薯蕷鹽たらを用ひ飯はちは新なる下さまに用ゆる結をけ也この家にぬり飯ひつにことかくことのあるへきよほとこゝろを用ひること也よつて家來に申付みち／＼爲聞しによきこと也といふ○けふ行みちの邊故に拜嶋村の車や藤三郎方々參りみる是はとなりのなみ／＼の水車屋よりくるまの軸を引出し夫へ種々のくるまを仕かけいによりかくるもいとくるもわくぬまくもみなくるま也是は蚕所にてみなすることかしらねともおもしろき也玉川の水上水をとるかぬるところにては船へくるまを仕かけて川口つなきこめをつかする也めつらしき事也○柴崎村普濟寺にて延文中の八角石碑をみる彫絶妙也くわしく江戸名所圖にみゆる故こゝにしるさすいかにも珍物也普濟寺は城あとにつゞきて其上玉川口のそみ

よき所也みところあり

○廿四日 風雨 もゝ引半てん陣笠油衣にて出立出懸府中六社に參詣神主を主に出迎等は斷遣す初尾三百文奉る神符來ることより高井宿手前迄參る雨彌甚しわらちもきれ候間民家にて人足のやすらひ居うち着替候ることより歸宅始終かこにのり申候

寧府紀事 一

弘化三年三月四日六半時南都に發足いたす天氣ことよろし茶紵縞の袴御紋附の羽織著用いたし虎の御門通りを參る品川釜やにゐ小休いたし七半時前神奈川宿に參著

一 出懸に見立として參り候人々の逢親類其外刀術又は學問の友或は兼る懸意なるもの共也親族ならて親敷ものは土屋大膳亮平岡圓四郎豊田定太郎佐久間修理中村左橘等也其外は書院并次之間使者之間に逢遣す○小普請方吟味役内藤五兵衛假役川崎又十郎は赤羽茶屋まで麻上下にゐおくり來り候小笠原太左衛門は門前迄おくり候○釜やに參り候もの共は友野雄助殿前田夏かけ其外親族又は諸家の使者或は輕き御役人等也

一 昔二十五歳の時京都へ三奉行懸りの吟味物にて被遣江州に參り候時

ははつかに上下七人にて上り中山道下り東海道を参りこの釜屋に休みし也木曾山の伐出御用として参り候時も徒三人牽馬くらひのことに又この釜屋へ小休せし也こたひは諸大夫以上にて家來共末々駕籠に乗るもの共まで上下都合二十三人對鍵弓銃炮迄をも爲持候はありかたき事也

一 神奈川宿の一同何のつゝかもなく参著妻さとは病中故ことにいかやとおもひしかかはることもあらず却ちこゝろすかゝとせしよし也尤少々頭痛の氣はあれとさしてのことにはあらずといふ

ふるさとのかへさに花をすてゝ行鷹をうへとそ思ふけふかな

うちよせてとく引かへす竹芝のうらのなみにや末ちきらまし

神奈川の臺の邊にも富士の人穴といふ所ありといふある人いひしは富士山の穴も金礦の出し所にて既にそこを金何峯とかいふといひし神奈川金川にていにしへ金銀銅の出しところなるもしるへからさる也

○五日 晴 天氣よろし昨夜はみなよく寝たり旅行の前はことしけ

きのみならず離別の情のありてよもねられさりし也きのふの夜はさそやよめのつかれたるなるへし孫の太郎子か我等をしたひしやいかに母上の御風邪のいよゝゝ怠らせ給ふやいかになといひてさとはしめみな袖のつゆ催せしことにそ母上の御顔をきのふとくとみ奉りたかりしかこゝろおくれてそのことのならすして立出たり旅立は親敷ものほと顔をみることにのなりかぬるもの也けさはいかゝあらせられ候や彌吉并よめ等よく心付候へかし○さとけさはこゝろよしとて飯三椀をたうへ申候此體にてはますゝ子細あるまし三卿老の良醫なることことに感心也○茂兵衛出立前きのふ取計行届候事にそ

六半時過に神奈川宿を出立いたす日の出のけしきよし少しく暈あり天氣如何哉とおもひしに晝後よりくもりたり大磯宿にいたり候處少々雨ふる○けふは相模川をわたりもろこしか原或化粧坂はな水橋等をわたるもろこしか原はうたの名所けはひ坂はな水橋などいふ所はいにしへは遊女の

ありしやよく草雙紙にていふ所也され共はな水橋けはひ坂とも名のみにて今は閑寂の地也少しく彌次郎喜太八のこゝろにて

はな水のむかしの姿老くちて水はな橋といふへかりけり

さとの不快大によろしけふは頭痛氣もなしといふ

○昔御勘定にて旅行せし時の事はいふもさら也吟味役佐渡奉行の旅行とても泊りへつけは寂寥たるのみにて手をうたねは家來も來らず只旅情頻に故郷を思ふのみなるに此度は養方々御兩親并妻次男等同道なればよほとさひしさも少下女も四人迄召つければ更に不自由なしふせ籠をかりて朝衣をあたくむるといふ故に旅といふものは可然ものにはあらず今夜よりは銘々衾の上衣をかさねて肌さむからぬとおもふものは著候へと教示し候○上下一同禁酒故やとひ方々もの共はいさしらす外には酒をのむものなしされ共御養父母様御隠居殊に常に好ませ給へは夜々酒を被召上候事也泊り休などにては用人共御輿にめさせまいらせ宿々にあは御住

居様なと稱していかにも御容體なる御こと也是も 上の御餘澤に潤ひてわかいさゝかの孝養のうちとも成ことゝおもひて御取立の身の難有ことをおもひしり候○此ほとうちねふること頻也こはたれもみな同じ是は三十日餘もうちねふりかねしか一時に出たるなるへし夫をおもひても留守宅の若きもの共夜分其外の用心専なるへし○そめの親さゝや伊兵衛の店前を通る相應なる旅店也夜に入旅宿へ機嫌聞として出る江戸ならばめつらしき鮮魚をさし出す○さとか藝州にて召仕ひたるこまといふ女はわか方々さとか嫁參り候時も附添三四日も居候もの也今は藤澤の田舎半みちはかりの農家の妻と成居たる也今たひの旅行を聞て名物のもちいひ菓子など携來て機嫌を聞五六年も遣ひたるものなれ共深切なること也○途中にて太郎くらひの兒の笑ひ或は泣を聞ては太郎かともおもふ事しはしは也是は余のみにあらずみなく同しくいふ也

○六日 雨 夜半より殊に大雨也けふは箱根の關を越て止宿するに關は

六時より六時までなれば雨にみち悪しきをたとり關前にて日くるれはみな山中に野宿することになる故家來共氣遣ち九ツ半過の目覺にて梅澤といふ所まで挑灯也雨しのをつくか如し酒匂川のれん臺越濟にてはや壹尺五寸も水まし上下一同わたり越申候馬わたりはとまりたり夫を小田原にいたりひる飯を朝五時頃にたうへ險阻の難所無滯關所の改もすみて箱根の本陣に着せしは七時前也○足からの嶺大雨に付行さき五六間はくも立かくしみちに五間も三間もある巖のあるなとみな山の常なれとめつらしと興しぬ○箱根に着せし頃は雨止て少しく夕日みゆる本陣は高との造にて湖水を庭にとりたるもの也庭の右のかたは權現の社みえ二子山湖水ともに全の泉水築山の如しみなくめつらしかり遠目鏡なとみて悦ひぬ湖水はさしわたし一里とかきしか水の體しのはすの池位にみゆる三方に種々のかたちの芝山取圍みて畫にも難成かことし女共のめつらしかりてよろこぶもうへそかし○今日のみちは難所殊に強雨なればいかにやとさ

とを案し候ひしか更にことなく夜食をもよく給候而夜に入手水を遣ひかねをもつけ申候かゝる様子を母上様彌吉おしけなと見給ひなはいかに喜ひのことにあるへしと市三郎申候○日くれ頃江川太郎左衛門來る江戸の出府の途中之由にてわらち立つけにて玄關申置にて歸りたりいかになれたればとて夜みちに嶺をこえ小田原は行は太郎左衛門ならてはならぬ事なるへし

小ゆるきの濱邊ははるもなみあれて雪のしら山よせくたく也

曉の風吹まきて春雨も横さまにふる小ゆるきの濱

旅なれとこゝろなくさむ春の日も雨にそうくも袖ぬらしける

たそかれにいそく山みち雨ふりてたとるもつらき足からの山

八重かさぬ雲わけのほる山踏は花の中行姿なるらむ

○箱根にては家來共の妻并下女共は髪をとき改むる也銘々改めの姿々に懷中より密に取出て錢貳百文宛遣す事のよし是は全の附届の外也さとは

髪は一寸手をかけもせず顔を見合候計にて平服いたし退去候由也某か關所を乗打勿論のことにて番人共不殘下坐いたす也其時駕之戸を家來引也御養父様市三郎はかこの戸を引候計也番人共の下坐はなし尤下乗もいたし不申候由

○七日 雨 六半時箱根宿出立六時前吉原宿に止宿○けふは富士の麓野を通り候得共打くもりて更に麓もみえすさとなとうらみてうたよみければ戯に富士にかはりて答ていふ

おれをみてつまらぬ歌をよまれてはたまるものはく

江戸子に雪のすかほをみせぬとはさても初心の富士ひたひ也

やつかれ謹て按するにかゝることを申す故に富士のかくれ居なるへし

こと更にもうく聞はいそぎ行旅の野てらの入相のかね

○八日 けふ雨降れば富士川つかへぬへしなと聞へしに夜すから軒端の

玉水類におとしこゝろならず打臥候ひしか曉八時過是は今日駿府の十里の道を歩行候も早着する爲也起されしに雨やみたりされ共みな油衣にて出立也富士川手前にて夜あけたるに雲井に富士のみねみゆるしかればはれに成行へしと勇み行富士川わたる頃は富士山半はれて河上の松原の上のみゆるけしきいふへくもあらす川を渡岩淵の小休にて仕來にて上下一同栗の粉もち出す味よろしこゝより田子のうらさつたの嶺にかゝり行に全の快晴に成ければおさと御養父母様など野あひ松原等少々御歩行也富士の雪をみるに江戸の二階より見しとかはりたることなしよつて又忘れ居たる江戸のことをおもひ出し此晴をいかに御覽ありけむなといひてみな袖ぬらしたり七ツ半時過に駿府に到着高橋左太夫殿本陣に御待受也左太夫殿例を通先立ものは御涙と申御様子也其内御代官其外地役之人等被參候間左太夫殿は御養父母之方の御通し申置五時過までに御代官等はみな歸られたり夫を左太夫殿御夫婦并御次男金次郎等うちより頻に江戸のこと其外物語引もきら

す其内高橋より取肴等重くみ私夫婦御養父母にも御贈有之よつて高橋と御養父母は酒くみて相樂しみ被居候其頃私はいまた湯も食事もいたし不申候間不取敢湯を遣ひ御酒被上候御側に食事をいたすけふは朝のうちさと至る快候を髪を結歩行いたし候處さつた山の嶺より例のけろく氣味にて始終右之騒中平臥也

○九日 晴 曉七ツ時過出立にてのしめ麻上下に着替駿府寺町日蓮宗感應寺淨光院様之御廟所に參る是は某か母方之御祖母に付兼る御老中の申上置之上參詣せし也よき寺也玄關迄乘輿にても旅中不苦候得共淨光院様之奉對恐入候間門前より下乘いたす其所の所化出迎案内いたし玄關より書院之罷通る左太夫殿も被參候暫にゐ住持緋紋白の上衣にて出申候本堂之案内いたし御位牌拜禮いたしそこに左太夫殿とは御暇乞いたし本堂後口の淨光院様之御廟所に參詣いたす東向きにてよき御石碑にみゆる夫々阿部川手前彌勒といふ小休にて阿へ川もち出す味よろし此小休所瓦塀ひらき門にてよき住居也八疊之上段之

間入かは附にて次之間其外共五ツ間もあるへしもちを賣候かよう成暮いたすと申候も畢竟大名の參勤等ある故也是も上の御めくみの大平による事そかし栗の粉もち等みな是に同じ大井川は九十二文川に至るはけし此上少しの雨にてもとまるへく幸なること也○七半時前金谷に至る止宿也○さとの吐氣頭痛晝過までもはけしよつてかこのうちにある手道具を出しまくらなとを入候かこのうちに平臥候也勿論度々吐氣ある故例の事とは知なから甚案し居候處夕方快食氣附候はや頭をあけ彼是世話いたす位に相成候○けふ途中にトヲと音し何か人聲しける故市三郎かここにうちよりみたるに女さ垂かこの内にて居ねふりころはり落たる也落てもいまたねふりさめきらぬ體にてのひなといたし居候をかこのくも助たすけ起してかこのせたと也出立前根本の話に女共のせたる垂かこはうちへ細引に縛り附不申候は度々ころひ落るといひしをあさわらひ居たりしかけふおもひあたりたる也畢竟女共か髪を結び湯へ入たる

なと濟と多くは九ツ位也早出立の時には八ツには被起候間一時ならては
 ねられすあるひはたて通しもあれは也○ある人の申せしはまさの人足の
 もゝの毛ふかきをみて通を失ひくも助のくもの絶間より落たれば已後は
 久米と改名すへしと一笑のことゝも也○さとか不快氣にかゝり日々いか
 にゝと休等の節々家來なとして聞かしめけるをわらひて
 いづのよのむくひかしらすあの人はいゝかゝとかゝに聞也
 といひしと也かゝることいひしは定而人足なるへし

きのふ藤川にて富士をみて

村雲はみるゝはれて朝かせのみそらに書かく富士の芝山

さとか髪結ひけるとき母上の出立前に御世話のありしかしこさなとおも
 ひ出て

たらちねのそふる守りのしるしありていもかけふ結髪かつらかな
 富士をみて

はれてみればはなもみちも白雪の富士の高根にますものやある
 雪はかりつもつたとこか不^フ賈^ジの山三國一の高根なるらむ是は彌次郎兵衛
 北八か類のよみ
 うたな
 るへし

○十日 雨 六半時前に金谷を出て菊川のさと日坂を経て懸川宿にいた
 り晝休こゝは太田攝津守の城下也夫々平川袋井を過見附に止宿也けふも
 終日の雨にて強雨にはあらねともおやみなくふり長持の内ものものと濡
 るゝほど也道中にて雨に逢ふとかゝの弱きはわか一代のうちのかけみち
 なるへしなといひて笑ひきされ共もはや大井川を渡り川とめの患もなく
 さともこゝろよくけふはみつから髪とりあけたればこゝともいはれぬ事
 なるへしけふは大井河必川留とおもはる一夜のことにて川留に逢四五日
 もかゝりたらは空敷百金以上之費なるへきを運のよき事といひて民藏其
 外一同よろこひあへり○けふの菊川はかの南朝の忠臣中納言宗行卿の武
 家のために殺され給ひし時詩を賦せられしところ也菊川より日坂を行み

ち例のさよの中山夜なき石観音寺といふ寺にあるむけんのかねなとうけられぬ申傳のあるところ也

昔うまくうそをついたるあめのもちいまてはくはぬ幽靈のさたさよの中山をみたひまでこゆるにて西行のうたをおもひ出ければのほり行わか身そしらるとしを経てさよの中山みたひこゆるに

○菊川に矢の根うちあり五條清次郎といふ麻上下着用白木の臺へ矢の根一本のせ棒もちて平服して居たり入用なければ及斷たりかゝること東海道が目録とりに至て多し其外本陣にて度々宿をせしことをいひ干魚の五まいも出し目録をつる餌のあるにはこまること也○市三郎さとの不快をいたく案し肩をうちあんな等いたす江戸よりは二三段もあかりたるか如し母上様御安心被遊候へかし○名所圖繪をみるに宗行卿の辭世を家の障子に書たるを聞て尋しに今はやけたりと聞て書つくるかた見も今はなかりけりあとはちとせとたれかいひけむと光行かよみたるをあけたり我は

さはおもはさりければ

書つくるかたみなくてもかくはしき名は萬代にきく川のさと

君のために身を捨てゝこそ露の身もくちぬ名をよに尙つたへけれ

○十一日 曉より雨やみたりひる過るころ西風強吹出て夕かたは快晴也六半時過に見附を出て池田の小休より天龍川をわたり濱松宿にて晝休夫より舞坂にいたる七時前なるへし○茂兵衛のくれたりし茶道具此ほと着早き日は夕方必用立至ちたのしみに成也けふも夕方より御養父母様其外打よりて茶をのみし也○けふは濱松の城を通り其手前なる耕地よりみかたか原を遙に望む 祖宗御苦戦ありて當時の泰平開き給ふことおもひ出て袖ぬるゝはかりかしこく候ひき○天龍川は川瀬二瀬にわかりて川幅十町計もあるへしされ共富士川大井河の類にてなく至ちゆるやか成河故此ほと平水二尺餘のましなれ共たゝみの上のことし至ち静也大井河は二尺餘のまし水にて川渡り止り天龍は五尺六七寸前後にて川渡とまるといふ

尤なること也○三方原箕方原と書しも古書にありと覺たり今さくに和地村外貳ヶ村を牧場故三方ヶ原といふと聞は箕方はよろしからざるにや○昨夜母上に逢奉り何故にこたひはともいらせられすやなとゑんし奉りしにいやこの次には爾の中にかせむと仰られたりと夢みさとは又江戸に歸りしに母上はしめみなうち揃ひて被爲在母上はさとよ留守中所々到来ものゝ移りにこまりたりと仰られければ殘し置たる鯉ふしこそよからめたと御受申しよめは太郎を抱て親子ともに此頃はやり目煩ふよしなといひしとみて夢さめたりこれ等のことうちかたらふもみなく袖ぬらす事にそ有ける○さと大によろし日々手水或は髪けはいとていふなれ共一時に夫等のことありてはよろしかるままと一同とゝむさとか身の弱きはしらすやつしのことをいふにはいやはやこまり候いつそに御異見有之たし夫にて其餘のことを御察しあれかし養生のことよく母上より御序に御沙汰ありたく候かくしるしてさとを爲見ければ大に怒りあまりのなし

かたと申せししかなからかくまで甚敷申さねはとかくにかるはつみを
する也○江戸はいかに此邊はさくらさかりにてもゝなとちりかてなるも
あり駿府は常に梅の冬のうちに落花するといふ池田の小休にて熊野の謠
曲のことなとおもひ出て

はる深き池田のさとおもひやるなれし吾妻のはなもさくらむ

みかたか原にて 神の御徳をおもひ奉りて

吹起すみかたか原の松風にこまもゑみしも打靡きけり

○十二日 晴 舞坂を拂曉に出て今切を渡り新居の關所にて改ありて二
夕川にてひる休いたし赤坂に至りて止宿○けふは天氣殊によろし今切は
彼遠つあはみなれば船路のけしきいふはかりなし領主が自分の壹艘妻
女の壹艘馳走船出る波濤の
如き東北にうちわたし春霞たなひきたるうちに富士山のかすかに立聳た
るけしき南は遠江灘にてあらなみのうちよする様得もいはれず松のしけ
りたる嶋にさきからすの群たるいと興あることにてみなうち見やりて悦

ひぬ○あら居はうなきの名物に付給たかりけれともけふは 行道君の御忌日なればやめぬあゝいかなれば 行道君はわか少も進みのほれとて朝夕に神にいのり佛に誓ひ或はしほたちひのものたちなとまてもなされしにわか支配勘定たりし時に失給ひ素袍きることを一たひも見給はすわかく御騰用になり川路家の中興せしも中々わか力の及ふところにあらず川路家先祖の洪福によるるところなること勿論の事なから是併この龜相なる某へ幼年の時より 行道公の嚴敷教給ひしによるるところ勿論也されは川路家へ對し候も 行道公は大功ある御人にこそあれ然るに貧しくかなしきことのみと晨夜の勞のみを成給ひてわか御目見以上に成しも見給はすして失給ひしはいかにかなしきことならずやわれこのたひ御養父母を御同道まいらせて旅行するの難有によりて又このことをもおもひ出たなきたまのおはしまさは一目は見給ひよと涙を拭ふてするすになむ悴夫婦などはわかきものに昔のことをしらねはこのことをしるす也 行道

君の御忌日等御廟參等少も怠へからす○いにしへは濱名の橋をわたりて旅行せしか今切のこと出來て今のことく舟行には成たる也

いにしへの濱名の橋のあととへは潮行かふ遠つみつうみ

○吉田橋御普請に御大工頭御勘定等に知る人あるか市中に名ふたかけ幕打てあるをみてなつかしくおもひし也こゝにも領主より馳走の船出居れば夫へ目錄を遣し候也○けふは例々平松彌一左衛門方は旅宿也この人はや七十なるへし白髪にて一體々様子いとことは乍申いかにも藤田七郎兵衛よく似たりわれこゝに三度やとり七年前に通ける時麻上下を遣し置ければけふわか紋附たる上下を着用して出たり家來共今参りしもの共は不審かる様子也立派なる馳走也父子は上下壹具宛遣し其外目錄菓子等別段に遣す

○十三日 晴 六半時に赤坂宿を出て六時過に尾州なるみの宿に至る○けふ三州法藏寺の建場に例々通參詣住職は留守にて隠居萬端々取扱也

此隠居七十六歳也といふ石川左近か已前大御番にて行通ひの時は役僧也といふ我も二十二年前に逢たる出家にて至て無如才僧也扱寶物は兼るも人のしるところの東照宮の御清書其外也御机はたゝの手習子の所用之机にて所々に小刀に御いたつらの跡今以存し御硯のかけたるにも同様のあとみえ尤いつれも矢くら様なるもの陣取とも可申哉之御書からにて御幼年の御節を御將略の御別段ことおしはかり奉らる御冑と申候もの三十二間位の筋かふとにて鏡のしなたれ有之後勝山と函人共かいふものにて物めつらしきは筋と筋の間に小板のかねを鋸にてからくり附有之小板かね凡三寸計も可有之哉に付こし通は二重に成居る間用心のよろしき事なるへし其外澁そめあらゝとしたるあさの御下着御あせしみにて所々くち破れたるなとかくも御儉素にて天下の爲に御骨を被爲折たるかと奉存候得はわれのみならずそこに居合せたる御養父母さと家來共まで落涙せぬものとはなかりし也其餘の品々或は御手習の間などいふ

もの多あれ共不記兼る人の申せしは駿府華陽院に御手習遊はし其頃の御品々かの寺につたはりしを昔住持轉住の時持來しといふ八才竹千代と遊せしなとを以しらへたらはしるへき也○けふ桶はさまの邊にて大八車をみる右は三都井下總古河の外にはなしといふにめつらしき事也道中の長持をくるまにのせ二人にて牽行たりと五十三次かくの如くならばよほと人馬の勢を可省事也○法藏寺には石川左近將監か束帶したる像あり左近將監に似さるかことしされ共此人齒のある時と落たるとは大に變りたるときゝしに齒のある時の像の如ければわかかりし頃の顔に似さるにやともおもふ也

○十四日 くもり 七半時過鳴海を出て夕七時過に桑名に至り止宿也○きのふの夜はきそ山御材木御用之頃の知る人之尾州之御家來等來り及閑話四時過まで相懸る○けふは宮より佐屋にいたりこゝより佐屋川を川船にてのり下る凡一里程にて大船に乗替候る桑名の旅宿本陣のうら迄船をよ

せ庭の小門より直に着也○佐屋の堤に尾州之御家來繼上下着たる人貳人麻上下にて鍵を爲持候人壹人控居候間二度下乗候而御船被下候而難有候旨申之又乘輿いたし船場之参り下乗候而乘船也御ふねは並のやかたの類にて上之間二疊次之間二疊也下女共は猪牙船同様の船にのり別船也船手同心體之もの壹人上乘いたす右之船に一里ほと乗下り候と中流によほとの大船ありて夫の下女并用人貳人中小姓四人乗組也右之大船はやくらありて麻上下の役人壹人繼上下の役人壹人上乘いたしやくらに天まくを爲打着坐其外水主共大勢乗居候御船は高麗へりの疊床之間雪隠まで附居候而襖等金の砂子花鳥の畫はり附にてはしらまたためぬり也乗揃候と大鼓を打半みち程出候といろくのかけ聲にやはやし立候而船をこく也左右に入側附故家來共らくくと居らるゝ也尤次之間も三疊故女共計には廣し右之船を貳里乗候而海は出桑名の城の塚下をのり廻り候而同宿はいたる也○佐屋川は左右白砂小松の河原にて川上并兩岸に遠く信濃美濃近

江の山々みえ左右之水郷にもはなさくら等みえ中には桃の花の夥打つきたるところもありてけしきは十二分也○今日之尾州之御取扱格別の御仕來にて恐入難有勿體なき事也是に附而も母上を御同道不申上候不奉入御覽は残念のかきり也○桑名宿の領主家來海岸に平服用人船之障子を開き候而披露也○着岸之上げふの事申出候而初而御養父母并さと等芙蓉の間御役人のわけをしきりに難有かりさとなとは不及申一同みな落涙いたすほと也○今日御船被下候難有旨之呈上尾張殿御用人迄差出す仕來也

○十五日 晴又くもりさむし 此邊の時候は江戸と同じかるへき歟宅の紅梅と同じ花をみしによほとうつろひたり宿の梅もかくなむめりなとさとゝも咄しておもひの外に故郷の情を發したり○桑名宿を六時前に出て七半時過に關宿にいたる○けき間に桑名は白魚の名物にて至るやすし壹升にて百五十文に付與助等六人にていろくのものになし給あまりたり

といふ江戸の白魚も享保の頃こゝより御取寄に種を品川の御まきなされしと人のはなしをきゝしかまことにや○鳴海の桶はさまはやかたはさまともいふよし土人に聞に一所兩名也といふ名所圖繪にも同斷也され共古き書にやかた狭間とかきしもありと覺ゆもしや桶狭間といひしを義元のことありてよりやかた狭間といふにはあらずや勝頼か首の捨ありしをみてやかたの首也と土人かいひて下坐したる類のやかた歟如何あるへきおもひのまゝを記す也やかた狭間といふ所近きところにありてそこに義元のことありしを桶はさまは海道にて人のしりたるところ故に名高く夫に成たるかといろく土地の者に聞に左にはあらず同物兩名也といふ也○關の入口にて鈴鹿川なれ堤の上二三十町餘もみわたしよきけしき也鈴鹿川は歌まくらにいふ八十瀬川故水は小なれ共二三百間はかりに瀬分れなかるゝ也橋をかけたるところにては二十間餘の川也此川一寸の見わたしにては川普請の仕かたにては川端に反高流作場といふ田畑の夥く

出来へきよふなれともいにしへより八十瀬といふところをみては至而六ヶ敷川なるへし○明日こゝの宿はつれより御養父母はしめ家内一同はいか越へかゝり南都の行明後日は着也われはすゝか山を越て十八日に京都へ着し十九日に伏見より南都の行也十七日十八日とは一同に逢はす十六日十七日十八日はひとりたひ也よつてわかれの様なるこゝろあるもおかしき事也京都にゐの大小衣ふく等夫々に取集め或は先觸其外家來共の案内等申遣候ゝ大に取込也よつてけさの七半時過の立も尤也とおもふ也○あいほうよるゝは勿論常によくなきてたゝをいひ一同もてあましある時は民藏の妻の蒲團にくるみておとし灸なと手の先すへて叱るといふけふも來りたれば菓子可遣なといふ内に大に泣て逃行たり
駒とめておもへは久しすゝか山はやも日をふるたひねせしかな
稚子と鳥がなく音の吾妻にかはらぬも又なみた也けり
めてみつる山と水ともあきはてゝ只のこる日をかそへつゝ行

いくさとのこかねのむしろ敷なしてなつな花さくはるの山はた
先拂ふ聲も夢路かこしのうちに旅やつれして打ねふる也

しるしらぬうきみち踏ぬめつる子に旅ねさせよのことわさそこれ
名にしおはうつろはてあれ龜山のふもとのさくら千代をふるとも
花すてゝ歸れる鴈をうへなりと奈良のたひねにおもひこそやれ
立わかれあすは近江のわかれ路も隔つはおしき關のさとかな

○十六日 くもり 七半時に關宿を立出て土山水口を越石部宿にいたり
て止宿七ツ時前なるへし○風烈しければ非常のことなと申置ぬ○けふは
鈴鹿の嶺をこへ古法眼か筆すて山なといふ所をみけれともさしてのこと
もなし山水にはあきはてゝいふものもなし○鈴鹿たうけの西のかたに二
かゝえもあるへき松にさしわたし壹尺餘もあるへき櫻のやとり木あるを
みて

萬代をふるともちらし鈴鹿山まつに根させし花さくら花

さくら木を枝にやとしていろも香も又たくひなき松にそ有ける
梢にははなのいろ香をやとしなからみさをとはの松そめてたき

松田川にて

川の名の松とし聞はよるなみもはやうちかへせ母いますまに
廿二年前留役に論地勘踏のことにて行たりし江州の庄村高木村は此邊か
と聞しに向なる山のあなたにて二三里もあるへしといひければ
わか昔かりねのさとゝきくからになつかしくみゆをちの山のは
○けふは石部の宿にて例の梨園の戯にあるお半と長右衛門かやとりせし
旅宿は今も尙存してある也然るにけふは此旅にはしめて我は女なしにて
かたいやらうあたまのこちゝしたるより合の旅宿也是こそ眞の石部宿
なるへしとてわらひし○このたひはおもひしよりも書物を見られすはつ
かに今日までに通鑑を伏羲氏より三國までよみたるはかり也然るにけふ
は手廻よく扱書物も倍してよめし也この頃は旅宿のつくどけふのみちの

はなしなととやかくするうちに日もくれさて又ひるやすみもおのつから長く御養父母のひるも氣つけとて盃をとり給ふなと江戸の如くにはあらず直にひるはすむことなれとおもひの外に手間取とけふそしりけるよつていふ也彌吉に書物をよみたくは妻子の累ひをなるたけはなれる様にすへきこと也十二三日已來よき手廻とさと其外のことを内々は感心し居たりしかひとり旅になりみれば男はかりにて又格別なる事也され共こよひはよほとさひしくおもふ也二つよきことはなき也○着之上明後日京着いたし候旨之書狀先例之通差出候○ひとりと家内のあるとは本陣の料理其外共よほとちかふ也是は鐵漿をくれ候へ湯をくれ候への少きによるなるへし○この三日は別而茂兵衛のくれたりし茶道具かよき友と成也くれくれも深切の届きたるなるへし

はなとみるくも心にかゝるるカかなたひには雨をいとふものからかけはしになるてふ雲をたよりにて行みまほしき故さとの空

水かさます河に旅路をさえられて待こそうきのかきり也けれ旅にうしと聞傳へたる大井河あさせふみわけこゆるうれしさたひに只こゝろなくさむ山と水をみはてぬ夢と雨そなしぬるふるあめに野行山行うきたひのたもとはいとゝひちまさりけり

横田川わたる霞のみな上にかけてほのみゆる三上山かな

○十七日 おりく雨夕かた晴 六半時過に石部宿を出てくさ津にて晝休いたし大津に止宿也○晝休いたし候はくさ津の所謂姥かもち也いやすたれかけわたし普請の結構驚入たる事也さてうはかもちはとりも不直ぢざいもちときなこもち也仕立方別段かゝるあんもちは決る江戸にあるへからす大白仕立とみえてあんのいろうす紫也彌吉に爲給たしくといひなから十二三も給たり近頃めつらしき事也○膳所の領主本多兵部大輔は知る人故懇意に面會候側用人を以肴を贈たり○けふのみちは所謂滋賀のうみのふちを通ること故けしきいはむかたなし大津入口に都筑金三郎の

手代出迎居候而案内いたす是は懇意の故なるへし○兼而の本陣は大名の
やすみに成と之事故例之通いつ方に而もよろしと申遣候處脇本陣に候得
共いやもけしからぬ結構なる普請岸駒の畫なけし上は總金はり附檜の木
つくりといふにて其餘しるへし
けふやゝはれなむとせし時

白雲はみねの半に棚引て雨はれそむる野路の曙

又雨ふり出ければ

降やすき空にもあるかみし山ははやくもとちてかゝる村雨

繪かきなほこはうす墨のくまのうち文やみすらし雨の山のは
梅木といふ所にて例にて薬をくれければ

ためしとてさゝく薬もはなの香をふかくこめたる梅の木のと

野路の玉川今は田になりてしるしの石ふみを建たり

石ふみにそれかとはかりいにしへの名のみをのこす野路の玉川

かはり行よをや蛙のなくならし今はあら田の野路の玉川

あせ果し野路の玉川田と成てはきのなこりの露もとゝめす

野路の篠原もこの邊ときゝて

見た脱カわせはひらけし田面霞む也これやむかしの野路のしの原

せたの長橋にて

こともなく立もとり来てまたこえむせたの長橋よしなかくとも

いそき行矢はせの船をよそにみてこゝろしつかのせたのはし守

滋賀のなみをみて

波の花をしかのうら風うちよせて昔なからに秋なかりけり

粟津かはらにて

時に逢ふか粟津の原にすてし身もくちぬ名のこる兼平か墳

滋賀のうみをみて

かへり行矢はせの船をちりにして夕くれはるゝしかのうなつら

滋賀のうみは若狭近江の山うつす千里くまなきかみなりけり

○きのふの本陣にもけふの本陣にも雪隠に白木の臺へ白砂をもち夫はきれいなる貝しやくし添ありいかなることかわからず用便したるあとにてその砂をかけることにや少々猫に似たり絶倒○金三郎手代渡邊佳十郎と申候もの昨夜石部宿にも九時過六里參餘の道也今夕又參る以前入魂之もの也といふされ共一向にしらす段々尋しにかの宗三郎也同人黒羽の里縁受候後當時の身分に成十兩三人扶持之長屋持也といふ是全市川丈助の口入に金三郎の厚世話なるへしとおもふ也よく以後をいましめ遣候幼年の時親敷ものいひしものに不慮に面會あはれにおもひし也○けふのくり替本陣と兼申付置候本陣と自分宿札之義争ひ候取計方伺出るけしからぬもの也此方にあは笑ふに堪たることとおもへとも先にては色々之意味あるとみえたり遠國のことと是に類すること多し

○十八日 雨 曉八時過に出て拂曉に京都の用達若狭屋八兵衛方にいた

る夫々京都奉行月番伊奈遠江守御役宅に參る同人方に朝飯菓子等出る同人同道に二條の所司代若狭守殿之御役宅に參る在京之面々は所司代はしめ御用に參り被居候高家より二條御門番迄不殘罷出所司代平伏に關東之御機嫌伺有之いかにもいかにもきらひやか成事也所謂戲場の上使司脱カ之義に付上坐は御免と申候體故例之危末流よほとりきみ也事畢御所代之御談等有之けしからずひまとれ候か九時過に入兵衛方の罷歸候處都筑金三郎其外彫工一乗等迄追々に入來に中々晝飯も被給不申候間はなしなからに飯給候出立被參候人々居のこり候見送也夫々伏見に參る伏見奉行不快に付御機嫌伺なし七半時旅宿に到着○今朝京都に參候は拂曉故町人共之自身番屋外にある燈籠のあかりのこり居り番屋に幕打有之町人共之下坐いたす趣江戸より取締たる體也此番屋京都は鳴物停止中故也勿論町々の掃除奇麗にて一番からすと申頃店前をはき或はのれんかけ居るなどは是も又べり之一つとみえたり併土地せまくして所々に江戸よりみればおかしき事之内に卑

きこともありてかの蜀山か隅田川今は吾妻の都鳥業平などは在ざいご中將
とよみし歌に甚味ある趣にみゆる也女は先なへて奇麗にてうつくしく江
戸よりは美人多きかことくなれ共是をたとふるに京女は彩色の繪江戸女
は筆力ある墨繪にておもいれは却あまされるか如しされ共うつくしきと
いふに至りては京にはおよふへからざる也○一乗は決る鏡彫はせぬよし
なれとも宗保か下かね水府の御短冊と申にて歡ひて彫へしといひて夫々
受取たり

○十九日 けふは南都に着と申に雨は止たれとも今にも降なむ雲のたゝ
すまひにてうくおもひなから行うち南都は四里はかり手前なる玉水と
いふところにて晝食せし頃より空少しくよろしくなりこれならばふりも
すましとおもひ行うち段々とはれ木津川の船わたしにかゝりける頃は
四方の山々はれ日かけほのみえてはなくもりてふ天氣に付こゝろいさみ
て木津川の土手の上より川の向ふをみるに人蟻のことくに集りたり近く

なりてみるに鍵立たるもありみなく麻上下着せしもの共也川をわたり
て一番に平服したるは給人の松野四郎にて夫を宮方之御家來或は紀州熊
野三山之貸附懸之もの共與方同心壹兩人其外町人共に至り候迄夥出迎た
り木津川の河原は白砂百間も其餘もある所に大勢出たればよほとけばけ
ば敷こと也町人共はもゝ立にて供の先立也是も夫々の規模に寄夫を宮方
之御家來或は町人穢多の頭の長吏といふものに至る迄仕來にて奉行所門
前迄之内に追々立迎いたす其外見物の夥事はかほちや西瓜をつみたる
かことく頭をならへ女共には夫々衣類等着替て出居る體也わか此國の司
に成てくれはこそかくもみるとおもひければ肩輿の簾をかゝけてみるに
笑ふへきことの多かりきそれをも忍ひて木ましめにて着したり奈良の御
役所玄關前は立派なることにて表向は長屋門玄關太鼓やくら等に至る迄
悉つゝ瓦葺にて五六萬石位の大名の立派なるかことしされ共慶長已前の
普請のまゝなるへければきれいにはあらずしかし疊かえ等ありてわか宅

よりはよほときれい也庭は大松は一かゝえ二かゝえもある松其外小松迄も二十本もあるへしさくらさかりにて泉水のけしきよろしさと并御隠宅御夫婦市三郎共并家來にいたるまで一人も無恙一同到着のよろこひ等申述る夫々麻上下に成興力同心并御門主并大名を使者等に逢日くれかたに夜食給申候料理も先例にてはもの骨きり鯛のやき物等也魚類みな江戸よりあたらしきもおかしき也酒は至てよくやすく二百文の酒は上酒と申候事故御養父母様の大豊年なるへし○勝手道具等いつれも買上なれとも至る少く爲買置たる故に母上の被遣候鍋等大に用立申候諸しきおもひの外高直ならずマキの行水たらひ五百文と申候是もマキにて鐵砲すい風呂壺兩壹分也何年遣ひても貳分引にてとるといふ事にて證文出す簞筒等是も右に准すること也是も仕來のよし故おもひしよりも不自由にはあらざる也マキの桶類は至る大丈夫のもの也千住大橋のくひ三百年餘に至て腐不申候と申にてマキの丈夫なるをしる是等は江戸に廻し度もの也○夕方さ

と市三郎など庭に山に登りみるに所々か成みゆる十四五丁内外の内に三笠山大佛のやねみゆる也名所古跡にて目はなをつくか如く大笑也○此度の天氣度々の雨には逢たれ共乍去一日の川留もなく既に十九日に上京すれば差支を十八日に着し無滞わかわたりたるあとにて川留になるなど其外今日の天氣并家内着の日も笠置山より天氣にて其日は着のころ快はれ其前後とも雨天など申候事天道少私過たるほどの御惠かとおもふはかり也難有事也夜九時頃より又今日も雨也○伏見よりならのみちは平かなるよきみちにて奈良の入口なら坂と申候處に少々の坂ある計也其餘は坂なく伏見の大池といふ所のつゝみを五十丁計行也此大池はいにしへは今よりも小さな池なるへきか淀川の河とこ高く成に付而段々と逆水して大池に開候故追々に良田魚鼈のすみかと成て今は三里も其餘もあるといふ大造なる湖也こゝは市川丈助か參たる論所にていにしへをおもひ出せし也水面所々にかれあし繁り其ひまを漁舟行かふさま水濺の梁山伯などいふものに似た

るへきか○家内之ものは伊賀越をならへ参りたりし也其道筋は二日なから深山幽谷はかりにてさとかはなしに聞に箱根程にはあらねとも中々さつたさよの中山などの類にはあらぬ山坂を二日つゝきて肩輿にゆられ大にははりたりといふいかにもよろしからぬみちのよし也○さと今日は髪をもゆひ候而全平生體也大に安心いたす三卿か手際真に別段の事也醫者は學問もいらす藥の名も病名もしらす候而も人の病ひをよくなほし候而申通になりさへすれば名人也學醫人を殺すといふ諺尤なること也今の武人軍學者の類みな學醫の一度も脈をみたことのなき輩故みな絶倒のことなるへしさと快かる共例の長ふみはかゝせずよつて日記を大越へも廻し候へかしよつてお敬方迄の文は今度は間にあひ不申候○一乗といふ男に京都にて逢大に驚たり人品至而よろし公儀の御醫師とも可申白むくに黒繪子の上着其體よほとなること也わさはこゝろより出こゝろは姿を取廻すもの故あの人物故よき事の出来るなるへし

長池と玉水の間に田家に桃を多くうへたり

みる人にこゝろはあらてさく桃も花のあはれをしる人そしる
はかなくもうたからうたの人にあはて賤か園生の桃はちるらむ
こゝろなくうへし賤男もこの頃はあはれしるらむ桃の花園

木津川の船をみて

真帆かけし木津川小船をちよりは田面にすめるつるとみゆらむ
途中にて人の多出てみけるとき

あふかるゝことにはあれと諸人につとひみらるゝ身もうかりけり
官邸のさくらをみて

駿河路にちるをみてしかさくら花ならの都は今さかり也

○廿日 雨 けふは打よりて長持の物を出すにいろくのこし置たるな
と行違たることあり佐々木よりくれたりし茶道具は必ありとおもひしに
なし宅に茶道具三ツのこし置きや序に承り度候○最寄の大名より肴をく

る、出入町人共先例にて酒を差出すいづれも御養父母様の御豊年と成○
けふの雨に亦も此頃天氣都合難有事と申あへり

○廿一日 雨 今日とは與力共其外より初而參着之禮受る例之おかしき容
體也笑を忍ひ居候○庭に鹿參る鹿は露をのみ霞をくらひ仙家の友とき、
しか人家の犬に見合ふはなんとしたるものに亦さて豆腐のからなとを人
の手よりくらひ毛なみ等犬には大におとりたりものくるゝにワンといへ
といふ時は其意に隨て吠るなどいふ藝のあるへしともみえず馬鹿のかた
われさもあるへししかれとも庭のつき山のうへなどあちこち歩行さまは
さすか犬の類にはあらざる也

○廿二日 快晴 けふは大乗院之御門跡御逢其外春日社等初而參拜
也然るに天氣殊によろしみなく悦び申候○供立は先立之同心麻上下案
内之與力鍵挾箱われは徒士三人侍三人牽馬也東福寺門前の芝原は春日野
の飛火の野守と古今にある春日野なるへしよきけしきの芝野に付駕籠之

ものにきかせしに此邊なへて春日野といふよし答たり鹿十二三疋遊ひ居
たり袋角の鹿またく角ある鹿あるひは片角なる鹿なとみゆる小松もあり
さくらもあり單はちり八重はひらき初て單の雪の如くちるなといとめて
たし此邊の單のはなの色いと勝れて紅ひを帶たる八重なとはくらへみれ
は下品にてみられぬ也夫々春日の一の鳥居に至る左右の大樹等いひもつ
くしかたし二の鳥居よりくつをはき白衣并かり衣にゐくつをはきたる神
人共左右に三人宛出案内いたす左右に古きは三四百年より近きは今にい
たるまでの燈籠夥あり春日の社は板ふきにて小祠なりもとより拜殿等な
し石のある土間と藁の圓坐を敷拜いたすこと也此邊の神社かくの如く神
さひたることいふへくもあらず三の鳥居の列樹のうちにさくらさき亂れ
たるか肩輿のまよりふりいり或は衣にかゝりたるなと所からといひ得
もいはれすおもしろしそこより八幡井二月堂の觀音に參るこの觀音堂よ
り大坂の境なるくらかり嶺等迄一望にてけしきよろし氷室社と申にて半

によりてこゝに記すはこの頃中しらてありけるか前裁もの、高直驚入はかり也うと一本二十八文也といふこはけしからすとて家來の妻をたのみて求しに十本に而七十貳文也とておこせし也こゝも奉行直段家來直段地役人直段とあるとみえたり

○廿六日 雨 かくも雨ふるに江戸の出立を四五日も遅くせしならはいまた着せず川留なるへしかへすくもよき天氣つかふとみなくいふ也○奈良之書面をみるくならは舊都にて夫故に家數五千軒餘もにきは居たるとおもひしはみな間違にて天正の頃まではつか成所々の寺社領の百姓共計なりけるに 東照宮天下しろしめされし奈良七郷とて民家七村ありしよしによりて舊都故に人民繁昌しけることよし也 東照宮はかしくもこの御役所にも慶長のころは 御止宿ありしことよし也○順作のかたにて池田の用人安井金作と云もの心あるものにて鏡漿壺ぬかみその類を置附にしたりみなくそのかねを附ること也深切なる人也人はかくありたきもの也○茂兵衛著述

順作か云
體中々凡
たにあらず
樂元信の
山なるへし
流あけたる
盛なと手か
菊事別段
なけといふ

之三抄録殊之外重寶也何卒去年八月の分も序によこし候へと御申候へ
○廿七日 晴 今日乗馬いたす馬場貳ヶ所之内奥の馬場五十間餘にて至極よき馬場也馬道中にて更にあしくならず不相替體也この馬佐州にも行こゝへも來る至而丈夫なること也○このほと土地のことを記す實録ものを借よせみるうちに奈良坊目拙解享保十五年仲冬無名園古道輯といふものをみるに凡例に里俗土地國史等を不考して町名とし又は古跡井水樹木等謬傳ふものは證據を擧て其非を改るよし等ありて拙文之極なれ共偽は少き書とみゆ其内に昔筒井順昭か死せし時南都角振町の警默阿彌といふものを偽て順昭なりとしてしはし差置又もとの町返したるより元のもくあみといふ卑諺南都にはしまりたりといふこと其外大和諸家記録傳説等を引て昔大和大納言の別莊南都椿井町にありしを大久保石見守か郡山に在番せし時に中坊屋敷に引移して建るといふことみえたり中坊屋敷は今の奉行所に付當時の玄關其外は全其時の物とみえたり既に表居間次之間の入側の杉戸を

三郎一同に夜食給居りしに民藏來りて御宅狀参りたりとて油昏つゝみ出す大つゝみにて別條なしとあるにて安心はせしかとはやさとなとは飯のくはれぬ様子也われは急て食事いたしなから半は手昏日記等半は飯にて誤ちて手昏を食ひもすへき様也新左衛門幸三郎彌吉まききつより委細を日記よめより行届たる手昏けい并鏡作等之書狀表の日記御沙汰書玄關帳等來るみなくの深切なる小笠原土屋其外江川等の様子等詳にわかり一同忝事共にて先づ第一に母上様之御書夫々順々にひらきみることにて母上様の御健なる御氣のたしか成事彌吉夫婦かよくつかえ奉るなど第一の悦ひにてさては弟共之配慮家來等の行届たるなとかつよみかつ評して又々四日のあさの出立品川驛のわかれにもやゝ似て市三郎迄か袖ぬらす體下女共方も銘々手昏参りたるよしにて是も同じ様なること也太郎かこと迄もくりかへし候申し或は新家の事等病人此ほといかゝなる其外新家よりよくも孝道に御ふたり様の過酒なき様等申参りたる或は彌吉か

日記はクワどの書ならずは必了々の行列なるへしなといひてわらひ今夕は只そのはなしのみて故さとの情いつかたも同じこと也○石川良左衛門かたより使者参るきのふの朝五に出て同じ日の七ツ前には奈良へ着せしといふ八里には近きかたのよし乗きりにては大坂にて二時も遊ひ其日歸りやすくと出来る也され共いつかたにも行かれす紀州京都ふしみ境等みな同様也藤堂の城下伊賀又これ同じかく京攝最寄に御國くはりありしも深き御趣意なるへし○紀州と申によりて御病氣且御沙汰書の御尋等ある體をみて深く恐入也

○四月朔日 拂曉は雨五時過々晴 今日初入之廉に東大寺 東照宮之御宮今圖子町西照寺之 御靈屋に参拜いづれも太刀并銀馬代給人使者を以奉納いたし近習を先番として差遣置事也東大寺之 御宮は同寺之坐敷續之場所に奉勸請あり長袴にて参る同寺表門外に役人出迎いたすのし駕

中々挨拶乗輿之まゝ、玄關之七軒^ト手前迄参り下乗いたす黒衣なれ共履を穿たる僧出迎いたす與力披露右之もの先立にて玄關に参ると式臺に與力并先番之近習出迎いたす右之近習は刀を爲持長く、りのまゝ、玄關を上り候と東大寺之役者貳人出迎いたす紫の袈裟にて白絹の衣甚殊勝にみゆ右之貳人先立にて坐敷三間ほと参ると高麗縁の疊敷たる所二間ありそこの椽側に清手水出し有之右之所にゐくゝりを解候少々のわたりを参り候と参殿體之場所中央に太刀馬代獻備いたし有之手を附居候と出家壹人参り御神前に有之候幣を取候る清めいたす關東と違ひ神物之拜いたし候る右之高麗縁之坐敷上之間に毛氈敷有之候場所奉行之着坐場所也そこにて神酒拜戴其節は自分之了簡に畢る於右之役僧物語などいたし烟草盆薄茶出す無間退去也夫々西照寺に参るこゝは住持表の門の外に出迎いたす故直に下乗いたし客殿に参り候と直に手水遣ひくゝりのまゝ、本堂後の土間を六七間参り候と至る小さき拜殿體之場所有之くゝりを解候義も不能候間其まゝ拜いたす住持丁寧な

る人とみえてわか草履過つてうらかえりしを直し呉たる間及挨拶是も客殿に毛氈敷有之右之脇に本地佛歟厨子入にゐくらく不見右之所にても拜いたす畢る右之毛氈のある席に神酒出式如薄茶并菓子出る夫々退去住持門外迄送る今日東大寺も西照寺も老若如山是は佐渡も同じ事也なれ○東大寺之役僧話に宋版のもの多ありたるか焼たりされ共今なを存するもの多く又已前は勅封のみくらにありける往古の八省の書物年々に虫はみになるに付取出置たる間追参り候は、拜見爲致可申由なと申せし是はなの頃の内裏諸役所之書物にて道風佐是等は夏蔭こときものにみせたき事也西照寺に四代已前の一乘院宮の御詩作あり唐和相半したる御手蹟に候得共位高く日本古代の書の如くにて御能書也この宮に御代々能書多しといふ○歸り候る與力其外より當日之禮受る○春日若宮神主千鳥三位所藏北宋皇祐にて千鳥日の舊記來る後冷泉院永承四年十一月廿七日行幸ありしを記といふ也はしめにて千鳥三位か先祖共反古のうらゝ追々文永七年四月迄のことを記せし書

物也其外養和の頃の日記等七冊ありいつれも古文書をうらか弘長二年の曆あり

弘長二年具注曆日		壬戌年 <small>千水支土 納音是水</small>		凡三百八十四日	
大歳在壬戌		大將軍在午		大陰在申	
歳德在北宮方		歳刑在未		歳破在辰	
歳煞在丑		黄幡在戌		豹尾在辰	
右件大歳已下其地不可穿鑿動治因有 頽壞事須修營者其日與歳德月德歳德 合月德在天息天赦母倉并者修營无妨					
歳次降婁					
右件歳□所其國有福不可將兵極向					
正月小 二月大 三月小 四月大 五月小 六月大 十月大					
閏七月小 八月大 九月大 十月小 十一月大 十二月小					
正月小建		壬寅 <small>五府在丑</small>		天道南行 天德在丁 月煞在丑用時 <small>甲丙 庚壬</small>	
		寅		月德在丙合在辛 <small>立公在寅(未書)</small> 月空在壬 三鏡 <small>乙辛乾 坤巽艮</small>	

此曆二月間七は
残月也日秋て
八月朔共岸の
分となれ共岸
後につくは彼
いよや加へし
にのあ尤板し
主の書らす板
もはの書らす
也か岸も主に
はののあ尤板
もはの書らす
れ、付たす板
れ、付たす板
れ、付たす板

密
室宿
大奎月辟曜

不祝病不即人 <small>(未書)</small>		神吉		大歳位母倉復 加冠 拜戸 吉	
一日戊午大執		神吉		大歳位復 日遊在丙	
三寶吉不問病 <small>(未書)</small>		神吉		大歳位月德 祠祀 吉	
二日己未大破		神吉		大歳位月德 祠祀 吉	
三日庚申木花		神吉		大歳位月德 祠祀 吉	

以下略しぬ

○奈良は宇治を去こと五六里なるへし定る茶はやすかるへしとおもひしに三夕の茶は番茶同前にる小枝半に過たりよつて委敷ものに聞しに一昨年江戸の山本山といふ茶を五夕五分にて買たりしになか、宇治最寄にゐは貳朱以上之茶也よつて買歸りみせしに一同驚入いかにして宇治のちやをうり割にあひ候やと申せしよし運賃海上の破船等つもり候も宇治の十夕は江戸にて十五夕に賣ねはならぬ筈也可疑事也定る八王子玉川最寄の茶を加ること半に過しなるへし○いにしへ利休か弟子の道六といふものは南都小川町の農夫にて利休かはしめて訪ひし時田園より歸り來り

鐵をよくあらひ床にかさりたるをみて利休かことの外讚稱せしよしを古
 くよりかたり傳ふる也惜哉學問といふもの其前より行はれ居たらむに利
 休道六か類よき儒者成へきをはつかの技にくち果し也郭林宗かことに似
 たるをおもひ出てけふきけるまゝを記す也○春日神主の舊記年號なしされ共前の曆と同
し位之遺誠并日中行事張次可九條右大臣注天曆御此内朝の事に取鏡見面
 次見曆知日吉凶次取楊子今ノ揚子齒磨ノルイカ白西洗手次誦佛名云々次云々次服粥あさかゆを食ふの古きこと
へし其書の末年中のことを記して六月不食澤中水不食芹菜在龍子云々五
 月十四日五日陰陽不可配偶不出三年死云有證云々方といふ事を末に記しあ
 り五月雨の頃をいみし事は日のもとの古き例にて後世はこの十五日のこ
 とを人々いふなりよりところあることゝみえたり
 ○二日 朝雷雨四頃 朝はよほとの迅雷晝後は大風なりしか幸ひ今日は
 南都の神社禮受候に其内は晴たり○東大寺之衆徒年預などいふものは白
 の衣裳にゑよほと品のよきもの共也さし貫をはき白平絹のころもきたる

芹能登平
 龍川能登平
 多ヒテアリニ
 語タリ予ニ
 多キムト云シ
 ラムト云シ
 ヤ龍ノ説也
 ルキ事也

立派の出家共多くは小錢二百文ツ、もちて禮を申す也小錢をかみゆも包
 ます名札を附たる計也あきれ果候飯噴の至り也しかれ共大御番のせか
 れ共の御目見等之釣合にゑは此事或ひはもとよりの事なるへし
 ○三日 晴 今日は遠方之神社共初入之禮申すことなりいかにかとおも
 ひしに流石都の手ふりありてあまり可笑こともあらず興福院と申は尼寺
 にて紫衣也奉行表の居間迄参り初入之賀を申す其外吉野山のもの共はつ
 瀬小池坊の權僧正か代僧等數輩は小書院殘の寺院神主共はみな、大書
 院也天のかく山金剛山達磨寺等聞およひたる寺々多し三輪の山其外三四
 ケ院は袈裟もころもゝみな生絹の白にて袈裟なとふときひも或は角の輪
 など曾あなくひらくけのとも絹ひもにて結ひたるは眞の出家の衣體らし
 き也天下一般にかゝる衣體ならば聖門の殊勝もみゆへきかしかし聞えた
 る何山之別當何寺の惣代といふものに十六七はかりなるもみゆるはいか
 に解せぬ事也其内に長床坊といふかありしをなかとこ坊と披露するを聞

て宗次郎閨中のことにこゝろかよひけむ笑ひを忍ひかねてうしろむきになりてくるしけなるにみなわらひを催しか木ましめ成咳はらひにかくせしもおかし○けふ魚商ふものか松魚をなま節と煮たるとの半したるかこときをもて來れり價三百八十文也といふ松魚と聞は故郷近く鎌倉の海おもひ出たりとてさとか買けるもあはれそかし○民藏いふこのところの魚類の高價いふへくもあらずされとも殊に好めは朝鮮大人參のこゝろにてたま／＼は買ふ也この頃もいかにも小なるたこそ俊藏と兩人して半宛わかちかひたり煮て食ひしに一度にはたらぬを忍ひて夜食に残し置しを歸りてみれば一ツもなしこはいかにと聞しに妻かあまりのこのまじさときひしさに留守中堪かねて一ツつまみ二ツつまみたるにはつか成もの故はやつきたると申候て笑ひけるとそ○例々通日々灸事いたす間うなきを買ひしに四百文にて壹寸四方ほとなる至あしきさきかたにてかな申をさしやきてのち切たるいかにもいかゝなるうなき十二切あり江戸ならば百

文はかりのものなるへし江戸へかへるまではうなきを不食夫だけは施にすへしとおもひ切たり絶倒也○興福寺へ出家か修行のことあるときは御役所をしきみと薪を遣す也その鑑札にはな山と書て焼印をおす也風流なること也○當地の町人の家に至あよき八重さくらあり江戸にもたくひあらしとおもふはかり成はな也さきそむれは一枝を奉行に奉ることゝてはつかに一尺はかり成枝をくれそれにたにさくそへてありていかにも凡ならす名は孝美といふ

せめてもとけふこそ手折れ人しらぬ庵のかきほの八重櫻花
人しれす折てさゝくる八重櫻はなそむかしの春のふる里

四日 晴 けしからぬ冷氣にて誰もかれもみなわた入のかさね着也寒暖計五十二度にて寒のしるしよりは二度高しされ共時節ならぬこと故に二月はしめのことくにおもふ也
みよしのはみ雪ふるらし夏なから衣かさねけり春のふるさと

松魚の蒸せるを求めし時に

魚の名もまつとしいへは故さとをおもひやりてそ先求めける
故さとに近きわたりの鎌倉の魚名きくもなつかしきかな

春日山の新樹をみて

柚人のいらぬ春日のみ山には千世の老木もわか葉さすらし
もみちするころさへおもふ春日山わか葉も木々のいろをみせけり
半はつほみなるさくらをみて

今さける花におもへは青丹よしならの都はとはの春かな

卯月にもまたつほみなる山さくらちるをは知らぬ花にあるらむ

首夏に

なれにけるはな染衣かふるにも立わかれにし故郷をおもふ
故さとのきなれ衣とことさらにかえうかりけるげふにもあるかな
白妙の衣ほすてふかく山のむかしを忍ふ夏は來にけり

さわらひもつみはてぬ間にいつしかと三笠の山はなつ木立せり

三笠山わかくさ山は庭よりも勝手方のもの詰所といふところよりも近く
みゆるわらひ摘の人わか草山につとふたと望遠鏡にてみて興すること也
三笠山のわらひことによしきのふもけふも物せし也

庭の萩のわか葉を鹿の來りてはむをみて

花のころはおのか妻とてこふらむを食みなつくしそ庭の小男鹿
山人のすみかもかくや庭の面になれて男鹿のむれ遊ふ也

夕かた鳥のなくを狐なりとて女ともいひさわく

鳥の音もきつのなくやおとろきぬまた住なれぬ山近きやと
あれ果てひろかる庭はきしらぬ鳥のきなくもさひしかりけり
これはほうくと鳴くつとりといふもの也木曾にて我もさるか
と柚人にきしことありし也

○さと不快大に本復このほとは二度計髪をいひ物語の體市三郎に戯こ

書面を
通し
つれ
か
共
い
ま
し
た
申
候
哉
得
止
不
も
の
認
ふ
手
長
く
認
る
こ
と
な
ら
ず
牛
に
て
退
屈
す
る
よ
し
也
置
候
く
つ
つ
禁
し
置
候

といふさま先常體にて足手も少々と申よりは肉附顔色は全常のことしい
また湯に入不申まで也四五日已來はかた附ものなとみつからいたす江戸
已來其こと禁し置候まゝ蒸菓子佐々木のくさりたる或は茶道具參候品也長持へ入
れし積なりしかあらずといひて前の便に其こといひ參らせしか夫もこゝ
へもち來りしを尋出したる等品々世話いたせともつかれもあらずよつて
此上はよるの養生手當專なるへしと日々いひきかすれと何か不承知體也
此ことより破れなき様に心懸居候○仙臺ひらの麻上下并すあさの上下一
具可持越を忘れて江戸に置來りたるかことしされ共右之茶道具の手際も
あれは今一度よく穿鑿せよとてこたひは不申遣候おさとか世話のことに
付おもひ出候は母上様あまり御深切に被過候而留守宅の事がちゝと御
世話なく只々御保養あらせられ候様とこれのみ申居候○まききつより文
通に奉書昏へ大字はよからず飛脚にこまり候まゝあつからさる昏へこゝ
ろして認越候様可被申遣候尤こたひ參りたるに奉書大字なるはあらねと

馬場は
日あ
り
の
よ
き
か
た
の
五
十
間
木
か
た
の
十
間
庭
の
芝
間
的
の
芝
間
に
至
る
如
し
に
し
ふ
み
か
り
に
お
り
た
し
五
間
か
ら
お
も
ふ
ふ
へ
し

も念のため記し置ぬ成丈細字うす昏よろしと申遣し可給候○新右衛門か
日記十二日のところに母上様御不快のことみゆもはや御快候哉御案事申
上るくれゝも御佛事専らにて御閑養被遊候様さと一同日々御うはさ申
居候○幸三郎あるき序にもしふち頭にもふち計にも古く候而例之鏡
せむからくさのつり合のものあらは定十郎かたに遣し置候わきさしへか
き入候而被遣候頼入候金房の刀のふちくらひの品にいたし度候○屋敷内に至るよき馬
直にても貳分位ふるく上品なるものにしたし度候○屋敷内に至るよき馬
場二ヶ所あり夏は木かけあるかた冬は日のあたるかたの積也自由過たる
こと也別當云此馬場に若殿様に御乗せ申度と也是は例の父めせはたく
なしと論語にあるとは相反する故なるへしこれに類するは市中にわか
ことを今大閣とておそるゝよしけしからぬなり上之ものにて池田本多な
との歴々とは大違ひとのことの反語なるへし尤つゝしみ候而古格を直す
ことは大に嫌ひなるよし急度申さとし猫のことくに成ゆへ息をいたし居

候間御安心候へかしされ共一向に公邊のことしらぬ取扱ひ等あるいは奉行直吟味もなく出入もの、吟味等與力共取扱ひ奉行の不申聞候も輕き咎など與力の一己にて申付候事などは全流弊の様に相見候間復古のこと申諭置候位までに候存外に御用はあるところ也此ほと入牢物御役所留とて三十日も五十日も假牢へ入置分ともにて六十人餘也其外入くみたる出入四ツ五ツもあるへし此分にては少々の隱徳くらひは出來可申歟出立前花亭老人佐藤捨藏其外入魂の人の教もあれは異なること花やか成ことは少もせぬつもり也御安心候へかし時々の巡見初入之禮等或は御目付の巡見等いまた濟きらすよつて今以評席には出不申初白洲來る十八日と申事候にて夫等之事少も世話はやかす與力まかせ先格通にいたし置候

○四日

○春日の神主か所藏に六七百年已來の日記の類ありみな社頭の式なとにてとるにたらすたま〜一冊はみるへきものなるにみな春日大明神の佛



經をいたく信仰ありて大般若よみたるにより大明神のいのち助たまひし或は死て地獄に行て大明神と十王と相かたらひ玉ひて蘇生させ給ひしなといふことを書けるもの也併日記の手跡の見事なるはくれ〜も驚入也時代〜に手跡の風あしくなる也是はいかなる故にや上古の質朴の風滅するに隨ひて手もあしくなることか其わけはわからねと今より昔をみるごとく數千年の末にいたりたらいかなるものにや可成行しかし唐土の數千年の書風の體にてはみな蚯蚓のごとくにも成ましけれともさても古の人はいかにしてかくはかきけむ可尊ことにそ○奈良によきこと奉行所の昔より盜難火難なくさて天井はかりに鼠居て害なす猫なければ肴とらるゝことなしこれはいつかたにもかくありたしよほと重荷をおろしたるかごとくおもふ也○御取締懸之筆頭與力二番與力共を居間へよひ色々々尋候而茶を爲給江戸菓子など遣し候いづれも格別こゝろおかるゝ奸物體の者はみえす

○五日 晴 けふは春日并東大寺之もの共より初入之禮を申す也春日之
 社人はかり衣紫の差貫末々のものもけふ出る位の者は大紋也され共次之
 間に平伏し奉行を辭を遣すこともなき也○坊目拙解に坊屋敷町は往昔中
 坊左近秀行御番にして慶長十八年五月十一日子息飛彈守左近將監秀政南
 京の奉行職たりよつて守護の廳舎を作る耽人稱曰中坊屋敷是其縁也仍及
 貞享元祿比奈良の俗士刺史の館を中坊といふ或人云中坊は往古興福寺衆
 徒中會所にして則中坊左近秀行守之中坊氏先祖衆徒たり云々とあり兼て
 小笠原などともかくあるへしといひしか土地のものもしらさりけるにけ
 ふ案の通の證を得てこゝに記しぬ○わか江戸にて遣ひし素こき柄は壹貫
 五百目ありし久しくやすみてきのふ槍の素こき柄來りたり八百目餘也け
 さより遣ひはしめみるに江戸にては彌吉の兼被見候通一度に千三百本
 宛毎朝こきたりしかけき漸半の目方の柄にて六十本こきたれば腕折るゝ
 ことく成たり温故知新の温の字を温燂と註し一旦あたゝめしを斷絶して

孕石備前等
 老功の人々
 か直政へ上
 書三十とか
 も四十とか
 四つはなき
 をつけたる
 ことはいふ
 とを書置た

ひえぬ様にすると論實に確論也我等かなくさみ同前のことはしはらく
 さし置ぬいかに上手といはるゝとも中絶しては必いたく藝おとりて半に
 も及はぬなるへし温燂の字武藝を學ぶものも忘れてはならぬ事也毎々彌
 吉に申すことなから朝夕に日々少なりとすれば藝さひぬ故にさほとには
 わくるならぬ也刀を爲磨おりゝ拭候といかに心をいれ磨たりとも久し
 くうちこみて赤さひ出たると引くらへみると心をいれたるかた却而大に
 劣る也この心藝術上のたしなみ第一なるへしわか武藝もと鈍刀にてあし
 く時々磨たるかさひたるに付以後は銕きうにも刀にもならぬものと成た
 るなるへし可怨可悲このほとも例のす振素こき毎朝いたす積也すふりも
 重き刀に三百七十はかり漸なりしか是は到着三日相立候にはしめ候間けさ
 などは三百七十までに復古したり永日記に村瀬勘十郎覺書といふも室賀入道
 の勝頼馬の乗下りに聲をかけてさる諸軍是をみて年老ては戰場に出ましき
 事と云り此時入道四十六也昔の手柄はみな若手の時とみゆ四十六を老人

るの年老て
はと云によ
く符合する
と覺たり類
頗馬援が類
は別段の事
十人が九人
まてはみな
かくの事な
くなるへき
事かなしき
事也

と云けるは今不審也とありわれ此ほと毎朝乗馬すれとも少もくるしく
は覺へねとも夫は平日のこと必山坂をかけ歩行命をまとにてくるしまは
必大くたひれとなるへし大功の室賀入道もかくの如し若きもの必三十前
に竹刀業は名をあげ置へき事也程子の申されしに如人少而勇老而怯少而
廉老而貧此爲氣所使者也若是志勝氣時志既一定更不可易如曾子易簣之際
とありけるこそわれらか此上の守なるへしなと、けふも室賀入道のこと
にて歎息もし又はけむ心にも成たり

○六日 晴 四日にはわた入かさね也しか俄の暑もよをしにてけふは裕
にてあつし寒暖氣暑より四段あかり八十度に至る也少々しけしからぬ事也
○日くれ前におさと市三郎と庭におりたちうちめぐりみて築山のうしろ
なる少々なるよき芝原ありみれば的場に成居る間ふみみるに凡十三間に
廿三間ほどあるへし芝間に的場又は相撲とる場もあり萩をかそへみるに
三十株餘所々に散亂してあり廣きところは別段なるもの也○おさと大に

こゝろよしみつから髪をいふ也きのふは女共と旅中の話の序にさよの
中山にてあめのもちうる女のおかしかりけるまね或は箱根あたりの立場
のものかもちいぬ其外買ふさえずり等まねて女共を笑する體よほとよき
機嫌にてちと脇よりは機嫌過たることくみゆる故に密に如何とおもひ居
しにけふも少もかはらすといふか、れはよほと快成たりとみえたりされ
共聲の打くもりたるは今になを少し残り居れり其全に復古せぬうちは全
快にはあらざるへし○けふ庭をみつゝ

諸人かわかくさ山にさわらひをつめるもおのか庭と成しけり

こはよくわかくさ山のみゆる故遠目かねにて折々みて興する事也

春日なる三笠の山に月みるもふるさと忍ふ涙とそ成る

わかくさ山三笠山は引つゝきて雙ひ居る也され共わか草山は更に木なく

三笠山は木立也

花もみち千とせの松のかけしけみ鹿遊ふまで廣き庭もせ

なみよする池水ひろし船あらは夏をしらしとおもふはかりそ

老松の根さしのまゝの丸木はしふみ越わたる庭の池水

泉水を築山のうしろまでのちに穿ちて鴨なとつけしあとなるへしとみゆるところに丸木はしありよくみれば大樹の根なり庭のまついつれも古木にて畫かくか如く下枝は池水にさし出て半はひたしたるも二本ある也
われともに來まさぬ母をおもひやりてなかめやらるゝ庭の面かな

○七日 雨 けふは與力共の誓詞小書院にゐ見届也奉行近習に刀爲持て床を後ろに着坐次之間に用人給人罷出誓詞申付ると申をきつかけにて給人良右衛門誓詞をよむ同人繼上下着用いたし罷出立派によむ畢る民藏は渡す民藏より與力筆頭は渡す也畢る民藏受取候る差出奉行見届候由申候得は誓詞被仰付候る難有旨申之也同心小頭町年寄は誓詞申付候由申渡畢る奉行は退坐あとにて用人與力共と誓詞見届くる也血を出すに小柄もはりもありはりは與力などには不似合のことくなれ共御城新部屋に誓詞は

小サなるきり御老中の御宅は必針出る也といひければ板くらの屋敷天草陣の時誓詞せしもの共の針馬はりの如くにて小なるもの今以板くら家の寶物になりて彼家にありと民藏いひきされは針のかた却る古格なるもしれぬといひて笑ひし○都筑金三郎并與方よりの遣ひをかねて使者來る先達を返禮として三位有功之かけ物菓子など來る有功の書能書なられとよほとよし名の空からぬをしる也○坊目拙解北市町大井のことをしるすケ條神君大坂の役に中坊屋敷に御泊御家來の面々力ためしに大井の八角の井けたのうち貳枚井中へ投し夫々六角の井けたに成其井今尙存するよしをしるしたり 神君の 御坐所と成しこともありしとおもへは恐多こと也
○八日 晴風 灌佛にて奈良の寺々はにきやかなるよし也あま茶とりに大佛は遣しぬ○木津川本名は川の鮎つみ至る下直也百文に上五人一度之菜に成也江戸にてすゝりふたなどに用ゆると違ひ多くあれはわかさきの如にて味なし

○九日 晴 今日は興福寺東大寺春日社巡見也與力貳人羽織袴に而鍵を爲持召連候懸り之同心貳人罷越す自分供立は平日之通にて羽織袴股立に而町代貳人同心同斷先拂に立興福寺に參るこゝは門内より立派なる庭に而檜ヒわた葺の社等ありアシヤ行者なるへしころも體のものを着門外に而出迎いたし中院屋案内いたすこゝにて第一の寶物は聖武帝の皇后也光明皇后の天しく而御取寄之由銅の磬大唐を參り候由之泗濱の浮磬拜見いたすいづれも珍物にて古色別段なる事也泗水より浮み出たる磬なりと出家の申せしもおかし銅磬は蓮からくさにて五音の聲を備へしといひてうちきかすなるほと所に寄いろゝの聲を發する也天竺よりといふはいかゝ名所圖繪には貞享記を引て華原磬泗濱石は此てら第一の什物なりといへり聖武天皇は唐の玄宗と時を同じくなし玉へはいつれ千百年前のものには紛なき也其外寛政に類焼したるといふ義經正成の冑の鉢以上集古十種にもみかゆをみたり義經の方は奉納鐘とみえて並々の冑の三ツかけもある重サにてかた手にてはよほと重く

おもふ也正成のかたは少々頭なりこゝろにて輕きよき冑故焼たれとも至るほしくおもひし也夫々食堂細殿東金堂五重塔南圓堂へ參る興福寺之出家貳人案内として先立いたす白の紋紗紫の袈裟にてよろしき出家也右之途中はよき芝原故歩行いたす見物の夥敷にはこまる也右之堂塔は應永の頃のものに而當所にては古くは難申され共佛體はみなく聖武帝の御願に而出來けるもの故唐より參りたるもあり古くはなりたれともいつれも生るかこときものに而珍敷といふもおろか也夫々春日に參る石燈籠の古きはみせよといひ置しかは年號のところ洗ひてあり貞建武頃のものあり直會殿と申ところにて寶物をみる甲冑多し誰の所持せしを納しかよほと多くあれ共言傳なくして不分凡建久の頃ののものにもあるへしやみな日のみさきの鐘くらしいのもの也これにても着料と納物とあり大造のかなもの打たるには引立られぬもあり冑はいづれも手にとりみしか紅威の冑などは中々片手にてはもてぬ也三百年頃のものか大たてあけの臍當姥ほうひしのかなもの

くさすりには着用したるとみゆるもあり冑胴ね共至あかるく白檀に薄くうるしをしたるかはけてさひの如くに成たる見事也これは納物として作たる品これは着料也とてわけみせられたれば神主共不思議かる故に直に輕重にてしることをいひ年曆の凡は姿にて先あらくなからみゆるよしいひきかせたれば甚悦服せし體也春日大宮の神前にはから鞍にて眞の裝束して馬面を附たる馬の繪ありめつらしき圖なれば與力共あれば珍しき物也とはなしに神主共かいふには水野越州も稱せられて寫されしとなり春日には小休いたす白き袍に白き差ぬきしてまるき烏帽子せしは上官とみえてこより直に暇乞して退去しかり衣に紫の差貫せしは茶の給士などをして用人迄も夫々茶臺にのせて出せりそこを出て小なる社ありそこは社人も不居青竹の手すりにて什物かさりあり至る輕き取扱體なりしか竹帙といふ札ある故のほりみしにみすの如き竹をくろく塗それいいとにていろくの文からを縫たる卷物の經文の帙也空海又は聖武帝

等の宸翰等の金字の法華經也こに東ねて夥敷經文ありみな同時代のものとみゆれ共神主共佛のもの故に至る手輕にして置體也夫が大佛に參る大佛も聖武帝の御建立にて一旦焼たるを寶永に堂等出來たる也併二王門等は千年前のものにて二王は雲慶か作也といふ實に目を驚すはかりの上工の造りたるもの也尤千年前のもの故彩色は剝て白土作の如しこには唐宋のころ大工鑄物師の渡り來りたるか作れるもの多く銅燈籠は宋陳和卿か造りたるにて經文銘文等彫附あり東大寺は二月堂其外古物等夥敷ことにて記すにいとまあらす金光明四天王護國之寺これ東大寺の全の寺號也と被遊し聖武の御宸筆の額東鑑に出たりといふ頼朝か自筆の文書數通或は唐鑑眞大師か聖武帝に奉りしといふ舍利塔なとをみるこの塔のうちに佛舍利二十粒入ありその壺は水晶のことくにて更にくるみなくあまりすきとを古文書等を見は日もくれぬへしとて荒々にして止め夫にも七ツよほと過に歸りたり東大寺其外今日之什物は靈寶等ことくにみるには丁寧にせは三年もかゝるへしなかくくしるしか

たし十六羅漢のかけ物二通り三十二ふくかけあり昏中至る新敷かごとし
され共凡書にあらず手跡すくれて見事也よつて筆者をとひしに足利家方
納られし顔暉牧溪か筆にて禁帝は度々御取寄あり 後水尾の院の表具を
直し賜ひし也といふあまり古物のみ見て牧溪等を三十年前の書工かなと
、おもひ心にもかけす書のよきに不審附て聞て驚しも大笑也鑑真大師の
古像至るよし袈裟は實に古きすたるへき小きれをつゝり集てつくりたる
かごとくみゆる也○けふ女子供其外夥春日其外は參詣に出たり若くさ山
の麓はむさし野をかけて人多く集り子供らか鬼わたしに緋のけたしか長
襦袢かを着上着ばかりまくりあけたる女かかろくさわきかけ廻り或は膳
椀まで持來り圓居して飯くひ其外すいつゝに重箱さけて來れるなどもみ
へ、わらひ摘もあり至るにきやか也わかくさ山よりむさし野へかけてはきれいな
芝地にて更に木なし子供のよき遊ひどころなり
わか草山の上に居る人は豆のこ
とくのみゆる間よほとの間敷也是はけふ天氣のよきと巡見あとのかさり附を
みるとに出しなるへし○二月堂の若狭井は常はから井戸にて二月堂のま

つりの時若狭とて井に向ひ呼と井底より水涌出するといふ故にこゝろを
附てみるにかた／＼は至る地のたかき所なり随分とわさの出來可申事也
十日 雨

十一日 雨 けふは巡見として可罷出處雨に付止ぬ

十二日 晴 きのふ醫師は按服させなからいろ／＼の話に短尺かく可成
なる墨はいかほともすへきやといひしに兼る筆墨のこと好ませ給ふと聞
よき墨ならば江戸より御買被成たるかよかるへしといひし故其譯を聞に
南都の墨を江戸にて前金を打置て買ふ也よつて一口に千兩も貳千兩もす
る商ひする故たとひ一挺の墨に一分の利あらむとも夥商ふべ高を以み
れは大成利ある也土地は賣わるき故に利を多くかけねはならずよつて江
戸にもやられぬ先つは二の前なるものを土地にてうる也よつて細やか考
みれば江戸も土地も價は似たるものに成也しかるに南都の墨は造りてよ
りはつか壹年か或は十日三十日のもの也江戸の墨は造りてより大坂は廻

し夫より年を越して店にてうる頃は高き價の墨は買ふ人も多からねは壹分もせむ墨は多くはつくりてより三年にも及ふ也まして二十匁三十匁の墨には古きを尋求なは七年にも八年にも及ふものあるへし左様なる墨は膠かれてねはり氣薄く遣ひよき也南都の墨は膠強くねはり甚しく直に糟の多く筆につきて筆頭鏝のときものを生し宿墨如飴に成也よつてよきことに用ひ給はむ墨は江戸より御取よせ然るへし茶のことや、夫に近し夫故に江戸にてはちやの價宇治最寄の割よりは下料也といひき其説謂あるに似たり 御膝元に居りたる計にては 君恩の難有はしりなからかく迄具にはしれぬ也薪炭にいたるまで船都合あしくうり捌のよからねは中々島會所の薪天城山の炭けふよりも高き也燈油は土地にてもしほり大坂境にも夥あれとも矢張よせ場の油よりは格別に高直也家來共みな江戸の諸色は割よりは下直のものなりとて口々にいふ也○けふは 行道公の御忌日なり御隠宅に御持越の御膳あれは夫にて膳ること御燈奉ること江

戸の如し勿論おさとの例を通みつからす也○前の醫師の説のことくならむには奈良は江戸より墨かさらしを土産にし宇治へは茶を土産にしてよきか如くなれ共さほにもあらず只江戸も出來候ところのもとも價ひ同じことにて江戸のかた品物のよきといふ迄也何も江戸より墨をかひ候御廻しにも不及候眞に絶倒噴飯の極也醫師の事甚敷かことくなれ共俊藏か話の山本山の茶を宇治へ土産にせしといふにておもへは更に強こともあらぬ也○民藏の妻のはなしに江戸よりは人々のものいふさまも故郷に近ければよくわかり錢をも銀札は遣ひよく下女もあれはひまにもあり奈良ほとよき所はなしとの事也江戸のことおもふかといひしに向におもはず愛らしくおはし、わか様のこともこの頃は忘れ只折に、に御隠居様はいかに御さひしくは不被爲在哉と民藏とも語り出すのみにて江戸はもとより親類もなし夫よりも備中は大阪まで八里參り跡は船路に付早く行て兩親に逢たし其外望なしといひしけにまことなることなるへ

し○池田播磨か庭に撫子うへ^て置たりといひしか一もともなし花園に小草
生たりけふ序に播磨守方^はかくといひ遣しぬ

撫し子は君をしたひてあつま路に行しやあとに根をもとめす

○十三日 雨 巡見のつもりなりしか雨に延引に成けふは與力等か宅
にも参ること也その時茶を出し少々宛菓子を出すこと^のよし右を延引に
は成たれ共くれたり七軒か分を小成菓子折にして出す^{背丹よしと}○きのふ
俊藏相撲の檢使として参る三役といふもの江戸の三四段目以下位^之由^三
とは大關關脇小結に吹上にて上覽之時もひるきのものはなをくるゝに江戸な
別段なれば三役といふも古きことなるへしは呼出しの奴といふか手にさゝけ出て相撲某^は御ひるきの御かたより
員數はナンボウジャカ存ませぬかほう札^{銀札の}壹包下さると披露するよ
し一九か田舎芝居のことうきく草さうしに花をくるゝ披露に新田の小
旦那かもとより牛房二把被下などいひしはいにしへの帝居たる寧樂都
の相撲を奉行職の用役か檢使として参りたるはなしに引くらへみても實

事としるゝ也○一九か作のことにておもひ出たり奥方等よき木綿をは眞
岡といふものと心得吳服屋より取よせみて江戸大丸にて二十五匁程^之も
の三十匁餘にてもなしといふそは又關東流を云故なるへし土地のよき木
綿といひて取よせ候へといひてとりよせみしに綿井中かたにて十五匁よ
り十六七匁の品はよほとよし女共歡ひて買ふ體也十五匁といふに^{壹匁五}
金壹分^{十六}餘^六拂ひ遣し候^而損をするなとみな彌次郎兵衛喜太八か點なるへ
し

○十四日 雨 けふ白きあひるをもとめて池は放ちたり餌をやるにみな
^雌め^雄とりの計給させて雄とりは食はずみなく笑ふて雞も多くかく也など
いふ

うきしつみおのか妻子に身をつくしそは水鳥にかきるものかは
なといひて感ある實をのへき

○十五日 晴 月並之禮うくること常の如し○一乘院宮京都より御歸殿

に付拜謁として参るのしめ長袴也一乘院は御住居惣金はり附に彩色繪檜木造なれ共所々荒て高麗へりの御疊雨もりにて少々つゝくちたるところもみえたり家司出て面謁頓て御逢ある御土器被下之御肴は御手つから被下之御懸之御定ありて御上段之御襖閉之右之御席に坊宣家司罷出候而挨拶いたし御酒御吸物等被下之此御院室は御用途多其上久々御若年にも御寺務遊れぬよりいかにも御ことたりましまさる御様子に二の膳の白木鼠の色を帯ひ御酒之瓶子の黒くさひたる御盃のさまわかやとに常に用ゆるよりもまたもよからぬ體なと忍入る涙のおつるを覺へぬ也寺の方調役の時某の坊官はわか宅の御使として秋山貢といふものと共に來りてあひしこともありきといひしかわれは忘にけり當時は伏見宮の王子にてわたらせらるゝ也

○十六日 晴 今日白洲に初出る取調之處先例も有之に付窮民共いと老たる若くて貧なるか身煩ふことあるなど内探して呼出し錢を遣す○

間部下總守近習之もの共上京したりとて兩人來る

○十七日 晴 例之通十一日より御清にいたし置候而参拜也東大寺地中龍松院の御初穂貳百疋獻備給人御使者相勤る箱也箱也自分供立例之通徒共も麻上下自分は長袴也龍松院には拜禮畢而赤飯出る陶器の菓子椀にしめもの茶椀もり等也同所を今辻子町之西照寺にも参る二十町計こゝも二百疋之獻備にて給人参ること前のことしこゝにては菓子出る

○十八日 晴 民藏其外之妻共初春春日其外に参詣いたす若草山の登るをみるとみなく望遠鏡をもてみるといへとも遠ければ人かたわかるのみにて其餘はしれすそめか話に聞に所々に江戸の女をみると大勢附そひ歩行町送にすること全江戸にて生酔或は引廻をみるかことし茶店へ休めは其茶店の参り着類等をみる一度にてこりくせしと云けふはところのものも出てわか草山の邊にきやか也髮差等眞の鼈甲さしたるは更に一人もなし衣類は緋の板しめ等着するなれ共かかさしはみなしむちう

等にて凡壹本二百文に過しはなしされ共前々貳本後ろへ貳本さすは老女といへ共みなしかりましてわかきにはあみたのごこの如きかありしかなからくしより根とめのかんさしに至るまでみなのことさす集むるとも百疋のものはあらしといひき銀のかんさしすものにてもなけれは也江戸の輕きものにも筭壹本に七八兩宛のを用ゆるはいかなることにてや武士に妻の頭の飾八十兩もありて夫の刀は三兩にもいたらぬ用たぬを帶するもあるかなり歎息のこと也奈良を笑ふへきことにはあらぬ也○奈良を御用日とて差日之目安等わたす日は六半時の呼出し也六日十八日廿七日也けふは御用初にて白洲ありといふ公事を聞に目安返答書をも出さす何程の事かあらむ目安返答書のみすに聞へしとわさと何をも聞かす白洲の出たり十人計之もの一度に其方共願之趣一覽いたすよつて裏書を遣すといひし計にて事濟たり握つめたる力こぶの可散様もあらさりしは一笑也尤白洲等用人共不案内故前よりよく及承せ置たり白洲の目録といふも

のにも朱にてかな附さすることはこの方々好みてさせし也書面之外に大かた公事あるへし夫をみせぬこと、おもひし故いらぬ損をせし也丁と書ててうといひ町とかきてまちと呼類あり必申渡の類にはかな附して貰ふへき事もある人遠國奉行の時かたかなにて假名附して出したればわれ孔子の親戚にもあらずよつて唐のかなはよめす相構へて已後は日のもとのかなを附候へとていたく與力を叱りしとて矢部駿州か一はなしにてわらひしか夫にも及はぬ事也脇坂中書などは天下をとろかしたる才子にてよく讀事を得手たりし人也けるか白洲目録に假名なきは受取られさるき尤なること也けしからぬ村名等を字音にて呼百姓の返答せさりしなとまゝ及見こと也

○十九日 雨 けふはこゝの與力同心年寄其外御役所附之儒醫より門番の末々まで初入之料理を出す也與力には目下壹尺の鯛の焼物にて用人の出て焼物を引出入之町人共か手長にて徒士か給仕すること先格也奉行より

盃遣し手のし遣す事也 是は煩しきないといひにて彼方々内々及斷也是も先格也 ○奥之自分分は本膳焼物附
 鯛其外はきりみ焼物也吸物貳ツ壺は大はふかのからしあえ以上こゝにて至
 鯛のさしみすゝりふたひらははもと鯛と也 平へ切み二種をいれうつ高く鱈等
 相應也酒はこゝにての上酒つよきけんひしのこときもの也 價壹升百八十文也御隠宅様には
 御好にて二百文の品を差上るこゝに此上よりよろしき勝手働のもの十人も参る肴
 酒なし尤江戸にも此位の酒はとてあらしと思ふ也 勝手働のもの十人も参る肴
 屋の召つれ候ものにははなうたにて背に彫物などある男もみゆるよし 此
 た一向にわからず源氏は京都の人にて須磨へ行かれし時に海士かさえつりのわからぬこ
 とを云はれしはつか一日路の須磨もかゝれば百三十里さきの嘲歌いりなとわからぬはつ
 也酒は酒屋参り逐一はかり立て燗番をする也江戸ならばやち馬の勝手
 働附たりの飲食夥ことなるへけれと一體しまつ成國故至るかたし働畢あ
 ひら一ツ遣し酒飲するのみ御養父様など密に奥臺所の隔の戸のふし穴よ
 り御覽して時々かくありきなといひはやして興し給ふことにそけふらも
 母上のおはしまさぬことをいくたひかさとの申出しこと也御養父母様御
 咄になら酒ことによく肴の多くはあらねと更に山家のことくにもあら

ねは我等は極樂世界なりとこの頃常におもひ居るとの御事也

○廿日 晴 御稱月に付興福寺地中院屋の拜禮として参る中院屋寺は大
 乘院一乘院御門跡御法議の時御出のある所也その御庭は御門より参る
 御靈屋のつもりにも御濱椽よりうちに入御正面にて平服いたすは侍従以
 上之人々の拜禮いおそるくみるに文珠の像并四天など壇上におり 御
 尊牌の御様子みえかね候間不審に存し居候内承仕もの 増上寺の行者上野の中
 著たるも 御尊牌はこれ也それ迄被爲入候御拜あれといふよつてそこは行
 み奉るに左右に棚ありて左は 御代々様右は 東照宮の御安置ある也い
 かにも御手かるなる事也是等は遠國の故なるへし申さは上野の法談所之
 内に棚をつりさし置奉るかことし夫々興福院に参る 浄土宗の尼寺也 大猷院
 大納言の娘の住職いたし居りしを憐み 思召て 御朱 奈良の町をはなるゝこと十
 印地二百石を賜ふよつて 御靈屋を奉造營ものとみゆ 寺役人のしめ麻に
 町餘の田のなかの山よりにある寺也よき寺也總門内に寺役人のしめ麻に
 平服中門に尼僧貳人本堂前に尼僧貳人并住持之尼けん紋紗の紫衣に中

啓もち出迎たり是尼勸修寺家の娘也と承るそれ御水屋體の所はつかにありそこにて淨水を遣ひ尼の先立にてこゝを脱す石段をふみ登ること十段も其餘もあるへしそこに御清草履ありそより尼ははたし也少し行御敷出あり御階段ありて御尊牌奉安置御靈屋すかたのものあり拜畢本堂一覽書院に前格にて赤飯出す至るきれいなるよき寺也この尼善書の聞へあり附弟は芝山殿の孫女にてかの近頃聞えし持豊卿の孫女なれば歌をよくすといふ評判也住持の尼は惣入齒なれば六十餘なるへし附弟は美なる聞えあれと不出○夕かたさとか女共つれて庭の芝間にてこそこゝみしか鬼わたしにてもなしてみなく遊ひ候へといひしによろこひてさわく也裾からけて泉水のあさ瀨あるきみるもありきかゝることあることに母上の御事申出ることにて來年は迎のものあけたしなとさとのいひき

日と月の昇をみても忍ふかな君と親とおはすかたとて

○廿一日 晴 裕二ツにて巡見いたし候けふは奈良の北方巡見也はしめに與力處大汗に成八十度に至る

の宅に參る與力七人之内五人は御役宅前二人は多門屋鋪とて多門山御林籠に住居こゝに同心も居る也與力は服紗麻にて門外に平伏坐敷の通り候と茶烟草盆出るいづれも自給仕也畢ち相應及挨拶罷歸候節門前に平伏也同心は小屋前へ出平伏いたし居と與力名披露也與力之宅至るよろし御同朋頭などの如くに玄關の馬具或は弓鍔炮等思ひくにかさり置也屋を潤し居候體町方與力共などの外おもかけおもひやらる同心も是又同しわれ近頃と申候内けふは眼氣よからぬ故歎同心共之内に青きと内軒にかけしもみえし銅にはあらし青竹なるへしさたかにみえす與力之宅に火之用心歎臺所に壹間四方程のみかけ石の井筒へ鯨笛のこときかさりあるもみえき餘は押ししてしるへし夫を講學所へ參る玄關坐敷其外とも三四間あり太田備後殿自書の明教館といふかけものありこの朝臣はわれ至る懇意なりしか書を好みてもかゝぬ人也しか珍らしき事にて紛へきあらぬ自筆故いにしへをおもひ出たりこゝに獻備之朱子文集も一箱ありき聖像は安信か筆に是は梶野土佐か獻備

松永正城の石がきつ
町中の石塔
をとりたつ
頃まては奈
良の塔の影
墓所に必地
刻観音等
かしてせし
捨は夫を
を石佛は
も多用し
ぬもくす
い佛は千
まいなは
正の城は
役所は御
礎牢屋の
凝にたの
りよつり
めきとも
多きと
力羽田
右

寧府紀事 (弘化三年四月)

也 此學館土佐守が奈良奉 夫を多門山御林に參るかなりなる御林也これは松永
彈正か城あとにて井戸等今なを存せり石かけ等もなく只松風のみ聞ゆる也
こゝを下り候る眉間寺に參る本堂の舞臺體のところより奈良の町々奉行
所等或は笠置金剛山三笠山等よくみゆる山々打つゝくなり峯より峯のか
さなりしはみとり成浪の崢嶸なるに似たりしといふ左もあるへし 寶物をみ
るよろしきも多くありこの住持實に眞言律なりとみえてあまり偽のあら
ぬ也 聖武帝東大寺落成の時のかけ物ありかにも古しよつて尋しに時代はしらす古く
帝の御陵はおりく 如雷鳴動すると兼多土地のもの言故に夫をも聞しに兼多寺にて
いひ傳へ土地のものいふなれと耳うとときにや拙僧のきゝたることはなしといふいと
ふとこゝに光明皇后より賜りしといふ藕糸のけさあり 是をも後世にはきか
多羅袈裟等にしへにはいふ也いかなるものかといひきよくみるに至るし今のち
みなどの中々可及にあらすいかにしへの繻綿縹紗などいふものをはすのいと、いひ習はせ
細きなあみたるものか糸の至多 聖武帝より賜ひし七條の袈裟あり 只の麻を香衣の
も忍也今華美なるものよりは却多殊勝なりとて稱せしにこれを浮屠にて こゝの本堂
のうらな聖武帝の御陵に參る也御陵のうちにや石段ありて三四十段も昇

衛門といふ
老人の語り

釜五ツあり

とそこに一段高きところありそれをこゝろあてにをかみ奉る也いにしへ
は廻りに堀ありしか今は田と成たりといふ夫を般若寺町の布晒場に參る
こゝに大成釜へ布九十反ツ、入わらの灰よりとりたる汁を入れて煮てうら
の佐保川原に出してさらす也佐保川は佐保山の麓を流るゝ小川也 南都八
ちにて紅葉布をは木の大白に入殊に柄の長き槌にて打川水にて洗ひては干
也それを般若寺に參る是は 御朱印地にて七堂伽藍古はありしといへ共
今はあれて聖武帝の御建立のものは石の十三塔計也 石の九尺四方計なるを
多の大成にして段々十三つみあけ其上にくりむありかたはらに石佛 菅相公の御自筆
の縁起あり 寛平の年號ありて俗別當として委細の位はしめ三十計は霧を隔
てみるか如くなれ共段々分明になりて牛より末は水莖のあはしめふかこと 大塔宮
隠させ給ひし大般若經筒もなき宋板なるへし 神功皇后三韓御征伐の矢弓は
まる木のぬり弓白木のことくに成たるにしらぬひら 慶長の末に至り十三塔の内
出たる佛シャリ 是は最上金の龍二正にて金の蓮華坐をさしけ其上に玉の如きものへ
出たる佛シャリ 是は最上金の龍二正にて金の蓮華坐をさしけ其上に玉の如きものへ

寧府紀事 (弘化三年四月)

一は勅封
二は御寺務
三は御門主御
封也

寧府紀事 (弘化三年四月)

百二

おしけより
参る菓子一
同喜候給

へし古色 夫々空海寺に参る心一は沙門空海と奥書のある 夫々三倉に参るこ
別段也 夫々空海寺に参る心一は沙門空海と奥書のある 夫々三倉に参るこ
は見置計也 是は天下に聞へたる正倉院勅封倉也 檜の三角なるをもてくみ立根太
下壹間餘もありて四方かけはらひ故風拔よし梶野か頃御修理のありし跡屋
根に少々ありて外は少も手つかすみかけの如き礎風雨にされて木めのこ
とくなる文をあらはしなから柱等少も朽す千載以前のもの全く存しあり
めつらしといふも限あること也 此倉知足院の門前芝間にあり番人もあらず年をふ
武帝御愛玩のものことくく存せしは實に不思議也 異朝の天子の陵をあ 三倉は十八間に
はきて寶物を奪ひ死したる皇女の枯屍を犯すなとに引競ては實に神國也 亦は六間あり
因にいふ奈良の頃は壺の石ふみの體にても東北國は漸にひらけしはかり
なるにこの七大寺を御建立はかりも夥ことなるへし三韓を屬國と成し給
ひしなと御國力の程今よりはおもひはかれぬことにそ〇今日四時過廿四
日の書狀到來いたす母上様の御機嫌能ことに御氣たしかにて別段成御こ
とのよし彌吉おしけのよくつかへまいらせ太郎か成長せし新右衛門幸
三郎かつとく來りて母上をなくさめまいらせ家來共か取締よきこゝろや

幸三郎の御
沙汰書の外
と申候外を
れ奈候外を
たのみ候外
茂兵衛方
参り候

すき人々か時々尋とふなといつれも歎しきのかきり也〇内藤鏝のはなし
井上はすゝめしも尤也兩三日已前山吉兵衛か鏝鍍色はよからねとすかた
井耳とも至るよきを買ひたり翌日日なたへ出してみるに下さひあかし少
々頭を搔きたり正價 笹蟹の至る古き金色繪のめぬきをも買たり貳 然るに
さくらゐのさとの豪商かうりもの也とて三尺計なる備前一文字の太刀至
古き坪かさの最上なるにきりと菊の紋ちらしたる目ぬきふち頭さ一目にて楠家の重
やかな物みなよき時代のきくの模様さやへ銀にて菊をちらしたり 一目にて楠家の重
寶とみゆるに虎と熊の尻さや添たり是も又古色ありこれは群山の道具屋
かわか鑒定をきゝおよひ與力を以鑒定をこひ若哉望みならはうりもしつ
へしとの事也鏝に金家風のもよふある故に眉毛をよくつはにてしめし
しに繼忠にやいかにも疑敷ものにて七分三分と さて其道具屋か持來りしに
至る古きものはみないろゑの剝しをあとにてさしたるもの也たまゝよ
く古き體のものは價高しこの手にてよくくふことなれと隨分出逢し覺あ
れはかへしたり具足なと來りしかみな御成小路の店ふるしを近郷の武士

寧府紀事 (弘化三年四月)

百三

江戸に古くは
死罪以上は
門首に獄は
切獄は首を
あけるに
ありしこと
もか

か買て賣物に出せし也田舎目つきなとしてあなとるへからす此道具やよ
く目のきくものとみえたり可恐々々○けふ三十日手鎖申付るものありて
白洲にて申渡いたす其方義三十日手鎖申付るといふを聞ながら白洲と同
心たむまり也頓て外の申渡をもいたし立たむとする時に至り同心鞭かと
おもふはかりの十手をさしなから静々とあゆみより名倉の療治するとい
ふ身ふりにて前々立向ひ羽織の紐とき遣し懐より手を爲出候ふ手鎖の輪
かねをかけると與力か立ませいといふ也三十日手鎖とはしめより直段を
きめたる其外の手鎖ともよほと笑へきことなから是にて二百年來濟來り
たることなれば構はぬ也近頃までも死罪の上獄門申付るなどいひしよ
し也私領々入墨をも用ひしは近頃の事のよし也愚札の愚をかくのことく
にかく也是も前々の仕來といへは直さぬ也手段手續等は同じ江戸の町奉
行にても南北にては少々宛の違ひあるを何もかならず評定所流にすへき
事かは甲州にて信玄の法を御立被遣候ためしにても古き仕來を可改とは

民に酒を
出せし
にせし
酒を
飲は
るに
たは
るに
此た
も飲
も飲
若殿
も飲
なと
銘々
顔と
入す
夫と
みは
蔵と
れは
也

おもはぬ也○奈良は郭公の至る少き國にて夏中一度きくことも無覺束よ
つて好事家は三里ほと山よりへ行てきくと也
ふるさとははやなくらめとほときすならにはまたきおとつれもせぬ
わたつみの魚よりならにめつらしき山ほときすいつか聞らむ
これにてはましめ過て母上の御笑にもならしと
江戸よりは酒も豆腐もよけれとも三里行かねはなきほときす
○幸三郎より所贈の袋長刀體のもの珍敷是は袋長刀歟しかしきつ先長刀
ともみえすつくしほうの袋なるにはあらずや
○廿二日 曉より朝は雨なり 四半時より奈良の南方に巡見に出る橋本町と
いふ所に奈良晒之丈巾等改に惣年寄の會所に行こゝにて廣狹長短の改印
をおす也ほたあや其外めつらしきさらし 此近邊奈良町中にてよき所なるへし
道具や菓子や肴や旅籠屋等によきみせ多くみゆる也そこより中院町の極
樂院に參るこの寺市中にあれ共正徳太子の頃建立ありしまゝにて智光法師禮光法師の
禪室昔のままに存し居る也柱檜にて八寸八分あり違ひ榎もありくさらし

如くみゆる七寶に牡丹の文から金のふち頭の如くにて金を流したるさひて至る見事也この
 かなものは別段なりといひてきす見めかねを出してみるに驚入たる結構也與力共にも
 みせし處一掌中曼荼羅是は智光法師感得日本三曼荼羅の五重塔二丈餘もあるへし推
 同大に驚く日本に塔のはしめにつくれる時の試の塔なりといふ今いふお 其外佛體等小
 こし繪圖并ひなかつたの類を以天子の觀覽ありしもの、存せしなるへし 其外佛體等小
 野篁空海等の作といふもの多あり記すにいとまあらず 或は書其外珍物多
 士か奪ひたるか坊主か賣たるにて錢にならぬ佛はかり残たるなるへしに戦國の頃
 は唐宋の經文にて繩をなひ鐘なとをなはりて荷ひしこともあるよしをいたく歎きしこと
 を坊目拙解夫々元興寺の參る則法こゝの塔其外共千二百年餘のもの也復に修
 たり九りんおろしありさひ色青磁の如くにて千年餘風雨に逢ひたれば銅も所々蝕して割け
 或は刀ならはしんかね等いふかこときものみゆる塔は雨落十一間四面といふ也高き石段
 の木也といふ漸に三重まで昇りみたり奈良の市中眼下にみゆる總檜の木つくり也これ
 南都七大寺 東大寺 興福寺 元興寺 法隆寺 大安の一なれ共今はみな破壊して塔其
 外少々残せしのみ也八雷神面是は古き馬面なるへしと疑ひて厨子を開かせよくみ
 たりとそれより所々に行しか古き佛あるのみにて記すもくたし頭塔
 寺の參るこゝに玄昉僧正の首塚あり 玄昉は入唐して支宗に謁し經文佛像等を携
 廣詞を讒害せしかは廣詞か怨靈天上引さけ行て引さき捨たりといふことを源平盛衰記平
 家物語などにいひ南都に玄昉僧正の肘塚胴塚といふもあれ共信するに足らぬ也則天か懷

義の類か藤氏の人々 頭塔寺は日蓮宗也 巡見の先立いたす僧のうち酒くさかりしは此
 に殺されしなるへし 頭塔寺は日蓮宗也 住持井子もりの社の僧也き不律僧の塚守故に
 頭塔寺の僧は酒のみ子もりの社の僧はれ 十輪院町にて十輪院の本尊をみる空海の
 んれこする爲に酒を用ひしもしれぬ也 十輪院に梵字のある石あり夫には空海か
 作の石の地藏觀音勢至也 空海寺にもありみないにしへはぬれ佛にて前にて火葬せ
 引導をさつけありよつていにしへは棺を此 木辻町に行り遊女町也根津ほとみえかな
 石上に置て葬所は持行しなと僧はいふ也 木辻町に行り遊女町也根津ほとみえかな
 也 椿井町に松井菊五郎宅に製墨所をみる 則古梅園の本宅也油煙及ひ松
 松のひてを焼油煙は燈をかいてあり二間四方ほと塗こめいと塗こめに數十ヶ所燈かいてあり
 唐墨和墨製所みな額およひれんをかかけあり塗こめいと塗こめに數十ヶ所燈かいてあり
 て彫刻せし墨の形あり墨を作る體は落鷹をつくるに粗類す職人はとりたての熊といふ體
 にて光るは目はかり也こゝにて 有徳院様より被下たる墨譜四帙 靈元法王の後世へ傳
 よとて製し被仰付たる大墨六角なるひらたき墨は二十四斤圓なるひらたき墨は二桶の甲冑を摸
 したる墨緋おとし其外共三領あり佩楯くつにいたるまで墨也 菅蒲人形の如し 漢國社に
 參るこゝには東照宮の御具足シタの御前立ものあり御甲はなし岩井の作也御面類等よ
 祈禱あり御具足はさし置れ大黒頭巾の御甲は大坂御軍の御召になりし故こゝになし 念佛
 と神主はいふ也こゝ計は社共外共新敷御紋の金物等きら／＼といたし關東の如し 念佛
 寺 開化天皇の御陵これ巡見の時先格にて與力共の書面にも御覽と認出す也聖武帝
 あるといふなれ共其わたり四五十間四方も其餘もみな一體に地所 夫々牢屋敷の參る
 別段に高くて惣墓所となり居る高き所は御陵の内か申も恐多き也 夫々牢屋敷の參る
 拷問所を一覽いたす近頃まで用たりと水責の道具 草そうしに畫かいにしへ

牢内の取締
向はがよふ
かよふと可
恐始末細
教遺したる
大江動のこ
大騒ぐれも
とあるはれ
あ人もけ
ふもは別
段なること
也今迄牢内
のなしたる
ふ佐とより
もあはきや
牢氣あはき
き抜のあり

類也銘書三くたりもあり石川左近か好みの如し即席濟口に成白洲のうち
に切抜門あり其門は馬場のうちに出る所也密に行はそこよりすきみ出来
る也昔の人もみしや高きところひくきところ所々に小なる穴いくらもつ
くりあり○けふも女犯僧の牢間也こゝにては濱焼といふ異名のせめあり
江戸の石を抱さすることとき木の上は昇らせ置膝の上下は貳本木をさし
置夫をべあけること也其外指より少しふとき繩にて肩を打也坊主一向に
平氣を由老海にかけれとも一向不恐打るゝよりもきうくつなれ共乍去
いたみはせすなとゝいひ或は與力の向ひ貴様は慈悲ありと聞にけふはけ
しからす手荒なといひて一向に不恐よし上總のもの也といふけしからぬ
奴也

○廿六日 雨 奉行所を仕來に厩にて猿舞あり畢中奥にても舞はす
る也其さま江戸にかはりたることなし二疋の小猿にて大の男三人を養ひ
居とはさて氣のきゝたる猿也子わかれして婦人の泣沈みたる様子など實

に人のことしあゝいかなればわれ等は朝夕に聖賢のあとをふみにみなか
ら少も出来不申ことにやとおもへは猿に及はぬこと也市三郎などにくれ
くれ猿におとり不申様にこゝろかけ候出精候へと申聞遣したり人三人
を飢しもせず寒さあつさをしのかせ置とはなかゝならぬ事也

○廿七日 晴又雨 目安渡し十一口入牢物追々分十八口ありいつれも
加役方を召捕ものゝ類也○奈良諸物江戸より高く炭薪等も同じ民藏江戸
古梅園にて貳分五分の墨を遣し此通の墨何程といひしに三分也といふ本
店より出店の下直實にわからぬ事也炭は天城炭を割にゐは月々二百文程
ツ、多分に懸るといふ江戸をはなれ不申候は 御膝元の難有しれぬ也
奈良の居間の蚊帳は銀をかけて引上げる様成居間つりての銀を爲買候處
巾四分程の金焼附毛彫ある 受取に拾四匁と書來りたり蚊帳のつり手に拾四匁
けしからす鏡にて手輕可造とて民藏に申付る同人考に此品は九匁程のも
のなるへし鏡にてもあつらへならはよほと可取なといひきよつて直段を

尙又聞するに拾四文錢四百文也なりといふ大笑也奈良に下直のものは此かき并酒也一生齒の不拔薬も本店にて買たらは三十六文はかり也其外ははつか宇治へ七里といひなから茶三夕の茶は貳夕五分位土地の墨右之見合可驚こと也○入牢物百姓は白洲穢多と無宿は白洲外雨たれ落の所に引居ゆる也畢竟白洲に圍ひの板はめなき故かゝる珍敷事も出来る也穢多并無宿とは間三間餘もあるへし白洲はもとなし書院の雨よけを作りたるもの故に先評定所の風にいさゝか似たり夫の變死を内證にいたし置候風聞有之吟味に成候もの先格故口書なしに落着をいたすへしといひ途中に小盗いたし候無宿を召連來り白狀いたし候ものを先格もあり輕き事故其まゝ門前拂にいたすへしなといひ又先例も悉ありされ共夫をも忍ふへくはいつれをか忍ふへからさらむとおもひて夫々申聞遣したり素人も程のあるといふ位の事也

○廿八日 晴 月次の禮受ること例の如し○こゝは天氣には朝ことにさむき也わた入壹ツ拾貳ツにてまたもさむし晝後々八半時頃まであつくな

此ほと庭中
は白紫のか
きつはたさ
かりなりひ
ろき池の岩
の間の白
あひるの水

る也このふりにて炎暑も過すなるへし○けふよりのほりのたてゝ太郎ほうか悦へしなと口々にいふ也必かきり甲のひけはみなむしりきられ人形共は悉頭も足も捻切りて大勇の烈士か戦鬪の場にのそみたるかことくなるらむとおもふ也わかならにも江戸の例によるとてかしはもち拵ゆるとのことなり葉廣かしはもあれは自由なるへし旅宿同前の御役宅に柏もちあらずともかなの事なれと江戸にて御婆々様の御沙汰とてさとの聞かぬなり同人病氣全よしされ共世話をする事は已前にはいす是いた快氣せぬ故なるへし病中はけしからすいらぬ苦勞をせしか夫は大に減したりそめなともよく異見いふ様子也○けふは南都へ百日目付松平太郎右衛門外壹人參る例の事なから江戸とは違ひかゝること大さわき也用人使者を出し途中へ給人待受として罷越自分も參る也御目付は着之翌日奉行所に參り奉行所に訴狀箱の調等ありて畢る奉行居間の通し候る料理振舞こと也鯛の焼物目の下壹尺といふ先格也畢竟鯛の安き故なるへし何そと

かつきてあ
さる中々風
はあひる
にてあひる
白鷺ともい
へしついで
へみついで
池水につい
しけにうて
てはかきよ
まの御上さ
と申すこと

いふと鯛の寸尺を論すること曲禮等天子諸侯の階等を論するかことし○
よつていふ鯛は七百文に江戸ならば百疋以上之大鯛也七百文にて人少
故上五人にてくひあまる也さとの祝にならへ來りあたらしき鯛を多く食
ふとは墨と上直にてよからぬと同様存外の事也

○廿九日 雨 中院屋に拜禮として可能出處少々風邪に付供揃申付候計
に不能出全かゝり湯のならぬといふ位のこと也○百日目付犬塚太郎右
衛門御使松平勘太郎御番奈良昨日着今日奉行所に参り訴狀箱受取候る旅宿
に出す也全江戸の箱訴の御趣意也御目付には御用濟居間に通し候る飯并
酒を出す焼物は奉行手つから引也御用向に被参候人の此くらいのこと
わか宅に候ははしめての事也給士は平吾直次郎出る存外よろしく出來候

○五月朔日 曇 暮合より訴狀箱改として御目付の旅宿に参る○市三郎
此節よろしき所の養子に参り度とて朝も早起にて其身と筆學も讀書も出

精なり右故精一も同断也市三郎此節の體打續候は、市三郎様なるへし御
婆々様の一寸御吹聴申上候○賈銀拵候もの三人番非人共召捕たりとて長
吏方に一通り吟味いたし候帳面壹冊相添差出す正金四十八兩餘あり工
面のよき奴也拵候賈銀夥所持也あしき岡ツ引ならはわるくすると贓物は
取にかすかもしらぬ也穢多共の事には毎度驚こと多し

○二日 晴 われ興福寺の土塀をみるにとしを経くろく成雨にあたりた
る所木めの如く成文を顯し石にも似たるかことく破れたるを補理せしは
舊に不及不審におもひて醫師隆慶にとひしに古老の咄に土を油をいれて
一旦煮たるものといひ既に土を煮たりしといふ大釜なを存するよし也夏
王勃々か虎牢の土を蒸して城を築けりとの事謂あることにや上方中國の
土を練り酒敷油を以ねり城を築たらは夏の城のことく成へし漆くひを酒
にてねるととしを経如石に成漢法ありといふ也○昨夜六時より御目付の
旅宿に訴狀箱立合として参る水といふわか合印を附し高はり又はいろいろ

ろの紋附たる挑灯多くみゆる不審せしにこゝの與方同心はみな奉行之合しるしを挑灯に附る也わか合印のかくあるへしとはおもはぬ事也こゝにて挑灯を出入之町人共之内に先格ありてわたす也是は彼方に挑灯を拵候而紋計をゆるす也宮方の會符挑灯の類に同じ○南都法隆寺惣代七一大寺之ものと龍田本宮の禰宜神主八乙女等懸りたる別當職を争ふ出入ありふるきもの、由今日初而吟味したり禰宜神主は風折烏帽子八乙女は何かはしらぬみこのきることきものを着たり法隆寺之惣代は白顯紋紗の衣に紫に白紋の袈裟をかけて出たり龍田の村の百姓出揃たる體甚戲場に似たり雙方より千年はかりの由來をいふもおかし證據物夫々に辨別してしらしめ及利害候處即日にと決したり○けふはさとの心附にて御兩親様へ田樂を燒奉るわか居間へ迎へ奉る御酒など上る民藏并ときにも田樂爲給候さとか樽散かてら下女にも燒て爲給候われは暮頃近くより庭の芝生に例の皮をしきてこんろ土瓶持出しみかさ山あたりをみやり其外庭のかきつは

た水へうつるつゝしの花をみ居たりめつらしく下女共にも物爲給するに
よりて例の母上のこと奉存候而頻に故郷の情起りたるに市三郎來りけれ
はかゝる庭のけしきいかにおもしろしといひしにされは也こゝに龍口の
父の被參候而刀の御咄被成候は、又なき御慰なるへきといひき誰もみな
おなしこゝろそかし○一乗か方より水戸殿の御歌をしるしたる鐺の明珍
宗保か鍛たるうち刀の金物の出來たりとて越したりなるほと一琴か師匠
ほとにて別段なる手際なり其體山さくらの雪とふりしく滋賀の山越のこ
とし江戸ならば人にも爲見可申なれ共鑒定するもの更になければわか一
覽せしまゝすこゝと仕舞置たり一乗とはちり帡三帖よりはよからむ一
乗と小菊一束はいかにいふこときことにては見する力もなき也こゝに月
かせといふところあり兩岸に梅の大樹みちゝて百萬株もあるへくなか
なか吉野のさくらの可及にはあらぬよしなれ共みる人もなく過したり漸
に三四十年來好事のものゝ行よし也奈良のものゝはなしに吉野のさくら

よりは遙に立まさりたる梅なれと薪能の頃盛故さしつかえて行たるものなしといひき名高き文人墨客にあはぬ名所なれば既に月ヶ瀬のときも野人僧父を友としてよを過す也平叔死して白牙か絃を絶しといふは實事也時に逢はすは樊噲も肴うりの彌助と同じきものなるへし

○三日 晴 江戸より狀來る新右衛門彌吉小笠原土屋等の書狀 母上より賜りし御書娘并よめよりの書狀也いつ方もかはりたる事なくてめて度し桑原の翁の卒中風にて死せしはあはれなること也太郎か智恵々々敷なりたりとの事三才とはいふものゝ全の二歳よりとし弱の子かさま才力あるへしとは末頼母しされ共才あれば災多きものなれば若夫婦の末をはかりて才をは育てす少も偽なき直實なるものに相成候様教立候様第一たるへし孔門の御弟子にて子路か政事も子貢か言語もみな道をは御傳なくて魯と迄に仰られたる曾子にこそ道を御傳へありしにて才力智恵あるとおもふほと災のあることはなき也空鈍流の元祖一雲か教に利口きようとい

ふは當流の疵也とはよくもいひきはつか一技刀術もかくのときものをいはむや大道をや

○四日 晴 さとの髪をそめゆひ居るそはにえいは人形のかみをくしにてなてつけ居る也よほと智恵附し也こし帯などをみると必すしてきかすべめれば必みよといふ羽織等の出来てもいかなる袖口のいさゝかかはりしにても吹聴する也

○五日 晴 端午之禮を受る 王維か九月九日望郷臺の詩のことくにて佳節に逢ふことに故郷の情わけて甚しく母上はいかに兄弟子孫よめ等はいかに新右衛門か御禮退出より今の頃はきしならむ定るこの頃は奈良のこと打よりていふならしとおもへは菖蒲ふく軒のあやめわかぬまてにおもひみたれてさみたれの雨催しの袖ぬるゝことにそ〇けふは御居間御次之御禮と申候而第一に用人共給人近習中小姓畢而徒士田村續て徒士格差免置候土地之もの并醫師儒者出る用人給人は二之間其以下は三之間也其次に

三之間の増井益五郎古梅園也墨一挺其外菊や等出る汗手拭銘酒なと夫を大書院に出る與力は獨禮間二之相揃候上二筆頭を端午を恐悦申上候旨申之目出度旨及答三之間獨禮は同心共畢二三之間の襖給人閉之奈良惣年寄二之間の出一同に禮申之町代一同二之間落椽の出る郷同心は使者之間に給人の謁同心小頭披露也右相濟候二小書院にお二て與力共一同を奥方の禮あり是は用人の謁する也○節句也とて肴を買ふはしめてにても例の節儉なりたこ一ツ價三百五十文なり江戸にては見まりし生きたる也とて大あひなめ二百五十文いける山家にて海物の鮮なるは江戸よりも下直にて薪炭の貴にみな困るとは實にはかられぬ事にそ大あぢあたらしきか六十文位にて夫等は彌助ならば必百文以上なるへしとおもひなから見過しと俊藏いひき奉行所之儉なる奈良の穢多長吏にも過たるなるへし肴やともなとは穢多の長吏に苗字を附てさま附にいふときくは實にけしからすさて無覺束まことけならぬ事也昔ある御徒の日々に所々の登 城前へ出るものを出入

の肴やの譽てこゝの旦那もよく出精也されは出世して往々は御玄關番さまにもなり給ふへしわか御出入之旦那にては一旦那にて臺所賑ふことゝいひたりとてかの御徒の大に憤りしを聞しもはや三十年前のことゝなりし也奈良の肴やのさま附も又是に類する歟

○六日 晴 こゝにてはけふも節句同様に御役所早引也六日は女の節句といふ俗諺によるもの歟○儒者佐々木育助いふ 聖武帝御陵の鳴動することは無相違事に而育助は境のものなるか泉州の 仁徳帝御陵大せむ陵と申也も鳴動する也案するに御陵之内空洞にして地氣などの次第により鳴かとおもふといふ故それは松風ときゝ違ひしなるへしといひしにいやく松風の如きものにはあらずよほと響にてまきれもなくみな人のきくこと也佐保の 御陵も鳴動するならばしらせ奉るへし御家來を被遣候而御聞候へといひし此男不思議きらいにて書生風の人也されとかくいふを以みれば鳴動もまことか猶尋ぬへし怪を好へき出家は鳴動なしといひ前記に怪

をかたるへからざる儒者はありといふも疑へし

○七日 晴 なまりふしを買松魚をうてたるまゝの如し江戸ならはいさ
みはたなる松魚をも奈良はなまけたなま節てやる

○八日 晴 中院屋の 御位牌所の参拜也○こゝにては御稱月の御忌日
にも吟味物を一向に不構けふも手鎖可申付哉なといふ故にとくと教遣し
たり遠國にはかゝるかしこきことのまゝある也○金魚屋來る可成の金魚
八文ツ、ひ鯉の子のめたかの如きは十に付八文なりといふなくさみに金
魚とひ鯉を百五十文ツ、かひて池に放ちたりしはしにいつ方々行し見え
すなりたりとても百貳百の數放ちたりとてみるへきほとにはなるへから
ざる池也されともかゝるものは下直也

○九日 晴 午後奈良の京終町といふ所より出火其注進あると頓て太鼓
の間の櫓の同心の登りて太鼓をうつ也二十町もあるへしこゝにては場
末のうらや也梁間四間のうらや半やけるに唯々はいかゝくと注進あり

與力御役所詰之ものまで惣火事羽織に而夥さわく也江戸ならば火事よと
いひて直に濕るほどの火事なれ共よほどの間太鼓を打人足みな奉行所
駈附てとよめき火事場懸り之與力壹人は馬持故乗切に而出壹人は歩行也
北のはてより南のはてまでかけたりア、しんといくゝなといふよし計也_{二十丁} 纏
番の給人_{良右衛門}直に若黨鍵持等召連駈出す追而奉行之出馬は可申聞と之事に
而相待居内鎮火也引取之節は纏を先立候而整々として引取纏持手替貳
人_{良右衛門}に而行列之體に而受取渡に手を打聲をかけるなとけしからぬ仰山也良
右衛門歸宅之上いふ火事は少々やけ抜たるを人足集り前後之家を大細引
に而まき倒す故崩たるかた大なりとの事也引取懸ケは市中之見物夥しき
に得たり良に行列に而鍵をふるか如く纏を持さてく當惑したり狐に化
されたるかことしといふ○日暮頃宅狀來る新右衛門よりの日記幸三郎
も同しく御沙汰書迄來る 母上様御機嫌よきとの御事に而具なる御自書
拜見難有只わけもなく夫婦共落涙太郎かいさましきよし其外風邪の流行

に而彌吉の臥たるよしされ共格別の事に無之と之事に而茂兵衛か文通のうちに全當坐之御風邪にて御容體にかけねなしに付御安心とするし候は不相替ながら老人氣才行届たるにて心を安くせり彌吉夫婦か行届たるよし茂兵衛か出精之由は一同よりいつもく承り内外共にいかにもく安心之事共也太郎か子と新右衛門を見あやまちしやよくなしみぢくくとてあとを追ひ或は背に負はるゝよし等愛らしき事おもひやられ候今井太郎九郎の結構大仕合なること野口十郎左衛門か林奉行被仰付は難有御事也島屋の伴頭くすり小僧にあやかりしや途中にて貝破たり等は女ならは大變なるへし誠一は彌吉の背添大笑也○大坂町奉行は達同所に而召捕賈銀遣ひ召捕來る有名の博徒也といふ立派なる男也すらくといひ所謂見死如歸體也一妻一妾にて立派にくらせしは齊人に過たるはたらきありし故なるへしみつからいふ鴻池其外に参り茶立花園基等をいたし彼幫間をしてくらし居たり賈銀の員數等はもとより數もしらす三十八まで樂したれば何の望みかあ

らむ大坂ならば生路もあるへけれともこゝにては知る人もなしすへき様もあらず賈銀つくるものは下關邊等には夥ことなれば我に命せられは須臾に數人を連來るへしなといひて快ものいふ惡黨也この才を以この惡をなすはくれくも愚也惡をなすは不才ともいひ才は徳の用ともいひし可尊誼也とおもふ也昨今は薄暑八十一度に至る時候相應也こゝは朝の冷氣はけしからす午後を俄にあつし其體まつは佐渡に似たり山國の故なるへし○此頃は鹿の角追々に生ひ出る大サ四五寸前後にて枝ある枝なきともにある也其色百鹽といふいろにて日向にては紅に血のすきみゆる也物に觸れは破れて血出る也至而軟なるものゝよし庭にくる鹿のうちに角破れ血を帶たるかある故に人々にとひしに如右也此節は鹿角至而高直にて一本三兩以上するといふ藥店の説也夏の末西瓜の出るころかの皮を食へは角かたくなる也こゝへきしころは背に斑文もなかりしか此ほとは斑文も出來てみるへくなりたり庭に來りても鳥を追ふ様なることもなく穢れたるものは

食はず糞免矢のことくなればおろかなれとも犬ほとあしきことはなき也
○十日 晴 ひる後うちより茶を給るとり／＼新家病人のことをいふ今
まで事なき上はよかるへしされ共やせのもとらぬはいかにとて案する也
○十一日 晴 あさ寒さ九月の如しなか／＼裕にて居られすこゝは朝至
る寒ければひる後必あつし其時は天氣つゞく也庭を少々刈込さする松の
もとにきの子出る松たけに似たるかこときもの數莖連なり生す根のそこ
ろ至るかたく靈芝なるか若きうちに庭清めするものらか刈取りしなるへ
しいまたに赤白色也可惜こと也

故さとにをとづるゝとて書おくる風のたよりのならのこの葉
○十二日 晴 わか居間より飛石傳へにて泉水のふちの芝間へ行は大成
平石居へあり其わきに大松あり高さ八九尺もあるへしや枝まては六尺程
にて凡枝左右へ廣き所にゐは八間はかりに廣かり泉水の水にひたる程の
しつ枝もありそこはわかおりにふれてひとり茶を烹こゝる慰むる所也金

吉野十津川
といふ所は
平家の落人
の後嵐もあ

魚又は鯉あらはよかるへしとてこの頃より放ちたれともいつくへ行しや
更にしれす數の五六百も三四寸の魚を放たすしてはみえかたかるへしこ
は大の小を兼さるともいふへし新右衛門金魚泉水好故にこゝにて常にお
もひ出す也十にゐ八文といふめたかのことき緋鯉を放ちたりおさといふ
このこひの目にかゝるほとこゝに居らむには六七年もかゝるへしけしか
らぬこと哉とて笑ふ也少もみえぬ上は全の一文を惜みて百錢を費せし也
○十三日 くもり 此ほと毎日白洲あり一日もかくることなし○吉野の
百姓とも金公事にて數十人呼出されたれ共貧村なれば更に事ゆかすよつ
て手鎖にもすへしやと與力の言故直吟味せしに訴訟人の少もまけてくれ
すよつて懸合もならずといふ故に汝か宿屋わわたす入用と日々の小遣ひ
三四匁はかゝるへしされは一日に二兩宛もかゝる也五十日の出入に百兩
はいる也願人の面にくしとて奉行所の吟味を拒み入用をかくるいはれあ
ることゝおもふかはしらねとも其面にくきを憤る故に貧村難義して申さ

のりてよほ年
買同前無
百姓共至刀
頑固也極
山家此と極
ふ甲州の極
山氣の極
たたり却み
情なる所
けたる所
りも直る
也人情ある

は是よりはいつまでも妻子の飢も寒へもするにいたる也願人のにくきよ
りをのれらか妻子のかはゆきことはおもはずやといひしに一同アといひ
て頭をさけたり立てといへとたぬ故わか立しに白洲にてなんと難有事
ならずやと涙流すもある也誰も知る利害なれと山家のものはまこと多故
に感ずるとみえたり

○十四日 快晴 巡見として出る白毫寺に參るこゝも例の佛のある計也
所謂高圓山にてもみち秋萩其外の古歌多し寺にあるは小野篁
か作りたる圓玉等數體みな古物なれ共仕かたのなきもの也

朽のこるみほとけ計ほこりに昔をかたるならのさと人

夫より春日山の奥へかゝり一の井口といふところにて小休いたすこゝに
は瀧坂といふところあり紅葉の名所なれ共秋おもはるゝはかり並の夏木
立也郡山の城下よくみゆるこゝより山坂に左は谷川にて左右より喬木
繁りあひ更に日かけみえぬくらひ也全の深山也肩輿も馬もきかねは歩行
せし也

これそこの常のはるとや岩つゝし春日の山に今盛也

なといひ行うちにはとゝきす鳴

わけのほるみちのつかれも一こゑに忘るはかりの山ほとゝきす

石切峠といふ所にいたるおもひの外のみかありてところは仙太郎村と

いふ也若苗植附て雨毛のところもみゆる也

みねの上のこの一さとは山人の昔ひらきしすみか成らむ

又もほとゝきすなく

奈良のさとに聲めつらしきほとゝきすあつまの人脱アルカあふこゝちする

仙太郎村にて

みのりつる麥刈あとに水かけてわかなへうゝるゆたか成あと

そこより山みち壹りはかりにして忍辱山圓成寺に至る珍敷奇麗にして且

古色あり堂社を檜皮と小板とませ葺たり僧俗の云小板計ふくと干きてわれ檜計

云と屋根の體愛すへき也靈寶は 聖武帝の納玉ひしみ佛これは大和の寺の
例言にありさし

はち都千古涙けあのをきをのれてか
可の年歌そてか夕都に其亂な可千
存古餘にとおるひはき今頓のし殘いを
事かのていつにはのはのなあ應いを
かた舊もふるつりへへ京けと仁は經

とりなりそこより供立をいたし肩輿にて七ツ時頃に歸りたりけふ石切嶺より股引半てんにて歩行せしか嶮岨のみちと此ほと庭より外歩行せぬ故に大につかれたり草臥しはともかくも第一に刀のあたる所に大福もちほとのはれ出來刀のすふり五百餘は毎朝するなれ共體を遣ふことの少き故かく女のことに成たり間宮林藏夏は多くはたしにて歩行也先生いかなればかくはし給ふそといひしに足のうら柔に成とこまることあるといひき今おへは尤成事也これよりは大刀をさして閑暇に馬場を駈歩行てならすへくとおもひも平山幸藏が大刀さすは體をきたゆるためもあると伊能一雲齋老のいはれ召れたる輿力に老人のありければ歸に馬賃のせむとおもひしに若くさ山よりは十町計の事故其こともなくやみたれはいかにやと歸るより近習遣し尋させおりふし菓子もありければ遣すとて其包かみにかくそ記し遣しけり羽田謙左衛門といふもの也

山ふみのつかれいかにとおもひやる慰草におくるはかりそ

忍辱山圓成寺に高麗の經文とりに行ときの船中小遣ひ帳あり文明の至あめつらしきもの也其外古文書之内に中坊法眼筒井順興なといふ名みえたり是以も彌中坊は衆徒なるへし○けふならのさとの人賑あたりを過ては鹿といふ更に居ら

すわか草山の麓の茶店の前に來り漸に群居たるをみたり

賑はへる里のあたりは打むれて山邊にはみぬ奈良の小男鹿

○十五日 曇 月並の禮受ること例のことし○五月四日出宅狀去る十三日に到來す 母上の御風邪も御快其外彌吉はしめ全快のよし目出度事にそ新右衛門より貳通聞に遣し候書面の答其外書付等來る○池の菱をみて乾の卦をおもひ出感ありて

うきもしつ淵の底にも身をかくすおりしり良の菱のふるまい
後藤一乗のかたへ彫物の價を問ひに遣せしに元來鍔の鐮ことは絶せぬ事故にもとより價なし別段の人歎或は鍔ならてとおもひしを實にまれに鐮ことにて一生涯の内に指を屈することなれば價は了簡程くれよといふ困りたること也其序に新右衛門か天保の詩の目貫をもいひ來る人物にては日の昇圖の目貫に不應候間靈芝とつるにすへしといひ來る間可然といひ遣すつもり也

○十六日 くもり又雨 鶯陵并鶯瀧のことを與力に問ひし左之書を貸したり 南都諸神社類集抄四此作者坊目拙解と同人に少偽の少き書也若艸山每歲正月元日ヨリ四五箇日之間以晴天焚山草視其煙氣東大寺年預坊舍出火消役人令守南北之山林也南都刺史細井因幡守安明命東大興福野田禰宜等雖尋問正月山ヲ燒課役傳來之被官更不知云々大凡近代元日二日三日之內燒之春日東大寺等參詣之徒放火於巖隨風而飛騰于山頂而已然哉否哉○里諺云於不燒當山枯草者出牛鬼爲妖故燒之矣是全無證乎然在牛墓巨石若艸山第三頂ニ仍有此妄談也○或書云藏埋犢牛於山頂則者永世其山岳不成城壘因之當山埋牛此謂也牛墓往昔引二月堂建立材木犢牛斃于東大寺其夜入寺僧夢告宿因故埋此山頂ニ云々○鶯瀧今謂芳山中溪川曰鶯瀧巖石疊巒落細流岩上ヨリ高丈許尤可愛乎也蓋西行上人所詠爲三笠山今此在所非春日山内ニ而隔遙餘山他峯謂古ニ不可有鶯瀧處分明也或人曰當初鶯瀧跡有於三笠山北谷水屋川上月日岩之邊是即上古氷室之旧址而落自瀧津瀨巖間其細

泉微音恰如ウツカヒスノスルカ春鳥飛鳴因以名鶯瀧矣西行法師詠歌云御蓋山春波音爾ハナニシラセ且知世氣利凍於扣ウツカヒ鶯乃瀧此歌鶯瀧權輿而不聞佗詠乎亦謂氷於扣者寄氷室旧跡矣然以爲幽溪樹下川流崩裂洪水竟損滅飛泉象今無旧址也近代好事輩呼芳山溪川細流稱鶯瀧耳呼鳴後人爲是是爲非非終得其良證乎矣○大和志卷第二陵墓云 平城坂上墓磐足媛命○在鶯山頂ニ仁德帝三十七年十一月葬皇后於那羅山枕草子所謂鶯陵即是○鶯陵碑石銘如左西正面 鶯陵有此二字碑陰銘 享保十八歲次癸丑九月良辰東大寺大勸進上人庸訓建 延喜式曰平城坂上墓 清少納言謂之鶯陵并河永誌○右近年新造立在若艸山第三頂丑寅

○大和志添上郡文苑曰若艸山鶯山鶯瀧附○夫木集曰宗尊親王今毛猶妻哉隱留春日埜之和香種山二鶯乃鳴又爲實雲居留谷之心母夕止且歸彌生乃鶯之山又西行法師御笠山春乎音爾而爲知介里氷雄扣久鶯乃瀧○並河五市郎永謂若艸山曰鶯山謂磐之媛命曰鶯媛謂其山陵曰鶯陵又延喜式曰平城坂上墓即此山陵也云々並河氏者當時鴻儒博才之英雄而爲客在勸化所龍松院庸

訓上人相共與東大寺旧史所考古跡舊廢地等也可有奚毫末誤謬耶然並永子者自遠來古都遊賓故未委南京舊址地理焉孔子曰不如農事老彭寔哉此磐野媛陵不有若草山頂自古傳云在於奈良坂村戌亥方面今稱辨才天山山陵之遺象尙今存而古老里俗謂仁德天皇之皇后山陵也復日本紀曰仁德天皇三十五年夏六月皇后磐之媛命薨於筒城宮三十七年冬十一月甲戌朔乙酉葬皇后於那羅山云々那羅山即今云奈良坂村之地明白而非春日若草山也亦延喜式曰平城坂上墓磐足媛命在大和國添上郡云々是同差云平城坂村上者所謂奈良坂山之山上而非今以東方云上土地之和語亦明矣復云磐之媛皇后稱爲姬本說不見國史實錄也嘗又未聞於當所里諺傳說乎適雖載枕雙紙爲陵枕草子者清少納言之私記而難引用陵墓所在舊稱之證焉就中爲陵古來枕草子註本等未知其在所何天皇之山陵矣謹案今度若草山頂新陵營構者奉遷那羅山舊陵於葛尾山嶺可謂勸請媛之媛命之靈神乎也謂此若草山於号累世之旧陵者不當論矣加之令感後代萬人之芽萌而殆蔑國史記錄動磐

之媛千歲鎮座靈魂破却於古陵舊蹟捨里人傳說正證而起立新營其罪不輕矣亦謂若草山曰鶯山未聞有斯別名也況哉鶯媛墓陵等別稱非莫疑焉雖然並河永老儒及龍松院庸訓上人俱秀才博識何有誤乎假令爲若草山枯艸山謂鶯山陵曰鼻山陵不有我采地不可爲吾守掌不求吹毛科寧不如閉口矣云々

○十七日 晴 例之通十一日より喫菜なれ共こゝは奉行の參詣は殊之外先に世話のかゝることによ數例先例をみたれとも平月の參詣の例無之平月は御見計ものたるへきよしは年中行事もしるしあれば當朝髪月代いたし着替候る宅に拜いたす○けふは郡山に狼煙を彼藩士かするよしの斷あり夕かたより夜に懸三十本計あけるよし也

○十八日 晴 けふも烽火ありみな郡山の藩士也けふは萩野流におおもしろしと之話也昨夜猿澤の池の邊興福寺表門前也池にて芝地高くよき所也芝の芽を鹿のはむ故に自然にしけりて全に毛氈の民藏良右衛門など參る江戸と狼煙のかはりもなし大に群集してみるなれ共江戸の如くかさつならず物靜にて玉やあといふへきときや

刑名奉行の明
け置なると書
自筆にて書
はいるかにも
古風なること
と歎いて可
然れは感心せ
しれは感心せ
也

ゑらひ／＼と譽るはかり也され共彼芝地にてけんを打遊興するものもあ
れ共構ものもなくいかにも穩成事のよし也彼手廻り中間となき故なる
へし○けふは所司代御仕置之こと伺ふ書面二十二冊差上る右之口書は
皆奉行之前にて與力之よむ也其方義盗いたし候始末可申立候なといふ文
體に而よほと可笑事あれ共仕來は少も不爲直吟味書も又同じ是は兼々皆々
様の御案事あ
る故に御安心
なためおとな
しくいたし居
候義を相認候
され共頃日入
組たるとて數
年にな
る出入之一席
にて濟たるか
三口ほどあり
たるによりて
珍敷氣にいふ
故に大に恐れ
てせぬ
様にすれ共
船癖はいとも
く口書よむ又
よほとめつら
し京談に而
玄已キヨウ
イ
かたき事也
と吳々おもふ
也
い、五兵衛町を五べてうないふ也夫等はいか様にてもよろしけれ共白狀して
吟味書の清書まで出來たるものを進達の前日に牢屋敷にて石を爲抱改而嚴
敷責問する也夫は口書之通彌以無相違哉又外に惡事もあらは申立よとのこ
と也其檢使に用人の行といふに大に驚て仕來は決而直さぬ積故牢屋敷にお
ゐて責問之道具を出しそこ囚人を出し少も痛めず牢問之式計にて古格之
通尋問脱カへしといひたり尤夫も仕來を直すにはあらず人の難義すること故に

わか奉行中の頼也といひ聞かせてすみたり其内に死に及ふことをいくら
も白狀せしも多ある也夫を疑ふはいかにそや又責問ほとものならは吟
味書清書までにはせぬかよき也され共左様にはいはす前のことくにいひ
聞せたり全ましなひとか御祝義とかいふ位に石を爲抱或は皮肉の破るゝ
までに打とはけしからぬ也かゝる風故に近頃までも水責をいたし或は釜
うての釜のこり居なるへし上方の人は辭柔におとなしくみゆれとも關東の手荒に
おとしなきとこの酷なる也合吟味書の奇妙なる或は口書など御代官所よりも
また珍敷半昏帳面にする類のこといと多けれと夫にて三百年近く治りた
れは少も構はねとも御仕置の驚こと多きは人の難義すること故に捨置か
れもせぬ故に是には心をいたく勞すること也○泉水のふちによきとしふ
りたるつゝし關東にていふ十三株計あり至るよろし泉水に金魚の夥うかみ
たるかことくみゆる也十五日の夕にやそれをみなから庭の芝生を歩行せ
しに下女か奥さまへ百人首の月か出ましたあれ御覽候へといふもおかし

こは三笠山の松の村立たると、實に月の夕の庭のけしきなどには母上又は兄弟打よりみたしとおもひ出さぬこともなき也

○十九日 晴 奈良の西のかた壹里半はかりなるあたりは巡見として参る不退寺村の不退寺は在原業平の開基にて彼朝臣自筆の畫像等あり佛はみなよくみゆれ共經文も前の畫像も千年餘のものとはみえず阿保親王の御像は至るよき也夫を法花寺に参るこゝは昔の奈良の京の時の御所也といふ尼寺也多葉紛盆の給仕する其體戲場の道成寺の所化の如して茶海龍寺は行こゝは聖武帝の宸翰の海龍王經を納給ひてその書目を寺號とはなされし也前の法華寺は大成礎のあと所々にみえていにしへおもひやらる

夏くさにこもりかねたる礎を昔をしのふしるし也ける

けふのみちには 元明帝陵四十三代の帝うはなへ山といふ 元正帝陵四十四代小 平城帝陵ひしやけ山といふ 神功皇后陵御陵山といふ 成務帝陵十三代石塚 稱徳帝陵四十八代五 安康帝陵廿一代兵 垂仁帝陵十一代寶 以上の御陵みな松

林と成居る山裾に三十間餘ばかりの堀ありいつれもみな同しあせしもあれ共なり堀也 勅使等あるとも聞えず只夏くさのうちにある也御陵にけしきよき所は遊山所にみちにいづらも小高き山かたちありて松林なとに成たる除地めきたる所ある也陵にはあらさめともかならず貴き人の墓所なるへし御陵も御池の脇を通りながら船もあられば肩輿の内を畏くもみ奉る計也代々の奉行かくの如く也

行かよふ小みちもあらて夏くさをはらひもあへす袖ぬらすかな
いや高き松をむかしのしるしにて四方はあら田にうちかへしけり

なと歎息なからにのみたり名もなき墓めきたる所の多かるを
誰もみな千とせの後にはかくならしはかなきものはうきよなりけり

かくもなるものとおもへは名をのこす昔の人そうらやまれける

秋篠寺は行こゝも例の通よき佛像多し境内に御泉水殿ありうちは井戸にて當寺の本堂といふものは光仁桓武の頃の講堂を用ひしものにて土は天竺と唐土の靈地より御取寄ありし故に年々其こ土井戸の水は禁裏に奉る故に當時禁裏より御香水殿は御修復あるといふよほど大破也
に雷の臍といふもの什物にありさしわたし壹寸はかりにて白毛生たる魚の臍といふものに似たるもの也傳來を問ひしにこゝの大元帥明王の尊像は至て靈驗いちしるしよつて蒙古來寇の時も御いのり

此文章と
文字に可
認たり

○此尾古
しは銘新
しきは銘

出りたる
其文にり
此堂元亨

三御堂元
簡月春三
上同六月

西方尾作
王替尾作
也三郎大

右を以み
は頼朝よ
後尾の復

も尾の復
共の尾の
也の尾の

に鶏尾の
也の尾の
共の尾の

寧府紀事 (弘化三年五月)

尺餘にて黄金なるを以て造りて頼朝の納られしといふ實に手をつくしたるものにて桂昌院様其外禁中等よりさまの錦等をもて舍利塔の中央をつみありこには鑑真大師の書を納むる等も都也此寺の像は唐の軍法力大唐思作なと書出すか實に良工を唐よりつれ來りたるへし按ずるに唐土の人の僞多ことなれは舍利といふもの地に多かるへけり御歸依の寺々にあらぬはなき也則天が懷義を白馬寺の住持にせし類のことさく舍利の多かるへきいはいはれなく又憲宗梁武等の佛舍利佛骨の骨不殘玉を以て作りたりとかへわたすへきも唐招提寺より藥師寺に參ることゝは天武天皇の御建立にて別當は祚蓮其後は行基菩薩なり宗旨は法相三輪華嚴律俱舍真言六宗の本山にあり東大寺等同列の寺也といふ也金堂は天武帝の白鳳九年に御造立ありしか享祿の兵壇此佛壇の白鳩石に似たるも薬師日光月光は今以て存せり金銅佛といふよしなり何かはしらす只今鑄たることく眞黒にてつや／＼してさひもなし可驚もの也寺僧は赤銅にてす慶長金の如きにて摺れたる所こにいふ則そこはこれに合せたり所をみせしは純金のいさたりが青さひ唐の浮居れ共此類の佛計は黒漆の赤銅なるも是又知るへからざる也大佛をいふはと金の至るもよきやき附の火にやかれ剥落候か所々のこれる也四分一赤銅を合すること或は手丈夫にやき附たるもの故にすれは殘居る所は光を發する也佛中央丈六尺左右二體は交へたりも小なれ共その三體をのする蓋坐なれば五間も其餘もあるへき敷焼たれ共南

なといふ
は尾の假
名は尾の

は尾の假
は尾の假
は尾の假

は尾の假
は尾の假
は尾の假

は尾の假
は尾の假
は尾の假

坐の廉焼われたるといふかこゝに四方へさまのものを鑄あり其絶妙いふへからす其内壺のさひを費せしむる也是は悉いへしは才力あるものなりとみえ所々に今の刀劍の装具の上からぬ入費せしむる也佛の黄金ありと百濟より獻なりといふ影のことにしたるも六七尺計の工なると東院堂に七尺の佛の黄金ありと百濟より獻なりといふ影のことにしたるも六七尺計の也佛の字鑄附てありその碑文は和歌廿一首萬葉かなまな字にて硯石のこととき六七尺計の取へ光明皇后はしめ御筆を影し也この石も碑も亂世にうせて碑は石はしに成居たるを昔譯にてこゝにあるか其傳へは知らずと僧のかたりき什物いつれもよくみゆる也其内魚養か書の大般若六百卷揃ひあり成唯識論は後差後深草龜山法皇大宮女院のうちよりてか眉長くひけ並髪をすりたる内と至る青くして如生背像あり唐人の筆にて贊道風なるよして也千載のものなれ共彩色もかはらず且す、びす尤絹はこと／＼に破れたるを補ひあり道風か贊は所々切れてよめぬ也甘水盤臺の如きものへうちのほりの鎗立のこときものを臺へ附たりおもしろき圖也わればしめは必支助僧正か道鏡なるへしとおもひくに支柴三蔵勸進抄にて三蔵か梵字を漢譯せし時の筆者にて法相宗の祖也といふ珍敷もの也高僧貴僧みな托鉢せし也還城樂面黒筒三の鼓の筒也以上のは三品は十訓抄に是は奈良の寶物也と寺院あるよしなれ共樂面はとくに引替に成て今のは寶物なるへしは奈良の寶物也と寺院の巡見果て芝辻町にある小屋下園見置として參るけしからす立派なる事也會所といふは四疊の玄關附吟味所とて長吏共か吟味所もあり其外奉行

寧府紀事 (弘化三年五月)

所々預け之もの入置候場所三ヶ所長吏か方々四ヶ所ありき捕もの、稽古にてもする歟直心流か今の一刀流などにて遣ふしなひ一本ありき奉行の來るまちて所々香をたきて臭氣を去りたるとみえ沈のかをりするなとさても行届たる事共也穢多々類に權のあること關東に聞かねとも上方はいつ方にてても如斯事と聞ゆる也○郡山領に二名村といふ所ありそこに公家茶屋といふ看板出しありよつて尋みしにいにしへ公家の屋敷なる故にかくいふよしいふよからぬ茶店也

豆男昔すみしか通圓のうちの香をりもあらぬこけ茶屋

○廿日 晴 きのふの夕かたよりよほと暑に成今日はかたひらにてよろし八十四度に至る

○廿一日 晴 八十六度に至る

○廿二日 晴 市三郎いふ奈良の昔神功皇后の御世にわれは生れたしと夫は三韓征伐の御供したきたためとてかいひしにいやとよ其頃は日本に書

今朝一乘院
御家來より
御殿より
御文と
けの御供
庭の御具
の始末
相分り
にたはし
さると
一は
頃同
ほは
評別
りた
と々

籍と字となかりしと聞はわれらこときは樂しとくらすへしと近頃の奇説一同絶倒

○廿三日 雨夕晴 奈良に参りめつらしく天氣つゝきたりめつらしと申せはおさとかげろく六十三日發らす大珍事也この頃八百屋不参よつて町の遣しに青物のきれめ也といふ田舎に亦是も珍事也

○廿四 晴 けふは在原寺其外添上郡山邊郡のわたり凡四里はかりの所に参る拂曉出宅いたす奈良を離るれば植村出羽守御領所藤堂和泉守領分等也檜村といふ所のみち邊歌塚いふあり是人丸の塚也とて享保の頃に碑を建たりに初瀬へ参るみち也とあり成程初瀬道なりそより二三町にて柿本寺也至るよからぬ寺にて波切不動の荒たるかことく寶物也とて御本丸大奥二十二女といふ書入のあるいかにもきたなき押書の額を出す類也人丸の像には雨もり也夫在原寺に参る業平之開基鼠のいはりにて且髪のあたりは鼠くひたり僧又至愚也夫在原寺に参る業平之開基像等可疑もの計也以上の寺々の體をみて檜も葉末のうらわひしきこと也なといひつゝ桃尾山龍福寺に行り大門あり御朱印百石にて急なる山坂十二町計のほ生の精好の衣に紫のさし貫つま紅の中啓に水晶を念珠を手にかけて出たり年のころ廿五六にて美僧といふにはあらねといかにも氣高くして甚謙遜也とり廻し等のころなくち

碗とはつかしくおもひたりこゝにて供人の焼飯を出し奉行は白木の臺へ白焼の茶漬茶
 はこゝろをつくしあり此寺法相宗にて足利家の頃は千石の御朱印なりしか松永が爲に
 亡され大衆悉く殺されて寺跡破壊おひしな東照宮の御朱印百石と境内を賜ひ今に
 學侶四ヶ院行人十二ヶ坊あり此寺の下りに音に聞へしふるの瀧あり夫迄住持案内也瀧
 の所はかりは二間餘に長五間餘もあるへし口に音に聞へしふるの瀧あり夫迄住持案内也瀧
 りは白虹たちこの寺に更に什物なしと僧の断ければかゝるあらたなる瀧あ
 實によき瀧也

れは外にみるものあらてもよしといひきふるの瀧のこと古今夫より彼いそ
 のかみふるのなかみちなかゝるといひしふるの社にいたる丸の太刀あり
 田村鷹の鐘頭成三枚の冑にからすれ當に二百年はかりのものも給し鐘といふに下坂の銘あり
 は昔の奉納物足利家の冑よけれとも嗣はなしとくに賣たる神主ふるの神 夫々内山
 社にはあらてぶるの神社かぶるゝしつてもものいひ一向に不分なること共也

永久寺の参るこゝは 御朱印九百七拾石餘にて坊舎四十七坊外に無知行
 八坊あり頼朝の建立のまゝ焼けす至るよき寺也 什物は例の佛計也只襖に土佐
 食ふといふ境内の池にばくとないふ魚影居る虫等を食只くさをこゝにて中食いたす
 たりよほとの福地也とみえ寺至るよきれい也

○廿五日 晴 兩三日已來よほとあつし博奕を他領の行て打たる故に領主の

多人數女共
 出居るに
 見苦しきは
 少し甘人の
 十人

沙汰ありて村方の爲立入申間敷と申渡有之候を難心得様に亦奈良之穢多
 出訴いたし今日御仕置に成こゝにては博奕をゆりかぜの事おもひやるへし目安
 敵に成候ものも大和一國拂に成候ものもあり大和一國拂と認候大成名札のこと
 ものを與方よりわたすと直に繩をとく也江戶にては同心小頭といふもの其書付を科人之前
 の持参り大和國は立入られぬ事此書付を大切にもち居候得と申候得は科人はいゝと
 いひていたふ良右衛門中する也さて又敵百敵きてもはれもせず勿論皮の破るゝもの壹人もあ
 らすといふ遠國の御仕置の江戶におもひくを學問より頼たしといふ位のこと也と昔歐陽公と
 覺たり遠國の御仕置の江戶におもひくを學問より頼たしといふ位のこと也と昔歐陽公と
 しか實に遠國の御仕置の江戶におもひくを學問より頼たしといふ位のこと也と昔歐陽公と
 敵と自命せしもの御祈禱同前に一度つゝ石をたかせて責むるなどの酷成其外人を殺候
 亦も助命さへ願候得はさつと助命の立體也被殺候ものも御仕置を受も互に知らずして事
 濟故に法か立たるもの無慈悲のことありに御仕置を受も御事不執行さる也歎息の至り也遠
 國にきておもふに遠國に生れて一旦江戶の出で二年も居て其味ひを辨へると十人か七八
 人迄か親屬を捨ておもひなはよく知りたる上は身をも忘れて必聖人の教に従ふへけれとも知
 らぬ噂はなし故に初もりかぬる ○頃日奈良を歩行みるに百姓家の牛を牽女に
 也されは知るそ行の初もりかぬる ○頃日奈良を歩行みるに百姓家の牛を牽女に
 ても笄又は簪等さし居也笄はあらずとも髪さしを二本つゝもさゝぬはい
 とまれ也髪いふにかたき油一本ツゝもいるといふされ共かた油にてこて

の科斗の書
すむ朝にひら
なへきもひら
考へるときは
あることいふ
はまこととい
實に科斗の書
書に代るもの
崩は器なるに
この器なるも
あらしめざる
よめしむるも
實は事なり
なはしむるも
の器なるも
とに分るも
むも金に
も實に無
の銅器は
古の美事
色の美事
る寺の條
西大寺の條
に奈良に
は奈良に
てれし

然否是必作器人名或曰斯器則爲鹵則爲彝不知孰是曰博古圖所載鹵器皆有
提梁而彝彝則否爾雅云彝鹵彝器也注曰皆盛酒尊彝其總名然則鹵之異于彝
彝者其以有提梁而謂之彝者蓋其通名爾雅又云鹵中尊也孫炎曰彝爲上尊彝
爲下尊郭云不大不小在彝彝之間由是三器本同物但有大小之差耳而鹵與彝
則可通謂彝而獨彝則不可謂鹵因知斯器之可定爲鹵矣雖然爲彼三代古器
誰人有真鑑而諸家所圖錄歷々可據則定爲商周之器奚疑嗟乎星霜三千之久
流傳存於今真可謂奇寶矣況又古人造器之精緻風習之淳厚可由是以想見乎
天保癸巳春二月書于平安僑居古松磯何處 掛川 海野公豫

○廿七日 晴風 きのふ家來共かさほ川の螢とり得てくれたり旅のこと
なれば入へきかたまもあらねは庭の泉水のほとりへ放ちたり日くれにい
たりて飛かふさまいとくめてたしなかくはな火の可及ことにあらず
女ともまてもうちよりて興することこそ

○廿八日 雨午後より晴 八十四度前後時候相應也

右にたるに如
し可也雷か
文は愛もに
な此は誰の
そ此は誰の
實に三代の
器なり事也

○廿九日 くもり けふ關所物ありうちに國宗三代ニすかれて芒子なき
か如くの刀に廣正の脇差壹尺四寸餘あり正真なれ共定而下直なるへしとお
もひ居たりこの法に與力同心并奈良の町人共にいれ札をする故いか
ゝやおもひしに至る手丈夫也右の大小三百四是にては爲はあ關所物
の拂直段別段高直なりとて驚也彖藏いふ不用之ものあらは關所之入札た
のみたしけしからぬ事と也箒木に桶又ははし子に行燈なとをかつきつれ
て奉行所之門を出る體忠臣くら夜うちの廻り燈籠のことしといふ○けふ
庭に入りこみなどとするものか宅にあれとも困る故に庭に植たしとて菊
二十株計持來れり金百疋遣す菊にて江戸をおもひ出ければ
菊のはなにこそを忍ひて旅衣秋や來るらむ袖のつゆけさ

○晦日 昨夜よりけふへかけていかに蒸暑なりしか午刻より雷雨格別
のこともあらず○出入の油屋より花桶へいれて夏きくと百合のはなをく
れたり花桶至る手奇麗にてよほとふるしこのものはかるきものもかく

風流を好むとみえたり武もなく文もなくよくたのしむことはすきなる風俗也われ等かことをさそうらはらにおもふへしとはおもひて心を勞する也
こきませしはると秋とのほなのいろをみるもめつらしさゆり撫子

○よる五ツ前後にふくろうに似たる聲築山の後松等ある芝間にてする也よくきけはてんといふものなりといふ書院の天井にすむよし也おもふに此ほと尾を接ゆるとみえたりふくろうの聲にてもよからぬに珍らしきてんなりといふ聲にもまた甚敷かしましくよからぬもの也女共なとよほと恐るゝ體也狸狐など居るといふかいたまたみすてんはこの頃御さとか築山の螢みるとて行しに馬見所のやねより轉ひ落走りて例の聲を發せしよし大サ猫ほとにて尾長くみえしと也例の通故咄にせさりし也○日のくるゝ頃にてんの出で庭に遊ぶ大サ猫よりも小さく先ついたちの類にていたちは專鼠の類なれ共てんはあしいたちよりは長く獸の體にて色いろいたちを黒くのととの邊白毛也子二疋をつれて虫をとりやる體也泉水の小はしを

てんの子よ
く木のほ
り又よく
いる遊ふ
いたちよ
大やうな
體也

わたり忽にとかけの如きものをとりに來り子にあたへたりなつけみむとて飯をやりしか食はす女とも大におそれたり

閏五月朔日 今日生駒山邊巡見のつもり也けるに七頃より雨頻なればいかゝかと起出て飯たうへ羽織袴になりたる計にて彼是するうちに雨やみ夜はほからゝに明行たり與力共いふ梅雨中なれば聊の雨はあるへけれともさしての事はあらし御出候への事也よつて六半時過より出立て一里はかり行て横領村興福院村を經尼ヶ辻といふ所にて小休いたすこゝはならより大坂等々行順路なればこゝの本陣には松平大隅守の泊札などありて至而よきすまゐ也玄關上段の間はさら茶室までもありき大隅守か泊によりて郡山の城主より普請してくるゝにより大隅守は奈良へは泊らすしてこゝに泊といふ也夫々又二里ほと行て室木峠にて小休いたす五月雨おもひの外に晴てこゝちも又はれゝし

風さそふ嶺の半の村雲は麓のさとのけふりなるらし
ふもとより五月雨雲のはれ初てところくくにみゆる山さと
此邊より山さとに成也

やゝたかく棚田の末を見わたして山さと近くなるそしらるゝ
今もなを昔のみやひのこるらむ髪とりあけぬ賤の女もなし
夫が二十町はかりにて竹林寺の行行基菩薩の開基にて本堂の下は行基菩薩の廟所なり例の軍法力等のよき木佛其外佛舍利中將ひめの法華經等奈良御定りの什物也こゝの田にて頻に蟋蟀の鳴也秋のくれのことしいかにといふにこうろきに相違なしといふ

うき旅にあきしとはすはきりくすいかに五月のけふになくへき
夫が往馬いこの神社に参る延喜式にもよほと石段をのほり行也烏帽子に布衣着たる神人の鳥居の外に出迎たり先い立てあなひする故にこゝにいつき奉る御神はなにそと問ふに弘法大師也といふ弘法大師は日のもとの神

に而本地佛といふものを附て神々を佛の權に現せしとまてにはいはるゝとも其身を神とはいはしとおもひしかはいや何空海を神にまつれるにやあら不思議そはめつらかなることの空海か弘法か夫を神にまつりしはいか成ことよといひしに其餘のことはしらすと答て足早に案内するうちに又石段をのほりたればそこに神主別當等新筵を敷て平伏し居たり神主か眉のあたりまでかくるゝまての烏帽子脱カにかり衣を着てしやくと中啓とふたつなからもち出しもおかし鍋とり公家鍋かふり日審ひなといふことはきゝしか鍋かふり神主ともいふへき忍ほうし不思議也いつき奉る神はといひしに仲哀應神の帝に神功皇后をまつり奉り末社を合せて五社也といふか成なる御やしろなれ共靈寶等はなし本地佛は十一面觀音也とて別當の案内しきさしてのものもあらずこの頃のふるの神社もこゝの體も神主はみな猿るか装束せしかことく成もの共はかり也神道の衰るはつ也それは子孫相續する故か將又子孫相續する故に法師にまたもおしかたれすしてあるか

いかにそこより菜畑村の大庄屋か宅に小休いたすこゝは松平次郎か知行にて陣屋等あり小城のことし大庄屋また立派にて茶室又は上段の間等ありこゝより山村にてみちあしく般若窟寶山寺までは十四丁はかりなれは馬其外のはこゝにとめて般若窟寶山寺に登る至る嶮岨なるところに至て十丁は石をならへたる坂みち也中ふくに松平甲斐守か代官後にかこを置鍵箱にて平服いたし居る夫々大門の入口に神社役といふもの平服いたし居る上と同じさま也いづれも輿中より挨拶いたす甲斐守其外の代官郡方のもの共等か路傍に平服するもの十ヶ所よりも多しみな供頭か駈行て名札を取披露する也この寺至る立派にて真言の律也法師共五六人大門に出迎いたす夫々石段壹丁はかりを行て本堂の前に住持出迎たりくらきに飯たうへしまゝなれば従者もわれもいとうへたりよつて先晝餉する玄關よりみなみすをかけ高麗へりにて立派なり本堂行者屋又は浴室等あり浴室は常に湯ありて往來のものにも浴さする也家來共よろこひて浴

する也こゝは奈良より大坂へ行くらかり越のみちなれば人多詣する所也膳部等立派也これみな先格にてする事也干菓子蒸菓子等を出すねり羊羹とらやのまん頭等也のしのかはりに昆布を出す故に戯に

ふるくさいひろめ昆布はやめて饅頭の味よふかんをおれはやるへい

近習等か居るところはわか次の又次なるに人の往來しけしとてみすを垂て食事をしなから咄を聞いていろくのめにも逢ふものかなみすをたれて其内にてめし食ふはけふかはしめ也なとゝいふ故に又いたつらを

たまたれのうちてたれたる屁玉にもほひこされてたまるものかはなといひて従者にみせ打笑ふうちにみなくめしを給す涼みもせしければさらは境内見めぐらむといひてこの境内には國祖庵雲上閣五輪塔などいふものゝある所は高サ三町餘の岩石を切開きみちを附たる所なればとても羽織袴にては行かれぬ故にこゝを股引半てんに成所々見廻る例の佛舍利等のよきも多し天子より賜りし不動の劔等什物も多あり雲上閣まで

行しにこれより上五輪のある所までは殊に難所にて誰も行かすといふ何程あるといひしに一町はかりもあるへしいと脱カふ故にさらは登らむといひしに役僧かいふよほと難義なる所なる故にこゝろして御登りあれといひて律宗の大成袈裟をかけ水晶の念珠と中啓を持たずからやすくと登る故おとらしと登りしか誰も歩行はならず岩ほをはひ木にすかりて上りし也五輪といふは空海か立し日本三ツの塔也といふ石にてつくりし五輪の塔也そこを下りけるにみな青くなりたり絶頂に穴ありて歡喜天口ニ供物を納むる所也この岩山を開きて所々にいろくノ銅佛等を安置せしこと別番の圖のことくにてよほとノ事也こゝの大門を出て草鞋に成て生駒山の絶頂に上る至りけはしき石坂也みなくくたひれて漸にのほるも半はにして下るもあり辛して絶頂に行みしによき芝原にて石の五輪を立たり河内攝津播磨和泉山城大和伊賀淡路阿波紀伊近江小豆嶋駿河は富士山はこれなりてみえずよほとノ晴攝津の海より淡路嶋等みえあのきれめは紀州也こ

の突出せしは小豆嶋也少しく灣のかたちあるは兵庫也須磨明石也など人々いふ故に望遠鏡をもてみるに大坂の市中等手にとるか如く天保山は芝もてつくる笠のことくにて住よしのはまの船のかゝりたるなどありありとみへテ奈良のかた若くさ山はかふる成兒のはつかに月代のあとあることく奈良の市中はところくノに白壁みえてわか松にはつかに雪のかゝれるに似たり木津川宇治川糸の如くあらはれ伏見の大池などはつか成鏡の如くにみえたりあれは須磨よ明石よといへはあら翹ほしあからさまにみてこんとおもふかことくあれか大坂の市中よとて大和川等よくみゆれば定而水野若狭永井能登かすみけるあたりもみゆるなるへしたれか大成聲の者やある足利又太郎とかいひし人の聲は十里に聞へたりと其三分か一にてもよし誰ぞ聲立よといへは又あの海には鮮けき魚の多からめ魚あるかたよりくるかせかとおもへはなつかしとて口ひらきて向ひ女の嶋にて南風に向ふとかいふことくなるさまして戯むるゝもあり又は雲雀こゝ

にても雲井になく也みよ今なきしほとゝきすあれ今あの麓のみねのかたへ行そあれかしこにて又もなくなといふ也けふはけしからぬあつさにて汗を拭ひもあへさりしにさむき覺ゆるはかりなればみな歸り路をわすれたるさまなればやよあのみえわかきまてにはるか成奈良は歸るなればはや立もとらむとて供人に拍子木うたせて人集めて又もとのみちにかへり二里はかりして靈山寺の行こゝは天竺より歸化の僧婆羅門僧正か廟所にていにしへは定而大成ものなるへけれとも今はよほと衰て寶物も婆羅門僧正か天竺よりもち來りたる舍利或は鎌倉殿の御教書などいふ位のこと也こゝにても古格にて湯漬を出す也 御朱印百石境内東西七町といへは僧俗も送迎するもの七八人もありきはや七ツ下りになりたれば急きて歸路に趣き一たひ小休して奈良の入口より肩輿にのり道行ふりの燈かゝけさせて急きぬ奈良は奉行の歸りよるになれば家々にて挑灯出すべきよしかねて觸ある故におもひ／＼のことにて町々のよきとあしきにて燈の

ひかりも違ふ也丸行燈を出す家も一軒みえし又祭の燈籠のこときもかはや行みちにかけてあるへきも魂祭するころ軒端にかくるさまなともありき子供はみな出て歸りをみる體いとにきやか也宿は歸りしにけふはさとか兼る患ひし病のあとあらず復本せしよろこひとて従者にははつか成ものなとらせ御兩親は酒奉りて合膳を並へたりといふところの歸りしかいとつかれて常のことくにはものも給られすやう／＼にけふのさまいふ程のことにてそありける○けふ寶山寺に寶山比丘の肖像あり新しきものなるをいか成ればかくは大切にするといひしにこは中興の祖湛海が像にて實名湛海假名寶山也夫を以寺號ともする也この人昔この山を役小角か開きしといふのみにてかの空海か五輪而已存せしを一寺にとり立てかくは寺にせし也元祿の頃に没していまた百五十年忌にはならずといふわれは例の 聖武帝の御建立かとおもひ居し故に寶山は千年以上の人なるへしとおもひし故に其ことを聞いていたく感心しければ肖像をみしに耳

大に眼つふらにて不凡なる法師也八十九歳にて死せし也といふ也され共古佛等古より奈良にある寺々よりも多し又舍利等いかにしてかくは集めしといひしにみな湛海か力を以所々の靈地なるみほとけ等を乞ひ求め舍利などは高野或は七大寺のもの等か徳を慕ひて寺を開きし時にわかちける也といふ也あな尊きことかな佛法澆季にいたりても人あれば物ありてかゝる大事業のなる也士ならば萬石に祿し儒ならば徂來白石等の流亞なるへし壽もあり力もありて末代々名をのこすなるへしとおもひてうらやましくおもひければ湛海か墓所の寶山寺にありければ拜し來りし也身を異端に沈めしもかくの如く大道を知り弘毅の任を事とする士つとむべきことそかし

○二日 快晴 今日花落着もの十六口ほとありみな入墨重敲くらひのもの也十七歳にて運よくいろくくと死を通ればや三度御仕置受るものありいかなることによ生質は變すへからさる事歎一體無宿又は非人等關東の

博徒は可惜もの多上かたの盜賊は死するといふことはしりなから網のかゝるまで先甘美輕暖の事によを過すか百年生て乞人たらむより盜人と成てわかくして被殺かましといふかこときもの共に亦入墨後の盜など少しもおしつゝますみないふ也死をみる如歸に人とは思義也

○三日 晴 兩三日已來暑甚しけふは八十九度に成朝は風あれ共夕かた方は風更になくひるにまさりて蒸暑甚し下女なとみな少々宛煩ふ也○おさとのけろく七十日目也

○四日 晴 生駒山へ登りたるつかれいまた治せずなといふ也われよつておもふははしめ生駒山へ行時に奉行例の巡見所なれといまた不行とて願ふて供せし同心もあり供なりとてよろこぶもあり又このまぬもあり扱みねにのほるによりてはしめより足痛を以辭して麓なる寶山寺へとまゝるもあり又われは日々二十里のみちを行ぬ京攝へ常に日歸りするなといひしか嶺の半迄行てあつさに不堪下りしもあり夫より先迄行て行なや

みてその松かけにやすらひてまちしもありぬ實にたれもく七八里迄登りける時は暑は甚し江戸の人ならの人もに嶮岨にはなれぬものから壁をつたひのほるかこときみちには行なやみて多くはかへらまくおもひし也しはしやすらひて嶺のかた打見やれは麓近き里の女か浪華へや行らむ日かささしかさして遙にやすらひてはすゝみやすらひては又登るをみて憤然として女もあれかくの如しもゝ引半てんの男子かいかにそやとて進み行はや絶頂近くなれはみちもあしからす平なれは漸に登り得たり登りみれば最高峰をきはむるもいとやすくてそこにいたりみれば千里一目のうちにありて涼風秋の如く手拭絞りし汗もいつちか行て脱たる羽織尋ぬるほとに成てこゝろはれくとしてこのみてのほりしも無餘義上りしもこゝろあるもなきもみなうきを忘れていつ迄もこゝろに居らむとおもひし體也その時半を過るまで來て人の降歸るをまつものなどを麓路にみるもこゝろくるしきほと也けりその時にいたりては半過にてとゝまり又は

麓へ下りしははしめよりのほらさるより事ケ間敷ておとりたるかことく扱可惜こと也けふ是等の體學問上にいと多かることなるへし書に山をつくる九仞功一篋をかくとみへしもかゝることのいましめにやあるらむ彌吉なとくれく機杼を斷の歎あらしむへからさることを欲する也是はいふまでもなく彌吉への警のみならず自戒むることによつてきのふより一際出精するこゝろに成りし故にこゝろに記しぬ○暑九十度にあ夕かたより更に風なくひるよりつらし

○五日 くもり又晴 朝よりよるまで暑し四時汗手拭持通し也こゝの者は婦人もみなはたか成といふ家來共下女三人留守中は裸をゆるし吳候へと妻の申出候由そめ咄也婦人はたかの體名所圖繪にもみえたり

○六日 朝雨忽晴 暑堪かぬるか如し○白洲に出でてんの遊び居たるを同心の若もの共か一疋打殺したりよつてよくみるに面は狸に似たり尾は八九寸もあるへし頸の下三四寸はかり白し全體黒きことよき青馬の如し

是は定而子なるへし大サ中猫くらひ也いたちの古たるにはあらず一種のもの也山にもてんといふもの住て木曾の柚の頭引しきといふものにする也てんの字はいかに貂か貂ならむにはけふ得たるは黒貂なるへし黒貂めつらしきものよし也可惜夏の皮なれば剝ことのならぬ也○けふ一乘院御門主の御用ありて御直談との事にて八ッ過を參殿○けふこの町人の歌よむもの俊藏か兼而たにさくたのみ置しに大成萩の葉を添て

奉る老か心のみゆるまですしくそよけ萩の上風

とよみたり手もよろしこゝにての風雅人のよし也正三位有功卿の弟子なりといふかゝることにはことの成ならぬに不拘土地に風雅なること多也○河上突抜丁の紺屋の隠居にて名は孝美といふよし也この叟一とせ京へ行て正三位有功かかたへ行さくらに短尺を添て押而弟子たらむことを乞て其以來出入するよし也此有功といふ人江戸にても聞たる人にも過日も

孝美は川ノ
上町鍵屋長
六といふも
の也

都筑金三郎かくれしかけ物に山越といふ題に

人のうへもたゝかゝれとかあさもよし紀路に並立いとせの山

といふ歌に而はよほとこのよみ人なるへけれとも京にては堂上の用ひよからぬよし也壽永已來うたの風衰たるを歎きて古き體をよみ堂上にて絶てあらぬ唐昏へよみ歌をかゝせらるなといふことのあれは堂上方にて不氣受のよし也三年の喪は三代聖王の教也といふはたれも知事也され共膝文公か復古の論ありし時宗國の魯の先君も行はぬ事也とて家來か難せしこともあるそかし

○七日 くもり 昨日一乘院に參る先格にて御物語などあり御懇成御事也廣き金はり附の御坐敷疊のいろや、紫に似よりしに雨もりの雲をあらはし檜わた葺の御屋根破れてしはしの漏を補ひたるあとみゆるなと恐入たる體也 宮は當 禁の御養御兄にて當時 御連枝の御長者にてわたらせられ 先帝の頃仁和寺宮などのことく關白殿よりこと／＼に御相談も

あるよし也御としは二十二とかに被爲成と之御事なり格別の美僧と申奉るにはあらねとよき御容貌にて御英明殊にすぐれさせ給ひ唯々恐入たる事而已なりき諒闇中にておはしますとてにいろいろの御さし貫香色の格衣といふかこときものを被召たり御家來共々夫々かしこの障子をはつし候へこゝの屏風はあらずともよからむ少も風來らむ様にせよ予か奈良にきし時は鹿のなく音に驚きていかなる山さとかと京戀しきことにそありける江戸はことに廣くこと足ところと聞く也さそや旅寢のうきことならめたと御意あるさまなか／＼雲上にのみおはします御かたとはみえす驚入たること也關東の大名などは立派なる利口の聞へある寺社奉行などの振舞とも可奉申上御様子也只不思議なるは殊に御髪剃らせらることを嫌はせ給ひよほと御晴ならては御さかやきは遊はせぬよしけふも五分さかやきといふよりもまさりたる御長髪也與力共兼りけふは定而宮の御さかやきあるへしかいかになといひて笑ひしかかゝる御發明に引くらへ

亦は不思議なる御事也

○七日八誤か晴 八十五度の暑也○けふは献上之呈書等を調ふるとて與力同

心共かうちよる故に晝食を出す也尤さしての事にはあらず御隱宅にて料理の御世話あり與力其外共下女大に騒きていたす也與力同心共にて十五人の人數也○この頃しなひ竹の折たれと奈良中に竹刀なし郡山迄行といふ位のこと也勿論からかさやにてもしなひ竹には切ておかすといふ也寶藏院の槍をいまたみす定而けしからすおもふことのあるへき也土地は散樂茶の湯の外は稽古するものなし歌よみもはつか成り學者は奈良中に唐本をよむもの三人はかりあるへしや無覺束儒者といふものゝ學問一向に而文章等何かよめぬ句法などあれ共夫に而天下無雙のことくおもひ居也一度廣瀬謙吉か來りしことのありけるか夫には大に儒者か恐れ居る也參れは逢てはなしをしてみるに奇説もなし只詩を孔夫子の削たまひて三百篇に成たるといふはいかゝあるへき孔夫子の御謙遜にあらせらるれば自

ら御削遊されたら詩三百一言とは仰らるましといひき雅頌各其所を得たりと論語にあれとも削たることはあらねは此説は少しく味ある歟いかに彌吉の確論承り度候○此節江戸の野菜物はいかゝや奈良は作柄宜方なれ共今日之直段つかひ茄子十に付二百文きうり壹本十貳文如斯次第に付下女共は漸澤庵ならてはありつかす勿論我等もおりに御隠居様にて被下外は新漬といふもの更になし一番に割合より下直なるはなま魚也至而大成あしの焼たる六十四文なまりふし最上大物貳百文くらひ也このほとなすのさしみは松魚のさしみの直段也八百屋の賣に来るよりは店は行て買ふかやすし八百屋のうら直に畑なればたらぬは切て直にうるなどのわけ故也○奈良團扇江戸より大にたかし輕少の進物御笑被下間敷候

うちならし靡かすことは奈良うちは風のたよりのしるしはかりそ

○九日 雨 けふは献上物の調とてきのふのことく與力同心か參る也○穢多共か牛を密に殺したるものあり關東には十五年吟味物取扱たれとも

一度もなし例をみるに奈良には昔より多し輕き盜いたしたる程の刑に成也めつらしきことにおもひければ段々と審に聞うちに其きもはいかにせし牛膽といふて薬に成かいかといひしに夫はたきて食ひたりといふ再ひもみたひも押而訊問せしに同じことはけしからず膽は味はいと苦からむによく食ひしといひしにいやイ、一に候哉イ、一に候得は干て猪膽にして賣しといふ牛の猪膽とは猫か馬糞したり打殺して熊膽とらむといかりしにそは猿の間違なるへしとてかたへなる人かとめしと云幼物語に似たりとていたく笑ひければ與力共も絶倒もすへきを白洲のこと故せき拂に紛し居たり尙追々と聞うちに角はいかゝせし爪はいかゝせしと問ひしにみな髪さしの料にとて大坂の商人に賣たりといふそは鼈甲或は今いふ馬爪といふものにして賣たらむなといひしにはいゝといひてよくわかりたりしかし尙おもふに牛の猪膽を笑ふ奉行か牛の馬爪鼈甲といひしはいとおかしきことなればおもはずこはいかに牛の猪膽を笑ひし奉行か

獅々の初穂
 は奥米壹
 斗に五百文
 用人に五文
 升給人五文
 文に五文也
 にかまざる
 用出する入
 ことなし一
 笑也
 下の食物
 少し第一に
 いわく野菜
 ろなく無餘
 義味をなす
 けもくらす
 も不便也
 れはともて
 々々魚類も
 られずこの
 義第一の難

すもゝの梅干に似たることいひしはいかにとて失笑せしかは又與力共か
 たへを向きたり○けふは先格に獅々舞來るみな伊勢のもの也といふ也
 一刀に袴をはきさゝらを持或は猿田彦といふものも加りて一同に舞ふ也
 大鼓笛の節至る靜に聞ゆ庭訓往來の獅々舞傀儡師あかたみことあるもの
 なるへし江戸の獅々舞より大に風雅也とそ○藥師寺の棟にある鮪尾は鱈
 尾かといひしか今おもふに鵝尾と書て沓かたとよむものなるへしかゝる
 ことそら覺にてかき書の更になければ誤多き也よむ人とかめ給ふな○此
 節香物にこまり澤庵をかふけふその見本來る至る短かく小也且その色江
 戸の澤庵か雁亂してなやみしといふ體にて價又貴し食物には上下共に困
 窮也○獅々舞の日は近習の詰所といふ所へ簾をたれて近習は表に出し與
 方等参りすきみする也廣き土間へ筵を敷みたりに人のいらぬために竹
 の手すりをしておく也常に押へにいづるもの不束なるを製す體也市中又
 與力同心の子供等か多くくる也夥人數つとふ是も仕來と之事也○獅々は

曲まり刀の曲茶碗又は太鼓のはちを投ることなど粗江戸に同じされ共み
 な袴にて一刀を帶白たひなれば品よき也藝は田樂又はかる業などいふも
 のを合せたるものにて江戸の太神樂を少つたなくして數多く體よき也
 ○十日 晴 暑甚しけふはきのふの獅々舞雨にて半に止しを繼てひる
 後より來りて舞ひしいとかしまし

○十一日 雨 境奉行柴田日向守父は奈良奉行に五十五ヶ年前病死し
 たりこたひ墓参として参り御役所にも参る江戸にはさして親敷もあら
 ねと久々に面謁めつらしくいろくの物語いたし食事酒など酒中酒と
 出す幼年の時かく也とて池に龜は多く居しかいかにかこの松は幼なりしとき
 はなかりしなといふ也其體を以おもへは人ははかなきもの也與力共に壹
 人も知る人なし隠居老人にもなしとて有鳥々々丁寧威と話のことくみゆ
 けしからぬもの也これにては人は長かれとはおもはず正敷名のおのつか
 らのこるほどの壽はあらさらまし日向守六半時の供揃に五半時頃來る

ひる飯のこゝろ得之處右之始末さは山の眉間寺の注進に而家來共鼎沸す
○目と鼻のあはい間近き注進に眉間といへる寺はよき名そ
○十二日 雨又くもり 與力は一乘院宮は御伶俐也といひしにあなたは
テンカサン殿下のエロ甚御利口なるに仕こまれさんした故なるへし一山
の御取締もチンとしたることゝいひたり關東とは辭大にこと也たとへは
ミシユリ御行届なされす^{御修}只今ニフヨク^{湯入}なといふ類いと多し御コンを
御かさね候へとは御酒を今一ツ召あかれといふこと也此類白洲にもあり
互に困る也○案するにチンとしたるチャンとしたるりんとしたるみな行
届たることはかねの音をかりていふ也何事も金の聲かかゝらねはよくは
出來ぬことゝみえたり人の金を好むも宜哉○夕かたに庭うち廻りて
池の魚もなきさになれてこの頃は夏を忘るゝ友と成けり
故さとをうちかたりつゝ妹と背か夕すゝみする松の下風
すゝしやと池のみきはの松によりてなれよる魚をめてつゝそみる

なといひてうらのかたの野菜植たるところへ行てなすのはなの多く咲た
る瓜いんけん豆等のつるのはひまつはりしなとみつゝなくさめ行けるに
湯とのゝかたにて女共かやよ御宅狀の來りしといふ也はや浴すること
止て來ませそはうれしなといひて大に騒くうちに用人か罷出候而御宅狀
かまいりてと誠一か來りいふ故におさともわれもとりあへず居間は歸れ
は民藏罷出て御宅狀參りて候御別條もあらせられす恐悦之御事也^{是例}にて候
若殿さま馬の御一覽も被爲濟是又恐悦といふどれゝといひながら宅狀
みかゝる遠國にては宅狀來るといへは第一に胸とゝろく也さて別條のあ
らぬ事を聞てこゝろ半はおち居いる也われは男子の狀御用にてもあらむ
かたより封を開きおさとは母上様其外女子の方を參る狀をみはしめる第
一に母上様御狀にては聲をあげぬはかりにて袖を顔へあてゝはいたゝき
かくしつゝ涙なからによむこと也^{是も又常にて}用人共之日記をよみ狀をよ
み段々みる新右衛門より問合遣し候もの之答相印の通おちもなく來る彌

吉か日記寫越せし歌もとく彌吉か武術のうちわけてつとめたりし馬と槍術は御好みの却ああらさりしはのこり多かりしされ共弓刀術居合を御好みありしは難有まてに歡はしき也お敬か狀日記穩にて心の治まりし^みえ幸三郎狀に市三郎の文通をよみて涙を落すといふに市三郎も又泣よるもつとふも故さとのことをおもひ出て誰も袖のつゆけきことにそ有けるわけてこたひ母上様御狀御尤成思召等夫婦共に敬伏數通の御狀之内にわれ汝等三人をこひおもふことかきりなしよつて一たひは逢ふことを神にちかひ佛に願ふことなれ共一大事のこと臨まは夫はかふと兼而決心して居るなれば山の動かさるかことくに心定り居るなど遊はされしに御いつくしみの深きも扱ひまた御心の剛におはしますも常の御事ながらあらはれて力つよく末長くおもひまいらせてうれしくそありける汝等か江戸にありし時かひ置しものなりとおもへはなつかしくて常には好まぬ物なれとこのころは浦賀ひしきをめすよしなどあるくたりにいたりては涙に

むせひ一くたりをいくたひにかよみ奉る也其内若夫婦かよくつかへまいらせて彌吉か母上の被召上ものは御口にかなひしやいかにとみつからこゝろみて奉るなといとく御歡のよしはわれら夫婦も承りてよろこひぬ母上の菊を御裁御庭を被成候て御心を慰給ふよし何よりの御事にて寺へまうて佛にいのり給ふ是又御心をやすくし給ふの一ツなるへしかゝるさまにて便りあるをよろこひ故さとをいひ夫婦うちより燈のもとに文ひろけ居る脇に市三郎か折々涙こほしつゝきくは母上又は幸三郎夫婦かことなるへし御隱宅にも参り先以新家のつゝかなく病人のことあらぬを祝しわか居間にも御兩かたの御入ありて一同の無事を御歡ひありて同じこと互ひにいひかはせたることそかし新家よりの狀一覽候而病人のことに心をいため候よく御手當のこと兼而も申候通養家の娘なればわけて手をつくさるへしとおもひまいらせ候夫々根本篠山等の書狀等ことく一覽くりかえ^てしみるもありて大佛の鐘夜の更行をつくるにおとろきてまたもあ

すみむとてみなくうちふしぬいつもなから母上の御狀の涙をとめあへぬより所々の狀よむさま常のことなれとしるさゝりければ御返事に替てこゝに詳に記す

○十三日 曇 ○佐久間修理より越せし遠西砲術略叙一覽文章のことはしらす一體の意いかゝあるへき先ツ近年有聞西洋火術之略而自私其說不輕以語人者余竊嘆之といふ書出し故に大に世の人にもあたり又こゝろさしのところもよからぬ様也内意はかくのことくなりとも西洋火術の書世に多くあり日本に而火術も多くあれ共もとより西洋より來りたるものなれば西洋の詳なるほどのことはいかゝあるへきや然るにこの人かゝるものをあらはせしはもと國家に益あらむ忠告のこゝろふかきによるものなるへし世をすくふこゝろの深きは仁の一端ともいふへしかゝる深切なる書物に付おしはかりみればその人も深切なるへしよつて望乞にまかせて叙するとありたらは却ちよからんに拙くこゝろせはきものを相手にとつ

て夫を筆のとり所之はしめにいひ出せし故にわるくすると此叙文によつて砲術家などの内に而彼是いふものもあるへしと懸念する也文章は大切のものなり容易なることは書れぬことなるへし

流れ行末こゝろせよしあしの難波もこもる水莖のあと

といふ歌よみたれば彌吉かこの頃文章かくといふにつきて同人而已に對して話し置ぬしかなからわれ更に文章のことをしらす好まぬ故に修理は懇意の人故に序に可申遣とおもふ故にこゝに記す○新右衛門日記の内手鑑に 聖武帝光明皇后の經文をはしめに出せしには古筆見の鑑定あるにても半は贋物多しと也たとへは探幽の眞書三ふく對あれは一ふく宛眞書をましへ候而九ふくにしてうる也かゝる類に名古屋の似物至而上手也とは兼あきく也矢張古代よりの古金を多くあつめたるかことく眞ちうにて造り其内へ慶長以來の分は眞金をましへて賣故に人のあさかむか

るゝと同じこと也たぐみ尤可恐也○新右衛門日記之内をみるに八十一度を以^{廿八}最上とす奈良ははつか一度也しか九十度^{閏月}八十五六度は度々あり一兩日雨に^{八十三}度位也^{九十度}を以^{甚暑}器なり江戸より時候よきかことし米も少々は安し此ほと下りたり西國より出船少し是は西洋船の手當也と風聞すると醫の話也○藤左衛門墨の話に驚たるの義に付話あり過日古梅園より墨を取よせみしに百年より五十年まで位の墨あり高料は壹兩貳分也二ツ折しをつきあり龍門と云並の墨の二本かけ位也其外壹兩より二三分位之古墨來りき○幸三郎日記之内畑ものに蟲附候由奈良も同じ一兩日已來きうり段々高直に成全蟲故之よし也○蟹の目ぬきのこと用ひはいたさす遣ひ物にもいたす兼ふくみ也○上方は江戸より風邪もなく氣候も又よろし此節の體ならば米去年よりは高直になるましき程也○新家文通之内及^刀劍之話有之候道具や三四度來りたり賈物計にて少も可買とおもふ物一ツもなし刀劍のことは彌以おもひ切といふわけ也はしめは貳分計の刀

幸三郎日記
近星之事
良にては
向不心附候

を兩三度に三四十本はかり持來候まゝわけを言きかせ刀をも近習共のかたへ拭に下げたるうちを爲見たるところ此人一寸にては食へすとおもひしや其後絶^刀をもち來らぬ也○彌吉日記之内算術の稽古其外出精之よしよろし○昏のなきをいとひて日記の文字を小さくしたり昏もいらすかさもはらすよろしきまゝ已後かくの如くせむとおもへとも若母上の御覽に御差支ならば大字に復古すへし否承度候○樽蒲に用る骰子のことを賽の字を用ひ篋の字を用ひ區也官府之書物にたしかに可證書に賽とある也よつてたゞしみにしに字典に賽通作塞報也とあれは骰子の出目によりてまけかちのある定あり今俗報祭曰賽神借相誇勝曰塞とあれは賽に骰子の定あり賽珠窩と書て東涯か名物六帖には指掌雜字を引さいと訓しありされは賽をさいとしても不苦也字典篋音賽行棋相塞謂之篋又通作塞莊子博塞とあれは篋も賽も塞も同じ意之字に付古來よりの事を可改程の事はなき也仕來を改ること多く此類也此こと古き書物等穿鑿するまでもなく只一

部の字引にてよくわかることなるにかくの如しされ共尙可考也

○十四日 晴八十三 五時頃所司代を去る八日紀伊殿卒去鳴物七日普請三日之旨申來るよつて兩御門跡には使者を以申上春日社人其外には觸書出す右に付所司代は關東之御機嫌伺として出京可致處今朝より風邪寒熱に付使者を以御斷申上る尤かゝる例先々同役共にも有之候一昨日は 先帝の新典侍の局安産に而 皇女御降誕之旨申來るよはさま／＼乍申恐入たる御事也○中間草を取とてまむしにさゝれて大になやみたり穢多によく療するものありて頼しに布へ何か包みたるにて撫たるにいたみ去りて快よし草の葉をつゝみて夫にて撫れば肉の内へのこりたるまむしの齒ぬけるよし也此度二本抜しと也その草を教へす段々と内々聞みるに八幡草といふもの也と也その草ひるかほとも夕かほともいふ純白又は小しく赤色を含たるもある朝良の花に似たる蔓草あり其草に凡の葉のすかたは似たり莖はまづ／＼たでに似て高さ壹尺はかり成草にて葉に八の字うらおも

てに陰然とみゆる也因る八幡草の名ある也その草をとりもみ灰汁につけたるにて布につゝみいたみ所を撫れば夫は齒のつきて抜いたみ去るよし也其草を尋ねしに垣根にも庭にも多ありおもはぬところに薬のあるもの也定る關東にも多ある草に而韓名もあるへし人の爲に成こと也よつて記す○わか薬を扱ふを近郷にて聞て法體に而被爲在候間御養父様の醫者を成さると聞しや近郷の風聞に今般の御奉行所に而は御隠居様にや醫書博覽にて御役所之醫者などは一席にして醫論に閉口せしよして又治療も上手也といへは無餘義病者のある故に格別の慈悲を以薬給りたしと民藏かたへ罷出てこと／＼敷願ふ也よつて人の薬を不與譯をわれに聞て民藏申論歸したり風聞の誤可恐々々○此ほときり／＼す多しさわらのの捉來て庭に放したり

○十五日 晴八十六 風邪に而めつらしく平臥也尤さしての事にはあらず

昨日腰痛の甚しさに按摩を漸に而壹人つれ來れり大津よりは下手也され

共三百文遣すはしめて來る事故に飯にても給候へとて別に百文遣す是は御奉行さま故無餘義次第なるへし○きりくすをかこへ入しをみてうきになくかたまのなかのきりくすおのか聲をや今うらむらむ昨日人の短尺もとめければ蓮といふ題にて

はなのうちに實をも結ひてはちす葉のあたならずさくこゝろをもみつと書しに柳助か難してはちすとはかりならはよからめにはちす葉とよみかけて花を賞することはきかすといふよつて手元にあるものをみるにさしあたり證歌なしめつたなるものをもやりかねて止ぬ頃日柳助かかやり火の烟といふ歌をよみければけふりけふるなどいふへけれどもけふといふことをきかすけふとめは御成先の御道筋なるへしなとされこといひしにけふは又かれかかくいひしかは戯に

はちす葉の濁の露をあらはるゝこれやかやりのけふり返しかといひ遣ければ返しに

はちす葉のはなのけしめやいかならむけにかやり火のけふはつたなしと書越したり○春中花なとくれたる町人共のことく物遣して返禮せしに例のうたよみかは上とうはつゝみして短尺壹枚を禮として差出たり開きみれば

いや高き檜の廣葉の露ちりてうれしなみたそ袖にあらそふ

とあり夫を勝手方役所迄出したりよほとよくよむとみえたり前の蓮葉のされ歌はおさとの代詠せし也同人病氣已來少も歌よめす今日はしめて也○十六日 くもりおりく雨八十五度也 けふも平臥なれ共午後快よし褥上にて書見いたす少々の風邪なれ共例の足ひゆる症の發れり是は母上よりの御讓也

○十七日 くもりおりく雨八十五度 けふは大に快先ひけをそり髪を結ひたり月代は遠國故おそれてすらす○此ほとみなく百姓のことし作物計にかゝり居る也是はいつれも野菜にこまる故也戯に

ほととぎすなくよりまれの瓜茄子ひ高きねをのみ雲井にそきく
終日はたけにくたひれてぶたれたるかことくに成焼酎をのみてねたりと
いふものあり高き日備になるへし

○十八日 くもりおりく雨八十五度也 ○庭のうちに柿の木多しこと
しはみつかす去年多なりたる故といふ也壹本去年もなりことしも夥成た
り是は澁かき也澁かきにふさかり年なしといふ也もみちありめたしより
五月のけふまで常にはなよりも紅に紅葉する也さて常に落葉すること
はるも今も同じこと也されは陽陰互に根と成て雨盛ふることばなき也是
天地のこゝろなるへし天地のこゝろをしりなから雨其身はかりよく盛の
みあれとおもふはいかに威南塘か人は苦蟲といひしはおもしろし何事も
天地にまかせ苦蟲の苦を人間の役とおもひてつとむるにしかしとおもふ
也○西大寺の古銅器のおしかた取らむとてかり置しにある人のいひしは
此物當時もて什物にはあらず至近く土中より出しものなれば買上にし

て可然といひければわか古物を折々愛翫するといふは只いにしへの人の
質朴にしてこゝろを用ゆるの至而深切なるをみて後世の薄く成行こゝろ
のいましめとするまで也器は新をす脱アルカと書經にもいふにはあらずやよつて
試にみよ卓の上にも何にも古きのみを好みて用ひしはあらずといひてこ
ゝろのうちにはこはけしからぬ事哉とおもひければすくに西大寺へ返した
り尙おもへはもしや寺僧の金にかえて古銅の火の多きといふ江戸などに
出して焼失なふことのあらは可憐とこととおもひければ古銅をよく圖し
て御役所の記録にも留以後我等は轉役しても巡見の者のあらむ時には必
す見すへき寶物のうちに加へて永世西大寺の重器とせよとの事與力共に
かゝせてもとしたりこれは六七日前のこと也きのふ同心共を大坂へ遣し
て歸りしの話には竊に大坂へ僧の持出せしに八百兩までに價せしものあ
りたるにうらさりしに尙價をまして千兩に買はむとまでいひしよし也已
前夏とか般とかの笏とか爵とかの賣物水府にて三百兩までに望まれしを

大坂の大商か七百兩にふかひしこともあれば偽と計もおもはぬ也

○十九日 晴八十七度 きのふ植村より鮎の鮎をくれたり鮎屋の名吉野郡下市御すしや彌助とあり来る廿一二日頃との札あれ共尾州すしの類なるへしとおもひければ直に開たりきのふ頃漬たりとみえくさくなしこれは淨瑠璃本にいふ維盛を婿にせしといふ鮎やなるへし至る舊家のよし也此すし京攝等にも高名にふ此ほとは日々一石宛のすしをひさくといふいか成下直なるも一桶七匁五分より下直なるはなしといふ也さはとに美成ものにはあらぬ也けふ留役の瀧澤氏の侍つとめたるもの来る是はならへ参る時具足の宰領にして来りしもの也奈良より七里はかり成所の御料所之百姓にふ作男の二人も遣ふもの也一旦出府してこの春迄瀧澤にさふらひ勤居歸國の時にわか供に成上りし也よきものとみえ厚く瀧澤の恩に感し居同人方にて暇くるゝ時貰ひし麻上下を大切に於て寶物にしておくよし也遠國ものは直なればめつた成事は出来ぬ也予にも右之縁に於鎮守の神へ

郡山城主付
京出火に
人注進あり
し山あり
郡山あり
三里あり
戸里あり
の火事
消火す
け火に
不滅
阿房
な合は
け也

まいらせるもちを搗たりとて呉たり八寸の重まき繪立派なること也もちは丸菱をいれたるもちにて青柚をいれたるきなきを附て食ふ也われ奉行中は出入事に於出居ならは立入はならずと民藏かいひしに奉公人もあれば自然出入も出来るなれ共祖父代々今に南都の奉行所の鬨をこえしことなしわれか恩を謝する故にこそ来りけれといひよし也

○廿日 晴 茄子などあまりに高き故にブはさみにてとりみしにかねさし壹寸の茄子十に付二十五文也といふけしからぬ事也江戸の茄子は如土奈良の茄子は如玉○四頃に至り京都大火昨初夜より之出火に於今以焼居候と之風聞に於大に騒く八時過注進あり京都四條のみせ物小屋を出火昨夜亥刻を今朝五時頃にいたりまた鎮火せすと之事也凡十町はかりも焼候由更に風なきに一夜かゝり十町焼くるを消留ぬも火の足ののろきもみな風等によるなるへし○俊藏方の小女奈良の在のものに於利口なるもの之由もとより一天下に奈良程の所はあらぬ心得に付大佛は江戸にもあらず